

# 西条岩船(東屋敷添)遺跡発掘調査報告書

平成10年度都市計画道路岩船～西条線  
道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査

1999年3月

中 野 市  
中野市教育委員会

# 目 次

## 第一章 地形と歴史的環境

第1節 地形と土層堆積状況	1
第2節 遺跡周辺の既発掘調査の概要	5
第3節 「市河文書」と西条	7
第4節 遺跡周辺の歴史的環境	9

## 第二章 遺構

第1節 遺構の広がりと言物出土状況	11
第2節 原始・古代の遺構	12
第3節 古代の製鉄鍛冶址	14
第4節 中世の建物址	19
第5節 湧水址・大溝・井戸址・土坑	20
1 湧水址	20
2 南北方向の大溝・小溝	21
3 横（東西）方向の大溝	21
4 井戸址と土坑	23

## 第三章 遺物

第1節 弥生時代の遺物（A）土器（B）石器	28
第2節 古墳時代の遺物（A）土器	30
第3節 奈良・平安時代の遺物	
1 土師器（A）甕型土器（B）坏・椀型土器	30
2 須恵器（A）短頸壺（B）壺（C）長頸壺（D）甕（E）坏（F）坏蓋（G）灰釉陶器	30
3 金属器（A）帯金具（B）鉄鋌滓（C）関連遺物 羽口	36
第4節 中世の遺物	
1 石製品（A）凹石（B）石摺鉢・石搗き臼（C）回転石臼（D）茶臼（E）砥石（F）硯	37
2 金属製品（A）鉄製品 鏃・釘・その他（B）銅製品 刀装具・鍔金具・銭貨	43
3 石造物（A）五輪塔部材（B）研磨台石	43
4 陶磁器（1）国産陶磁器（A）珠洲焼（B）常滑焼（C）古瀬戸	48
（2）輸入（貿易）陶磁器（A）青磁（B）白磁（C）染付	50
5 土器（A）内耳土器（B）中世土師器（かわらけ）	51

第四章 まとめ・報告書抄録	57
---------------	----

## 図版目次

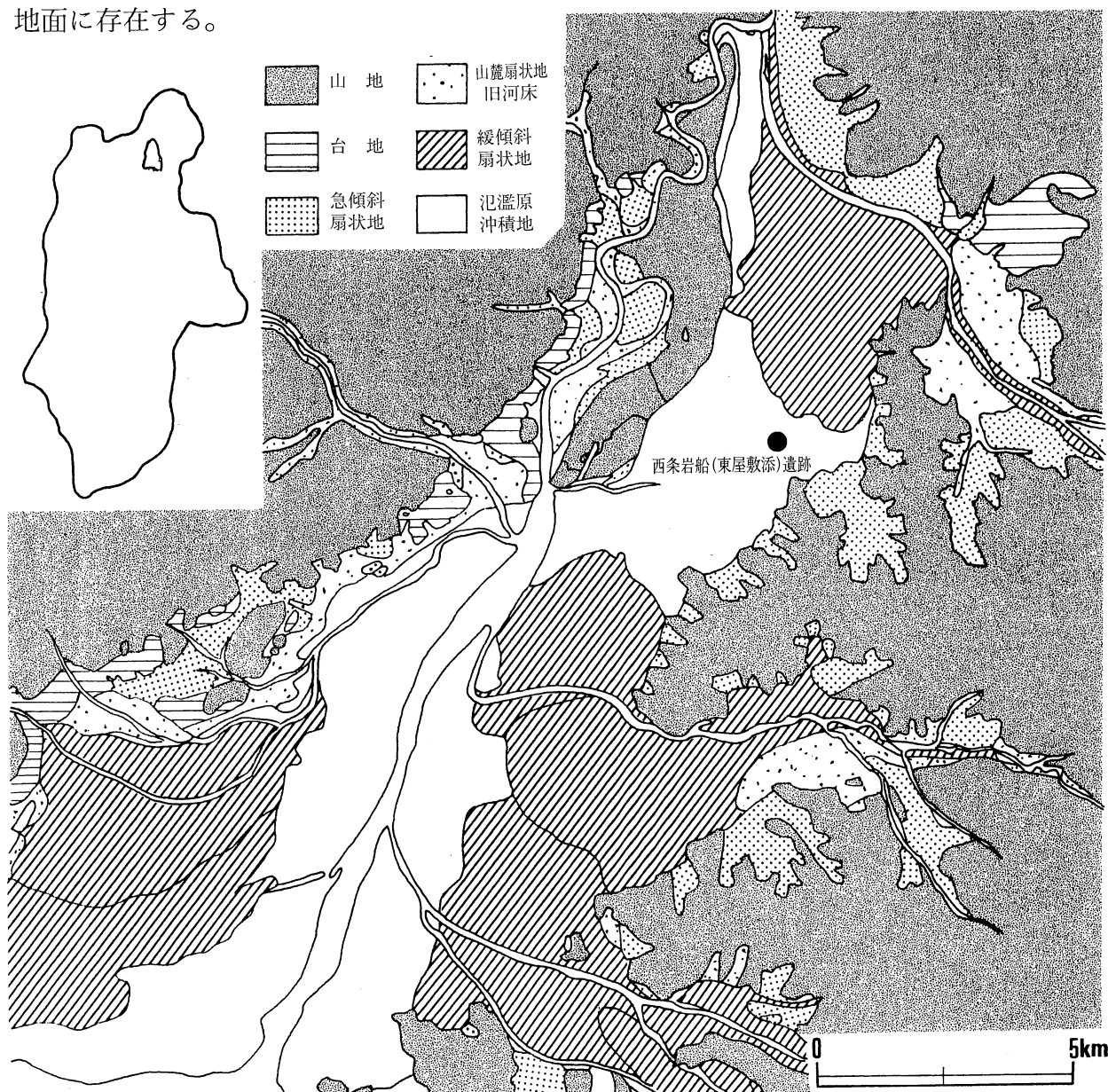
第1図	西条岩船(東屋敷添)遺跡の位置(1)…	1	第36図	回転石臼(2) ……	39
第2図	西条岩船(東屋敷添)遺跡の位置(2)…	3	第37図	茶臼…	41
第3図	西条岩船(東屋敷添)遺跡の位置(3)…	4	第38図	銭貨拓影…	42
第4図	周辺の遺跡…	5	第39図	硯・石摺鉢など…	44
第5図	中野郷推定地…	8	第40図	石摺鉢・凹石など…	45
第6図	江戸時代後期の西条村絵図…	10	第41図	凹石・石摺鉢など…	46
第7図	グリットの配置…	11	第42図	砥石…	47
第8図	遺構全体図…	13	第43図	石造物…	48
第9図	平安時代の住居址(SB2) ……	14	第44図	鉄製品…	49
第10図	平安時代の製鉄鍛冶址…	14	第45図	瓦質土器など…	51
第11図	古代の溝とピット…	15	第46図	内耳土器(1) ……	52
第12図	土坑の集成…	16	第47図	内耳土器(2) ……	53
第13図	SX6遺物出土状況…	17	第48図	中世土師器(かわらけ) など…	54
第14図	鍛冶址…	18	第49図	珠洲系陶器拓影(1) ……	55
第15図	SK3 ……	18	第50図	珠洲系陶器拓影(2) ……	56
第16図	中世の住居址(SB1) ……	19	写真図版		
第17図	中世の建物址…	20	写真1	南から見た1号住居址…	59
第18図	大溝SD2・3・4・5 ……	22	写真2	東から見た大溝2・3・4 ……	59
第19図	大溝SD6 ……	24	写真3	西から見た中世の建物址、大溝4・3・2・5 ……	59
第20図	井戸址・土坑・柱穴・大溝の検出…	25	写真4	東から見た大溝6 ……	60
第21図	井戸址…	26	写真5	南から見たSX6 ……	60
第22図	SK15 ……	27	写真6	南から見た井戸址…	60
第23図	基本土層…	27	写真7	鉄滓(1) ……	61
第24図	有柄鏝…	28	写真8	鉄滓(2) ……	61
第25図	弥生～古墳時代の土器…	28	写真9	帯金具…	61
第26図	弥生時代の土器の拓影…	29	写真10	銚金具…	61
第27図	平安時代の土器(1) ……	31	写真11	硯…	61
第28図	平安時代の土器(2) ……	32	写真12	常滑系陶器…	62
第29図	奈良・平安時代の須恵器…	33	写真13	瀬戸系陶器…	62
第30図	奈良・平安時代の須恵器拓影…	34	写真14	瀬戸天目…	62
第31図	平安時代の須恵器拓影…	35	写真15・16	瀬戸袴形香炉…	62
第32図	平安時代の須恵器…	35	写真17	染付・白磁…	62
第33図	古代・中世の金属器…	36	写真18	青磁(6～21内面) ……	63
第34図	回転石臼(1) ……	38	写真19	青磁…	63
第35図	回転石臼(2) ……	39	写真20・21	青磁の内外面…	63

# 第一章 地形と歴史的環境

## 第1節 地形と土層堆積状況

長野県は2,000～3,000m級の山々が聳え、その間に盆地が存在する。盆地に沿って大河が流れている。その盆地には、回りの山地から流れ出る河川による扇状地が発達している。

中野市は長野盆地の北端に位置し、北は高社山(1,351.5m)によってさえぎられ、西に千曲川が北に流れている。市の中核部は、夜間瀬川によって形成された中野扇状地面に存在する。



第1図 西条岩船(東屋敷添)遺跡の位置(1)

上流の山ノ内扇状地は、現在は開削されているのに反して、下流の中野扇状地は、生成を継続している。地質学では、新生代—第四紀完新世—新期扇状地堆積層に属する。

中野扇状地の扇頂は箱山の北、480 m付近にあり、扇端部は間長瀬・江部・新保あたりで、330 mである。規模は東西約4 km、南北約6 kmで扇形をつくる。勾配は1/20～1/60である。新保の南方は平坦面で、千曲川の氾濫原である。

扇状地の表層は、砂壤土の深い場所があり、その間には、近世まで乱流を受けた場所が、幾筋も存在する。遺跡東方の長野電鉄線路付近がこれに該当する。この乱流の砂礫の岩質は、当然、夜間瀬川河床のものと同一で、玢岩<sup>ひんがん</sup>が優勢である。

遺跡に近い南方（中野プラスチック）のボーリング調査によると、深度2 mまでは砂礫まじりの粘土、8 mまでは礫まじりシルト、16 mまでは砂礫混じりの粘土、18 mまでは砂礫、24 mまで砂礫混じり粘土、25 mまでは砂礫となっている。

遺跡は全体には約1/50の傾斜で南に傾斜している。しかし東西では、起伏がみられる。調査地のA-6北では標高355.8 m、A-25では353.8 m、A-37では356.8 mで、約3 mの高低差がある。これは湧水と乱流が関係しているとみられる。

基本層序はつぎのようである。

I層、表土。II層、耕作土。II a層、攪乱（I・II層とも砂質が強い）。III層、黒色腐植土（攪乱層）。

III a層、III層に灰色混じる。III b層、III a層より灰色多めに混じる。III c層、III層より砂質が強い。

III d層、III a層に焼土が混じる。III e層、III a層に赤茶色が混じる。III f層、III eより赤茶色が少なめに混じる。III g層、III a層に細礫が含まれる。

IV層、暗灰色で砂質が強い。IV a層、IV c層より礫（3 mm～）が少なめに含まれる。IV b層、IV層に黄色粒が混じる。IV c層、IV層に礫（3 mm～）が含まれる。IV d層、IV b層に黄色塊が斑に混じる。

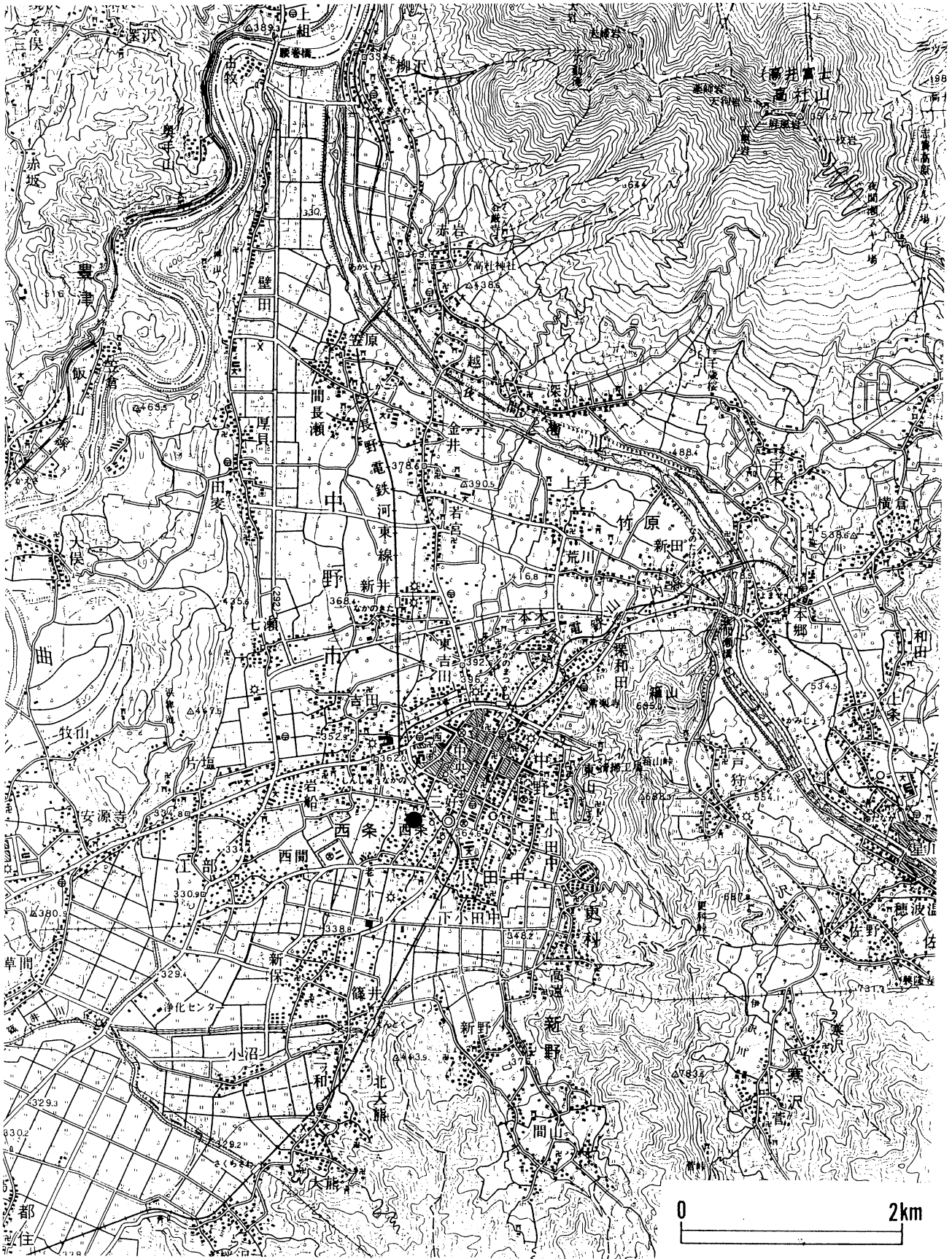
V層、黒褐色土砂質性（一部分に灰色砂土がある）V a層、V層より黒色が薄い（明るい）。V b層、V層に黄色粒が混じる。

VI層、明褐色土に茶色、黄色の粒が混じる。

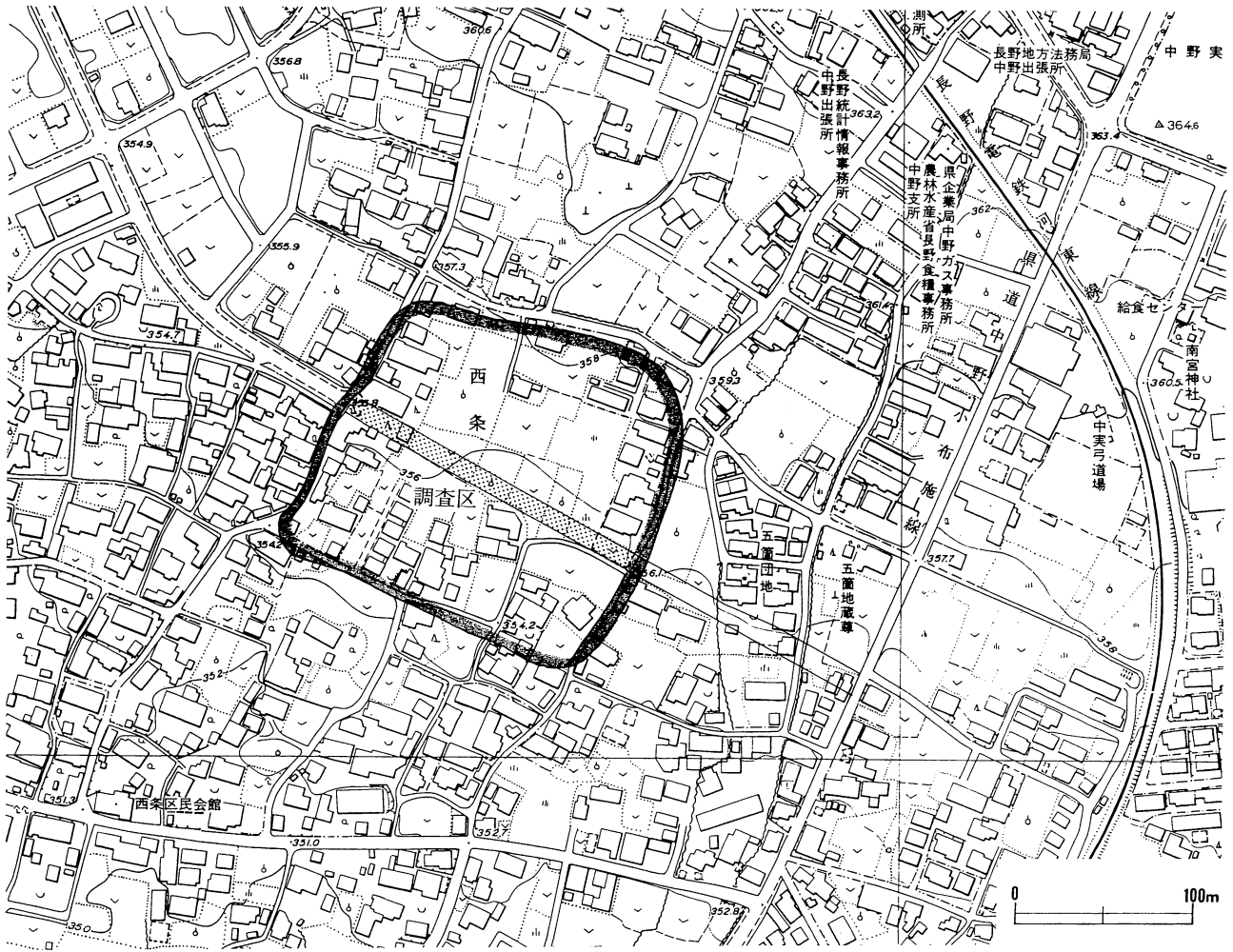
VII層、茶褐色土、粘質が強い（弥生時代遺物包含層。VII a層、VII層に赤茶色酸化物を含む。

VII b層、VII a層より赤茶色酸化物が多め。VII c層、VII層より暗褐色が斑に混じる。VII d層、VII層に細砂が含まれる。VII e層、VII d層に黄色塊が混じる。

VIII層、灰黒色シルト（遺物は包含されない）。VIII a層、VIII層より黒色が強い。VIII b層、



第2図 西条岩船(東屋敷添)遺跡の位置(2)



第3図 西条岩船(東屋敷添)遺跡の位置(3)

VIII層に茶赤色が混じる。VIII c層、VIII b層に黒灰色が混じる。VIII d層、VIII c層より黒灰色が強い。

砂礫粒径

細礫 2.0~1.0mm

粗砂 1.0~0.5

中砂 0.5~0.21

細砂 0.21~0.13

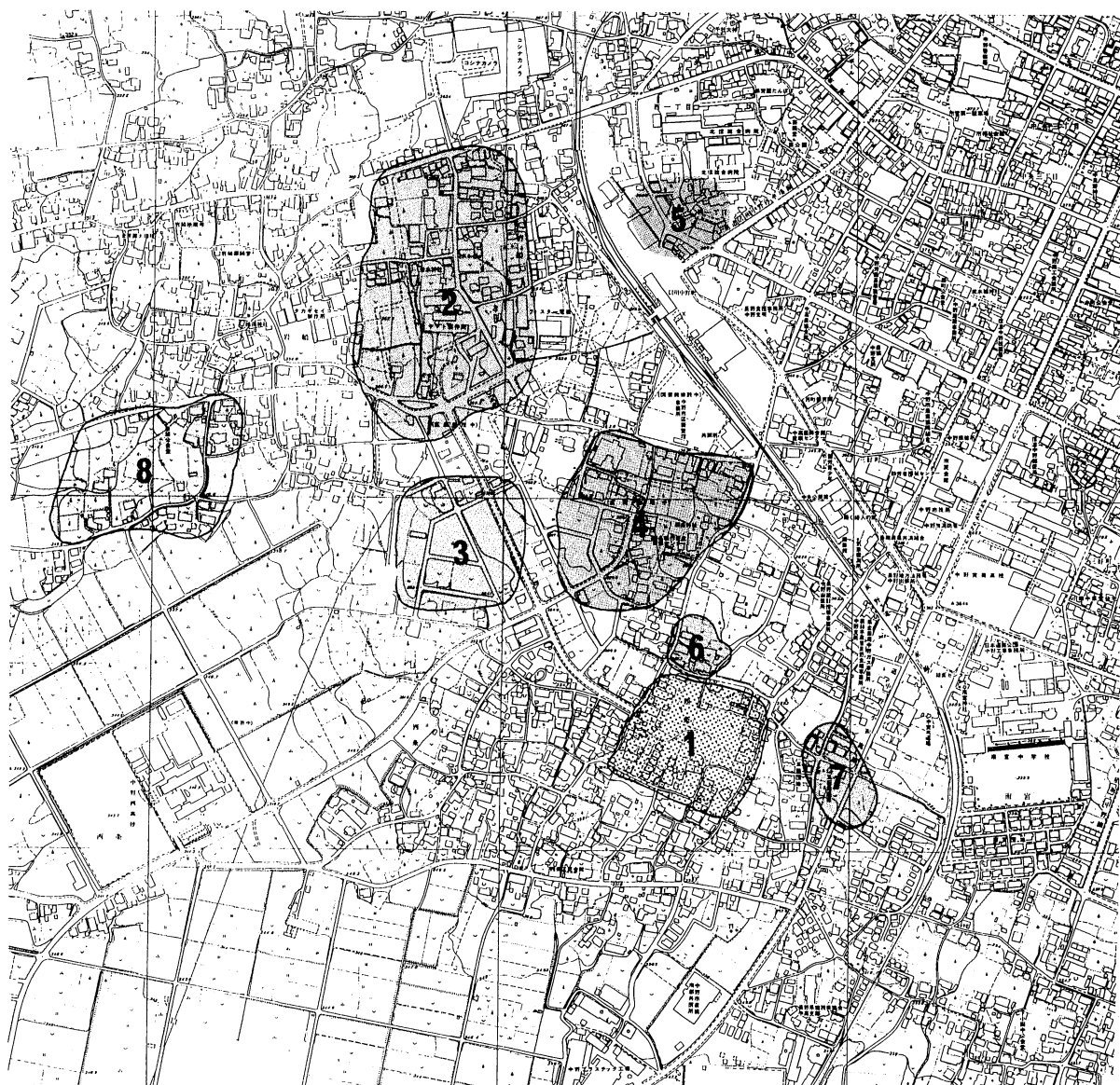
極細砂 0.13~0.046

A-25の層序は、I層 耕作土9cm、II層11cm(にぶい渴7, 5・6/3、III b層36cm(渴灰7, 5YR4/1、炭片あり、III C層7cm(渴7, 5YR4/3)、IV層80cm(渴7, 5YR4/6)鉄分あり、V層50cm(暗渴7, 5YR3/4)、IV層17~cm(渴7, 5YR4/6)平安時代遺物包含層で、下層は橙7, 5YR(粘質土)の下は、砂礫層となる。

## 第2節 遺跡周辺の既発掘調査の概要

この項目では、中野扇状地の末端に近い伏流水の湧水地帯の小田中・西条・岩船・吉田地区の遺跡の内、偶然に発見された遺構・遺物を含め、発表された文献から概要を記す。

上小田中（東田）遺跡 1971年中野南部地区圃場整備事業中に遺跡が発見され、中野市教委では緊急発掘調査を実施した。弥生後期（箱清水式）から中世までの複合遺跡で、古代は、鬼高期から国分期に該当し、鬼高期の土器の内に小型手づくね土器・土製丸玉・白玉・管玉・曲玉などが見られ、祭祀遺跡の性格が強い。国分期の住居址が発見され。須恵・土師器・灰釉陶器が出土した。また、中国銭もまとめて出土している。



- |                |            |          |        |
|----------------|------------|----------|--------|
| 1 西条岩船(東屋敷添)遺跡 | 2 岩船岩水神社遺跡 | 3 岩船氏居館跡 | 4 西条遺跡 |
| 5 寿町遺跡         | 6 西条長屋塚遺跡  | 7 五箇遺跡   | 8 岩船遺跡 |

第4図 周辺の遺跡



**上小田中遺跡** 1933年前畑の地下1 mから土師前期の壺・甕などが発掘されている（『信濃考古綜覧』。屋敷添からは、太形蛤刃石斧と弥生後期の壺が発見されている（南宮中学校蔵）。1198年の住宅団地造成の緊急発掘では、市道から栗林式の土・石器と、平安時代の土器が地表下1.3 m付近から発見されている。

**下小田中遺跡** 下小田中区内の東屋敷・東屋敷添・西屋敷・西屋敷添と、更科区上沖を含む弥生時代・古代から中世の遺跡である。

東屋敷からは太形蛤刃石斧と、古墳時代前期の土器が1931年に発見されている。この光念寺裏の墓地は、古墳の墳丘に設けられている。中野扇状地で確認されている唯一の古墳である。

**五箇遺跡** 西条東屋敷添遺跡の東方の遺跡で、1967年地下1.2 mのところから石組カマド・木炭片・焼土がみられ、小甕・大甕9個体分・須恵器破片など平安後期の遺物が発見された。今回1998年の調査で付近のパイプ埋設工事における土層観察によれば、地下60 cm～1.2 m付近には淡黒土の遺物包含層が確認された。扇状地の乱流部分を除いた地層に平安時代の生活面が存在する。

**西条岩船（東屋敷添）遺跡** （報告書参照）

**西条長屋塚遺跡** 前記の遺跡の西北方にある遺跡で、1944年畑の耕作中に、平安時代の坏が発見されている。遺跡の規模は小さい。

**西条遺跡** 西条笠屋敷・枝垂桜にまたがる遺跡である。

**西条・岩船遺跡** 従来の西条・岩船氏居館・岩船岩水遺跡を含めた遺跡の総称である。ここからは栗林・箱清水式に伴う石器、平安時代の土器などの出土し、坏に「天」と墨書されたものも出土している。また、中国銭と珠洲甕が、各所で出土している。この地域に中野駅南口区画整理事業が計画され、1988年より断続的に発掘調査が実施された。その成果の概要はつぎの通りである。

弥生時代中期の竪穴住居址7、掘立柱建物1、溝1、後期の住居址14、土坑24、土器棺（壺・甕）墓6、平安時代の住居址7、土坑3。中世では区画と溝、埋納銭出土3箇所、珠洲焼甕に入れられた墓、井戸などである。

弥生時代中期の遺構は、約2.5 mの砂礫層の下に埋まっており、乱流の激しさを物語っている。中世の遺構は、30～50 cmの深さに埋まっていた。

**三好町遺跡** 戦時下、現中野建設事務所所在地で、防空壕が造られた際、平安時代国分期の坏が5～6枚発見されている。また、現建設事務所の建設の際発掘調査し、弥生中期栗林式土器が地下1.2 mから検出されている。

吉田遺跡（宮脇・立道・屋敷下を含む）立道から1958年、弥生後期箱清水式の土器が多量に出土した。表土50cm、砂礫の互層1.3m、黒色砂壤土30cm、褐色粘土層60cm、以下黒色壤土の層序であった。遺物は地表下2.1mの褐色粘土層に包含されていたという。遺物は、壺・甕・高坏・器台・片口形土器などである。

五里原遺跡 いわゆる五輪原で、中世の五輪塔が散在している。乱流地の河原に営まれた無縁の地である。笠屋敷などの西方に当たる。

屋裏遺跡 吉田遺跡の北方に位置する遺跡で、弥生後期の箱清水式の土器が発見されている。1975年、吉田の中世居館址と推定されている小字立道（館道）西方の屋敷地籍から、井戸跡が発見された。表土の60cmは耕作土と堆積土である。井戸の石組みの深さは1.8mで、形は円筒形に近い。上端の直径約70cm、底部は同40cmである石組みは河原石の乱石積みで、15～20段積み重ねている。井戸内の出土遺物（陶磁器）から調査者は、江戸中期の築造と推定している。しかし中世の営造の可能性が、大きいのではないかと推定される。

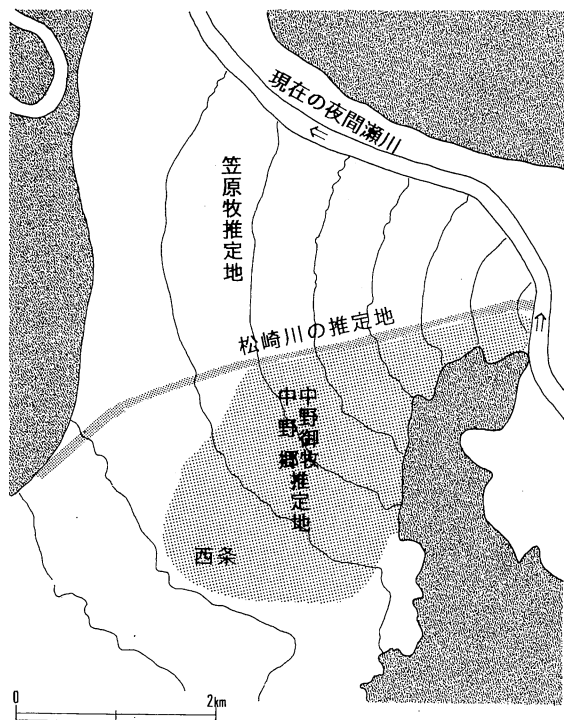
### 第3節 「市河文書」からみた西条

奥信濃の中世の歴史を知るうえで欠かせない伝来された文書は、「市河文書」である（山形県本間美術館所蔵文書、その他）。そして長野県はもちろん全国的にも、逸史とされる文書が多い。文書は、12世紀後半から13世紀末までは中野氏関係のものである。13世紀から市河氏の文書と、中野氏の文書が交じり、次第に市河氏の文書数が多くなり、15世紀以後は、市河氏の文書で占められている。

最古の文書は、平安時代末期の嘉応2年（1170）の平家（端裏書きによる）某の下文（くだしふみ）である（史料①）。侍の助弘（藤原秀郷系）を中野郷の公文（文書と記録）定使（荘官）役所から中野郷西条の下司（地頭）職に補任するというものである。

夜間瀬川の中世以前の本流は、中野市栗和田（扇頂部）から、中野市街地と同市吉田の北方を西方に流れていたと推定されている。これを仮称「松崎川・まんざきかわ」とよんでいる（『中野市誌』）。中野郷の北方は、この「松崎川」をもって画され、中野市街地、同市西条、同市小田中の一部をとりこんでいたと推定される。

この中野郷に定着した藤原氏は、在所名をとって中野氏を名乗り、西条を本拠地とした（建仁3年1202・北条時政安堵状）。しかし中野郷には、このほかにも大きく括って同流の中野氏を名乗る諸氏の名がみえる。これらの中野諸氏は、中野郷の開発領主とみられる。



第5図 中野郷推定地

市河文書（本間美術館所蔵文書）

① 某下文

（端裏書）

もんそ四まい

これハへいけの御下文

（花押）

下 中野郷公文定使所

定遣西条下司職事

侍 助弘

右以人、可令執行彼郷務状、所仰如件、敢不可違失、以下、

嘉応二年二月七日

（花押）

天慶3年（940）の「吾妻鏡」に中野御牧を藤原秀郷が拝領するという記事があり、この中野御牧も中野郷の範疇に含まれていたと推定されている。寿永2年（1183）には阿野全成（頼朝の弟）から藤原助弘が改めて、中野郷内西条の下司職に補任されている。建仁4年（1204）の鎌倉幕府下知状（判決状）には、中野能成宛に中野郷内名田10町、居住屋敷を安堵するとある。弘安元年（1278）の鎌倉幕府下知状は中野馬次郎忠能の後家蓮阿と、市河重房が西条の領地などを争った長文の裁決状で、領地が中野氏から市河氏に移動が確定した文書である。

ここには「中野郷堀内・町田並び志久見郷湯山（野沢温泉村）事」と、はじめにでてくる。堀内は①屋敷の回りに掘られた溝である。②溝（堀）に囲まれた耕地である。③ホリ（堀）とはハリ（墾）のなまったものである。墾道（はりみち・「万葉集」東歌）の例のごとく、開田された土地を呼ぶ地名であるなどとみられる。

町田は、溝や畦で方形に区切られた水田をよぶ地名である。これらをまとめてみると、中野能成祖先の開発地をさしている可能性があり、屋敷地も含まれている地名かも知れない。先の文書には西条とは書いてないが、「市河文書」の前後の関係から、西条の土地を指しているとみられる。

南北朝時代の康永2年（1343）の市河助房自筆譲状によれば、高井郡中野の西条・志久見郷の惣領職、備前国重根名之内月成の条は、市河重房が重代相伝の私領であると記

されている。この事は西条の中野氏の領地が、弘安元年以前から市河氏の領有に変わったことを示している。市河氏は、信濃国守護斯波義種から至徳2年（1385）の安堵状で、中野西条・志久見山・上条御牧などの土地の領有が認められている。

応永7年（1400）9月、守護に新任された小笠原長秀をめぐって、村上・高梨などの国人勢と、守護派が川中島の大塔で激突した。市河氏は日ごろ高梨氏などに圧迫されていたので、守護派についた。同年6月、長秀から市河興仙に宛てた安堵状は、中野西条村内の井上・須田氏知行分を除いた土地を市河氏に領有を認めるというものである。

この時代の高梨氏は小布施地方を本拠地としていた。そして強大な勢力の見られなかった中野地方をめざして北進策をとり、戦国時代初期の永正年間（1504～20）に中野小館に築城し、中野地方を掌握していた市河氏は、市川谷地方に後退をよぎなくされた（近世以後は第4節参照）。これらの戦国の興亡史を含め、平安末期からの中野氏の消長と、合わせて庶民の歴史が、西条東屋敷添遺跡の土地に、刻まれていると考える。考古学による発掘調査の成果は、中世の文書に多くみられる領主側からみる歴史でなく、地域の歴史が総合的に復原されるものである。史料「市河文書」とともに具体的に、中野地方の中世の歴史が復原されることが望まれる。

#### 第4節 遺跡周辺の歴史的環境

西条の地名の起源は、条里制の条からきていることは、ほぼ定説となっている。したがって古代には東条とよばれる地域が、中野郷内の東方に存在した可能性がある。

発掘地の西方には、弁天さんと呼ばれる湧き水があり、発掘地にも湧水跡が検出された。これは小田中・西条・岩船・吉田などを結ぶ、中野扇状地の伏流水の湧水地帯で、集落の形成に関係しているとみられる。

西条岩船（東屋敷添）遺跡の古代・中世の生活面は、別項で述べられている通り、50cm～1m埋没している。周辺の遺跡も大差ないものと思われる。この埋没面と現在の地名が、継続しているとは断言できないが、集落の南北の幹線を境に、南北に長く東屋敷添、西屋敷添の小字と呼ばれている。これは耕作地に縦列に並ぶ、中世の屋敷地を連想させる。

発掘地周辺の東屋敷添地籍は、東・西・北に道と水路で、方形（1辺約200m）をなして、条里制の坪付けを連想させる地形である。

この北方には長屋塚、笠屋敷の地名があり、ここから1941年 地下60cmから戸谷金蔵氏によって古銭が発見されている。ここから扇状地の上に向かって、下笠屋敷・上笠

屋敷・笠屋敷・西屋敷の小字名が同市松川まで連なっており、中世の居住域とみられる。

西条と新保の間に高橋という地名がある。発掘地から西南方にあたる所である。高梨氏の本拠地が小布施方面にあった寛正4年(1463)に、北信濃の守護を兼帯していた越後守護上杉房定が守護方に反抗する高梨政高を討伐しようと、一族の上杉右馬頭を差し向けた。『諏訪御符礼之古書』は「この年越後勢、高橋まで打ち向かい、在々所々に放火、これにより罰をうけ、大将右(右馬)頭十二月十二日打たれた。神の配慮有り難き。」と記されている。

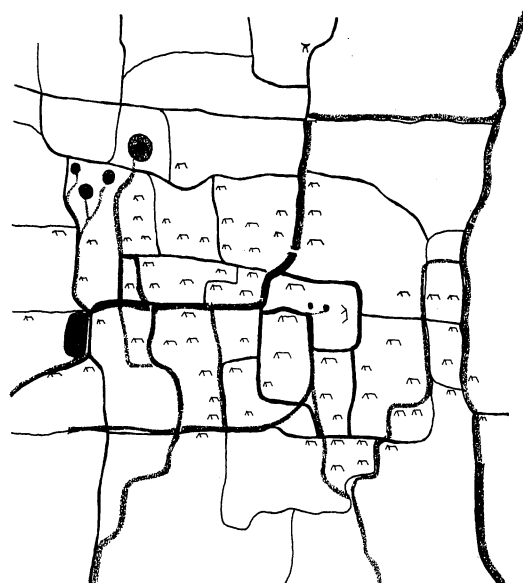
明応9年(1500)の「世間瀬文書」によると、このころ高梨氏は、西条を領有したようである。この高梨氏の館跡は、発掘地から直線距離1.1kmである。そして東方の鴨ヶ嶽城跡の主郭部までは、同じく2kmである。この城館ははじめ中野氏が築き、戦国時代初期の永正10年(1513)前後に、高梨氏の本拠地となったと考えられている。

その後、甲越争奪の時代を迎え、天文22年(1553)ころ、高梨氏は越後に退去し、西条は武田氏領有の時代をむかえた。天正10年(1582)武田氏が滅び、この地方は元の領主高梨氏が掌握した。しかし慶長3年(1598)上杉氏にしたがって高梨氏も会津に去り、この地は徳川氏の支配するところとなった。

元和5年(1619)広島城主福島正則が改易となり、高井郡高井野(高山村)に移り、ここに屋敷を構え、西条などを支配した。この時、西条西方の荒れ地を間山村の勘右衛門に命じて開発させている。この時の西条村の検地高は、762石余となっている。

寛永元年(1624)福島政則が没し、領地は幕府の直轄地となり、中野地方南部を支配した西条陣屋がおかれた。ここは発掘地から南方130mのところである(関口文雄氏宅地)。谷街道の屈折点から東へ入った所に位置している。西面の門前には湧水があり、川は「たや川」と呼ばれている。そのほか陣屋の三方は、方形に道がめぐっている(6図中央部分)。

江戸時代の西条村の村高は、延宝2年(1674)748石、安永9年(1780)754石で、明治まで同様であった。この検地高から早くから開発された土地であるとみられる。



第6図 江戸時代後期の西条村絵図

## 第二章 遺構

### 第1節 遺構の広がりとお遺物出土状況

今回建設される都市計画道路、吉田・岩船線は、延長314m、幅員12m（直線部）である。このうち発掘調査した部分は、東屋敷添地籍の延長180m、グリット設定長さ160m、調査幅平均10mである。説明は発掘順に東方より行う。グリット設定は4m方眼である（第7図）。

小字五箇との境界の南北の道路から西へ28mは、耕作土の下層は、砂礫層で遺構・遺物は検出されなかった。これより西へ27m（B8～B14グリット）でまず検出されたのは、柱穴群である。ほぼ6尺（1.8m）間隔に検出され、柱穴には表層土ば充填していた、したがって近代の遺構と思われる。しかし遺構の性格は究明できなかった。

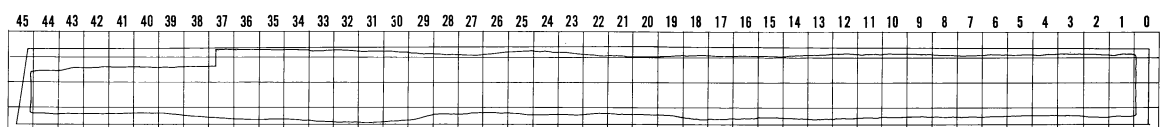
この下層には推定12×8mの長方形の溝がめぐり、内外から柱穴が検出された。ここは中世前期の住居址と推定された。関連する遺物は、摺鉢（珠洲焼）・青磁・常滑焼・砥石・北宋銭などである。

B-16～C-16にかけて幅1mの溝（SD1）が南北方向にあった。これは平安時代以前の溝と、推定された。この付近の面から、平安時代の土器、カマド址、柱穴などが検出された。また、大小の土坑が検出されている。

C-18～B-19には、幅30cmの石を詰めた暗渠の跡と推定される遺構が、南北方向に存在した。これは近代以降のものと思われる。前記の遺構の南端は、東西方向に走る大溝の東に当たる。ここから西のB-19～21にかけて、南北方向の大溝SD2が接続する。幅3～6m、深さ1mほどの規模である。ここからは平安時代の土器、中世の土器・陶磁器・金属器が検出され、注目されるのは、鉄鋳滓の多量の発見である。

B-21～24の11×7mは、前記の溝と西方の溝に囲まれた面に存在する。ここに2個所の焼土部分が存在した。焼土SX2は、細長い河原石をともっており、鍛冶炉の火床と推定される。

焼土SK4は、焼けた石と、そばに丸底の長胴甕・須恵坏を伴っていた。この南に大



第7図 グリットの配置

溝SD5より幅1 m、長さ3 mの落ち込み（土坑・SX6）があり、河原石と平安時代土器・鉄滓が集中的に検出された。

大溝SD5とつながっている大溝SD3のA-24・B-24には、河原石の集石があり、中世の土器・陶磁器が検出された。B-25は、溝に囲まれた面をもち、その西方の南北方向の大溝SD4には、上層に河原石の大きなものが埋まり、中世の石製品・石造物・陶磁器・土器・鉄器と、古代の土器・鉄滓などが埋まっていた。この大溝は湧泉の跡で、底に砂の小穴が数多く観察された。B-28～35の面は、柱穴が断続的に存在した。B・C-33からは石積の井戸（SX9）が検出され、C-32からは、土坑が検出された。前記の遺構の南には、東西方向に走る大溝SD6がある。この大溝は、東はC-17から三つの南北の溝と接続して、C-38まで84 m連続し、溝はここより南方へ折れていた。

B-38～45は、宅地内で、多くの攪乱をうけていた。平安時代の土師器・須恵器の破片、小乱流の跡、近世以後の陶磁器などが検出された。また、大溝の西方は、浅い溝があったが、途中から確認できなかった。

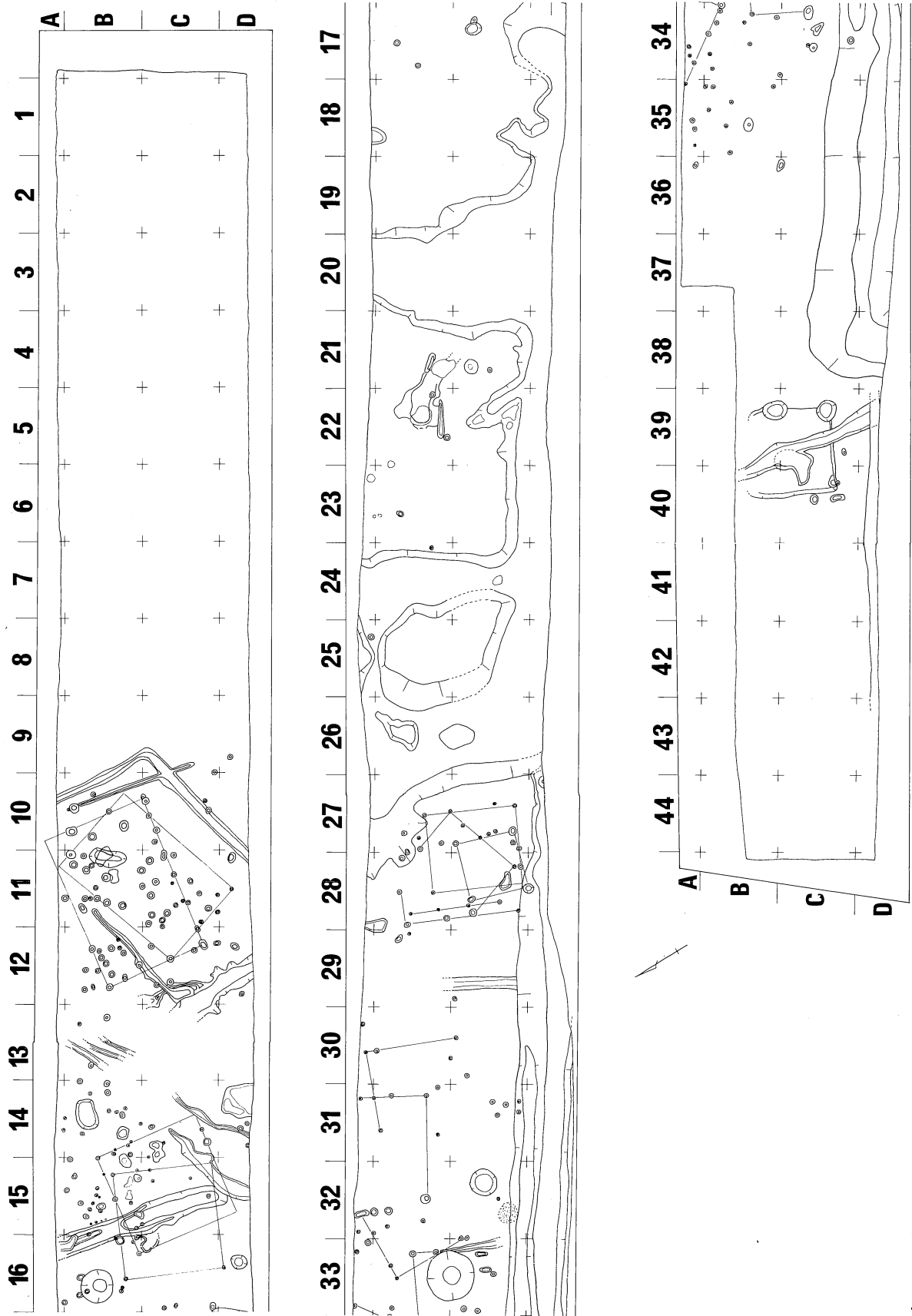
今回の発掘調査と、周辺の調査を勘案よると、西条東屋敷添遺跡の中世の遺跡の範囲は、北は現阿弥陀寺の辺から、南は西条陣屋跡を含めたあたりまでと想定される。それはこの範囲からかわらけ・珠洲焼製品・青磁などの中世の遺物が発見されるからである。西条では、一番地味の肥えた土地といわれ、古代に始まるこの土地の開発は、この地域から始まったと推定される。水路の整備から始まる古代・中世の水田開発が、当初は湧水によってなされたと思われる。

## 第2節 原始・古代の遺構

弥生時代の遺構は、栗林式の土器がみられた地表下75 cmの黒褐色土の面に確認された。土器が点々と確認され、北よりに土坑（SK13）が確認された。しかし全容は未確認で、半割の長楕円で、幅1 m、深さ10～17 cmのプランである。中から有柄石鏃が1点確認された。

古代の住居址で、明確にプランが確認されたものはない。B・C-15に幅70～80 cm、深さ50 cmの砂利の詰まった小川跡があって、南北に横断していた。この面上の中央に平安時代V期（国分期）の住居址の痕跡が確認された。カマドの石2個のほかは抜き取られ、付近に甕・坏の破片が散乱し、焼土もみられた。

さらに1 m東にも甕破片があり、焼土があった。プランは確認できなかったが、二組の

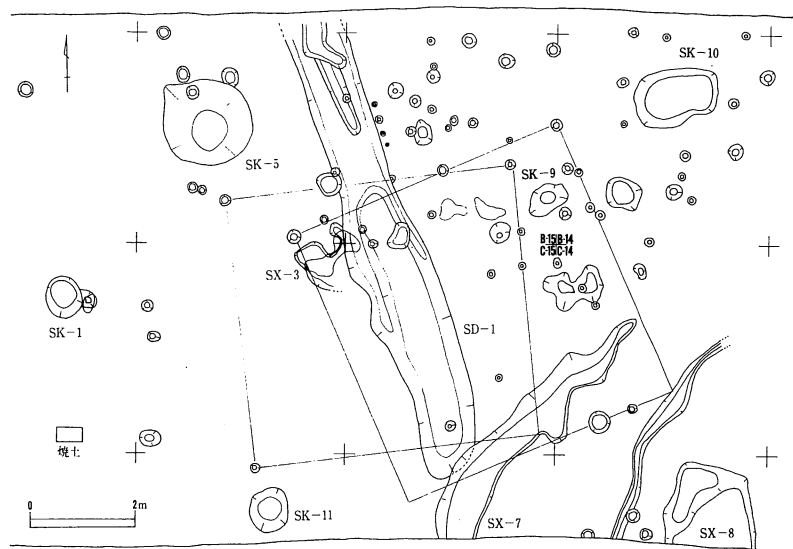


第8図 遺構全体図



方形の4基の柱穴が確認され、その間隔は、5.5mほどである。

付近の土坑（SK7・10）からは、平安時代の土器が検出されたが、特に性格は不明である。なお土坑（SK5）は近世以後のものである。



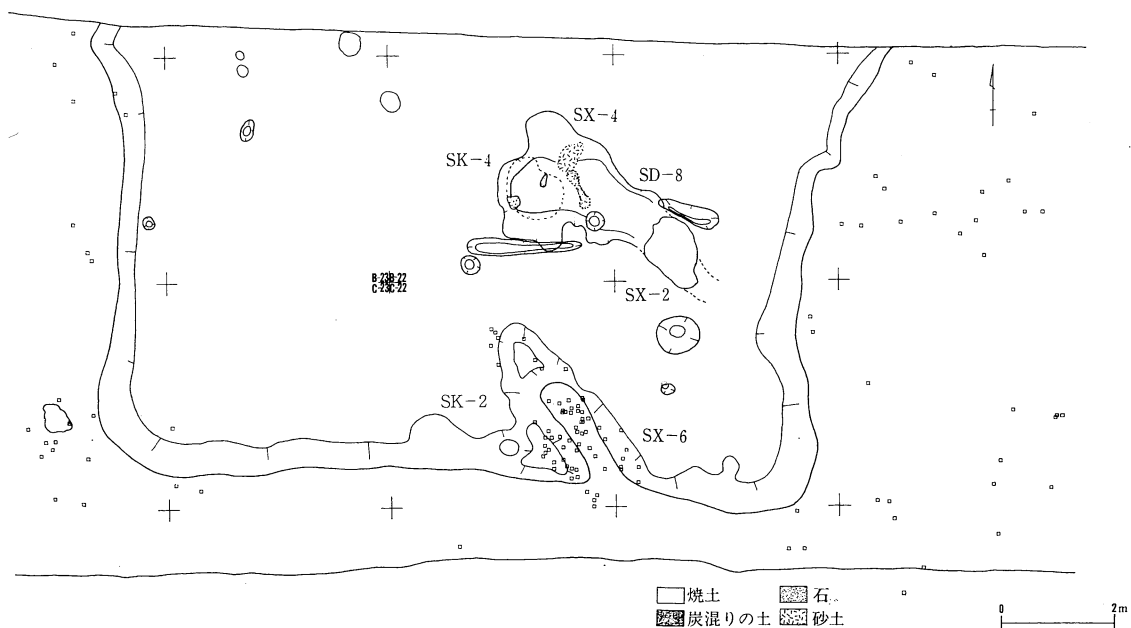
第9図 平安時代の住居址 (SB2)

B・C-20には南北方向の大溝SD2があった。溝底の砂利層の在り方から、平安時代以後の川の分流（乱流）の一つとみられる。この西に平安時代の生活面（12×7m）が、地表下70～80cmに確認された。中央に①焼土（SX2）が幅95cm、長さ1.3m以上にわたって確認された。また、さびた鉄粉（赤さび色）と、黄色土（粘土）が溝の縁まで広がっていた。この面上10cmには長さ40cm、幅15cmと小型の河原石があった。

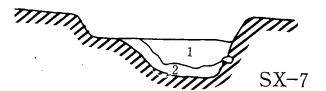
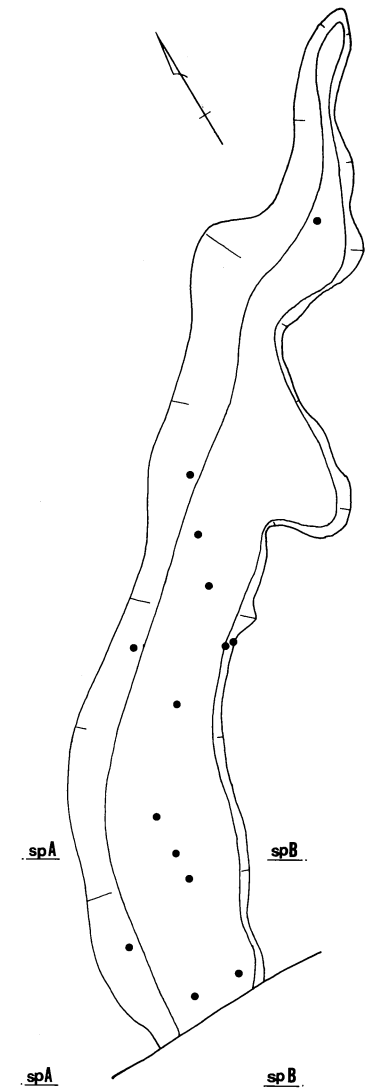
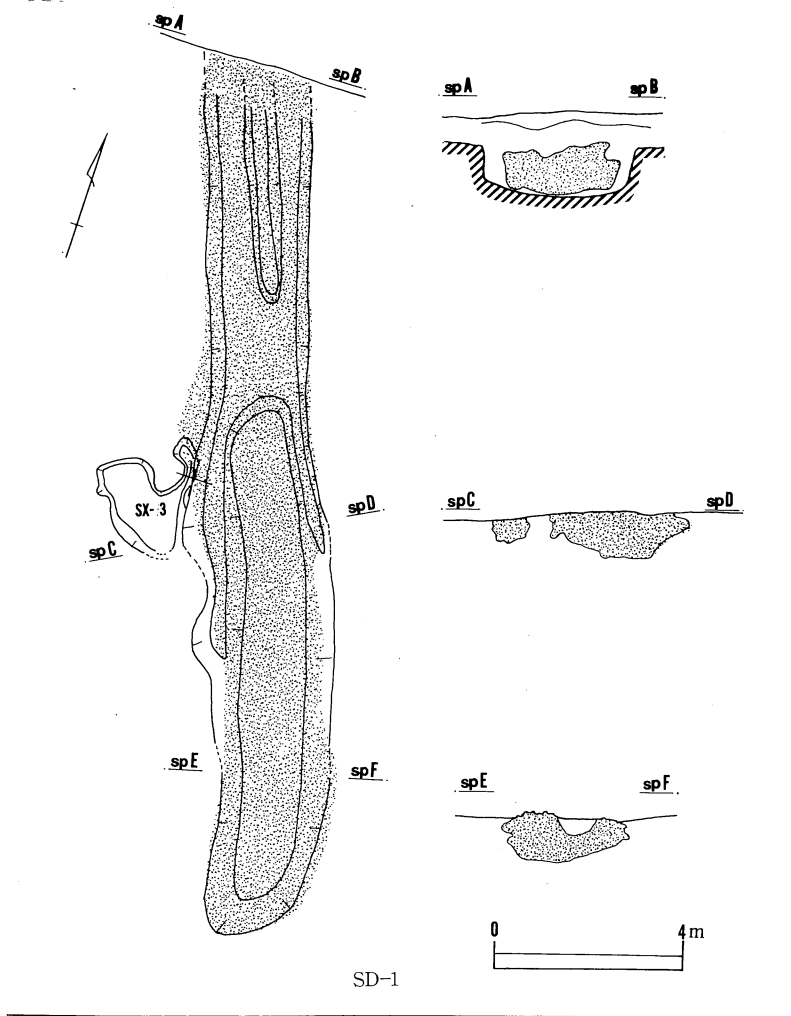
付近から平安時代の土器片のほか、鉄鋳滓・銅銕滓・銅銕帯・硯片が検出された。

この焼土面の南に、径70cm、深さ10cmの土坑（SK14）が検出された。

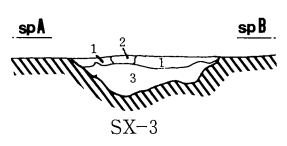
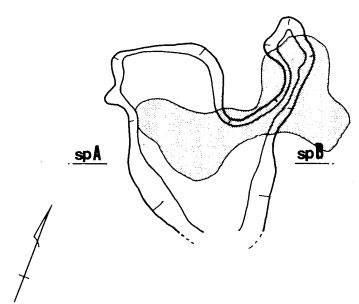
①焼土の西1mに、②焼土が1m平方にわたって確認された。その中に熱でそげた河原石3個があった。また砂・粘土もみられた。



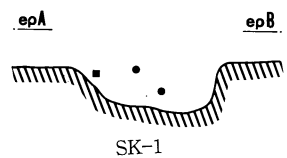
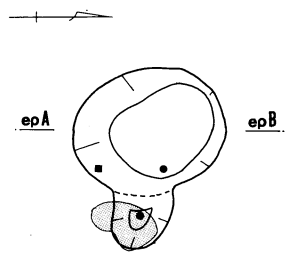
第10図 平安時代の製鉄鍛冶址



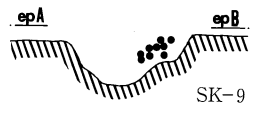
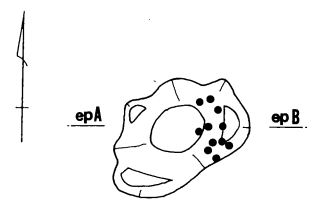
SX-7  
 1 明褐色砂質土に黒色炭土が多めに混る  
 2 1より炭が少なめ



SX-3  
 1 黒色土に赤茶色土塊を多く含む。炭が少し混る  
 2 1に炭が多めに混る  
 3 最大4cmの石群



SK-1



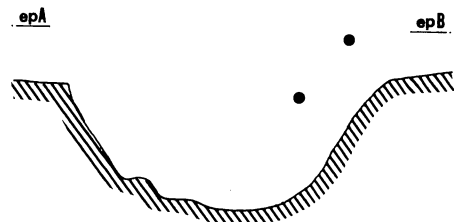
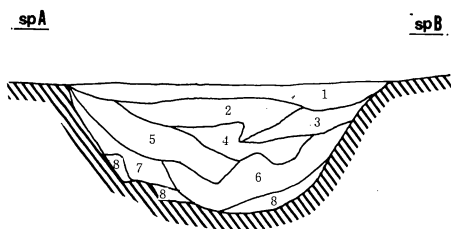
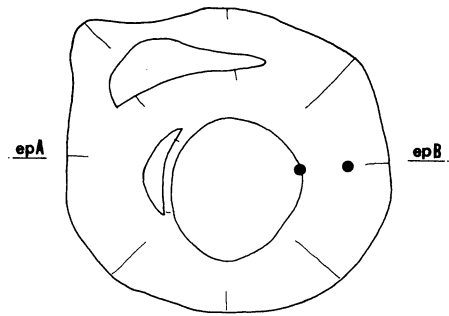
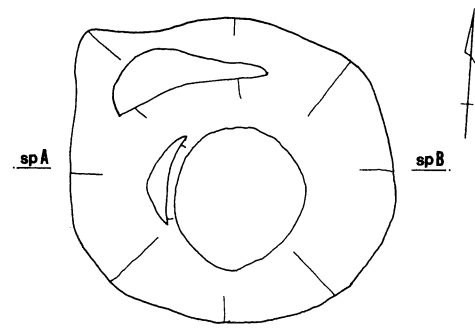
SK-9

□ 焼土  
 ■ 石

● 土器  
 ■ 石器

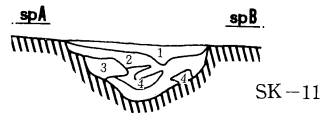
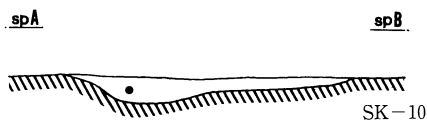
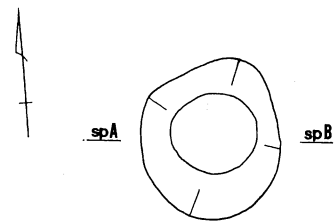
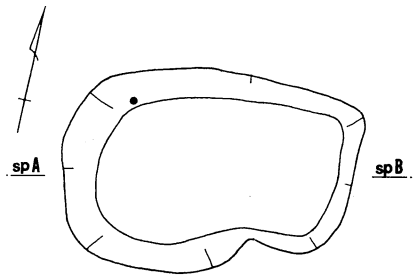
0 1m

第11図 古代の溝とピット



SK-5

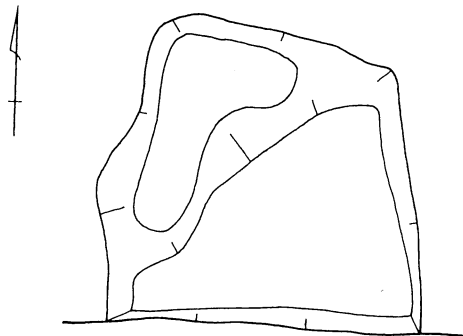
- |                          |                      |
|--------------------------|----------------------|
| 1 暗灰黄色砂土<br>(黒褐色土塊を含む)   | 5 明黄色土<br>(黒褐色土塊を含む) |
| 2 暗灰黄色砂土<br>(黒褐色土塊は含まない) | 6 灰茶褐色土<br>(しまりなし)   |
| 3 黄茶色砂土                  | 7 茶褐色土               |
| 4 灰茶色土                   | 8 灰黄色粘土              |



SK-11

- 1 暗灰色土に赤茶色塊、黄色塊が混る

- 1 暗灰色土  
2 1より明るい  
3 1より暗い  
4 黒灰色土

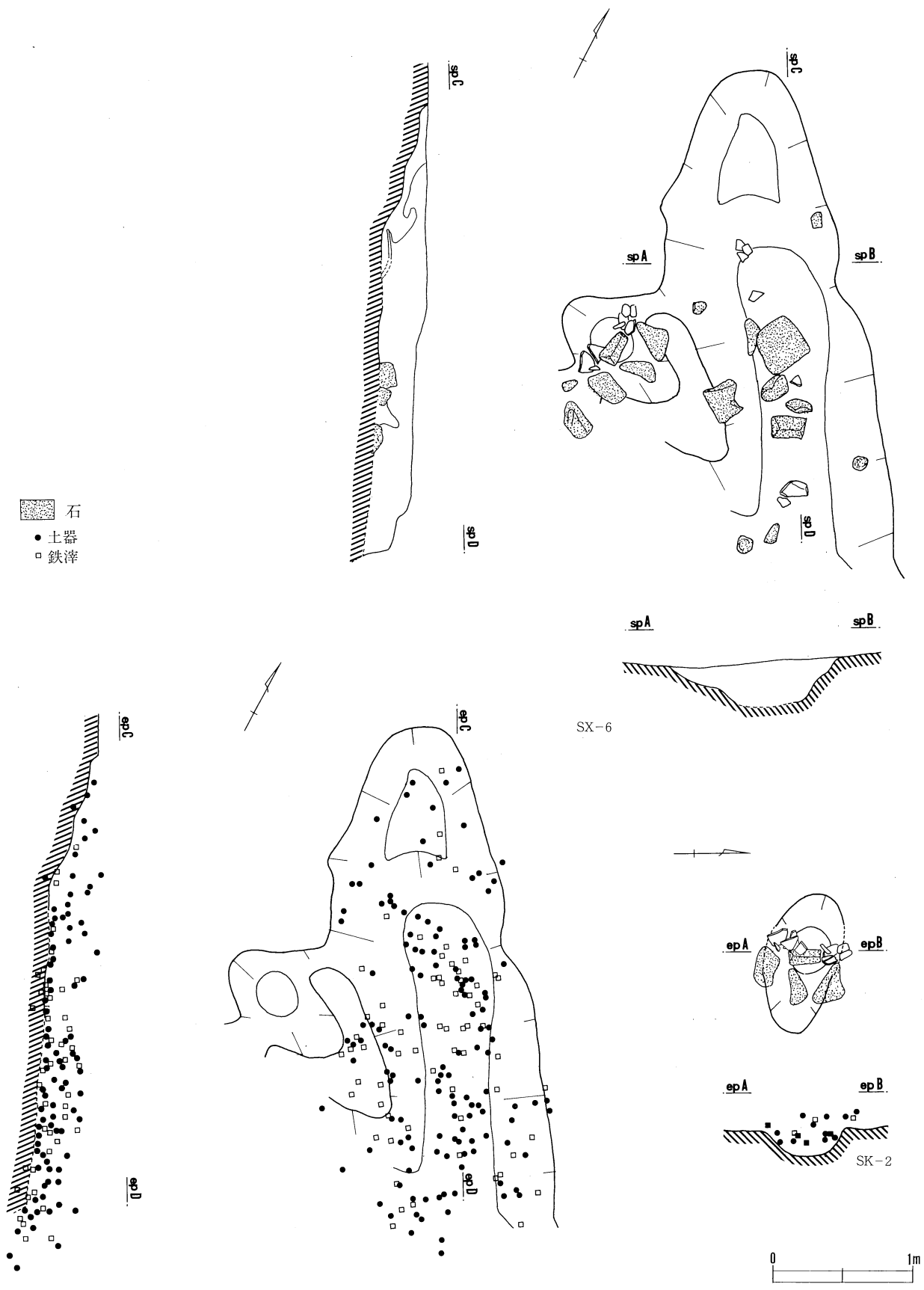


SX-8

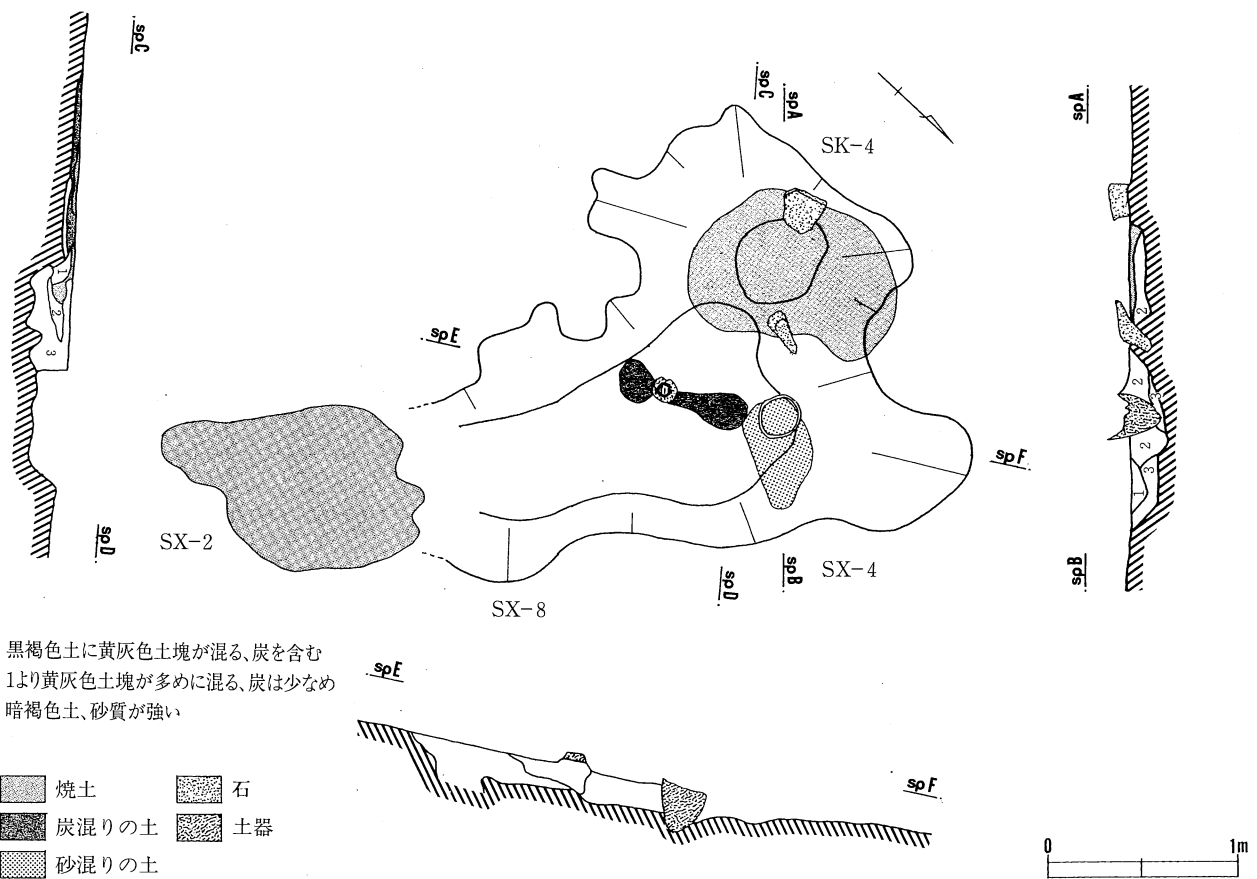
● 土器

第12図 土坑の集成





第13図 SX6遺物出土状況

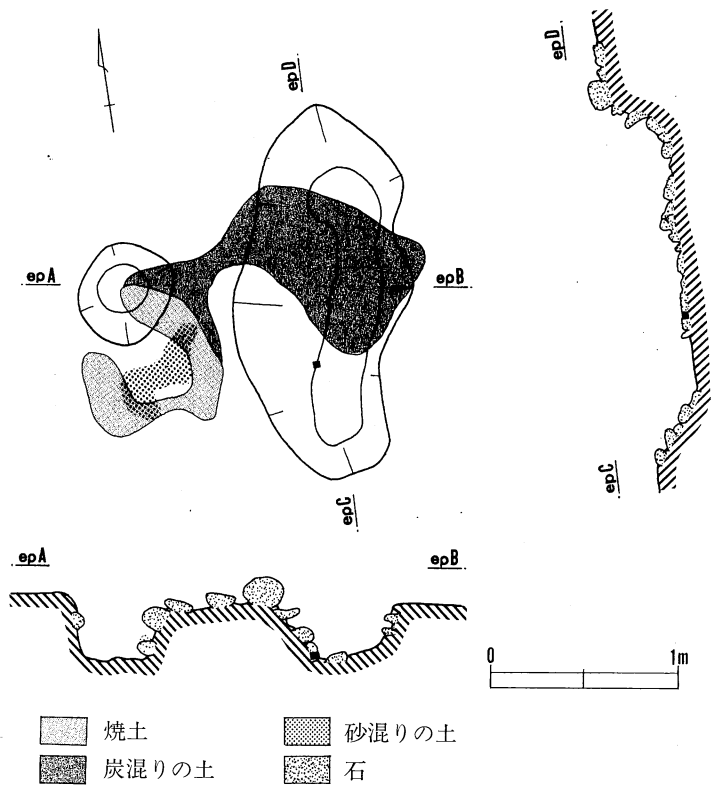


第14図 鍛冶址

またそばに平安時代V期の丸底の甕が正位に埋設され、50cm離れて須恵坏が逆位に検出された。

以上の①②の焼土面は、上部が破壊されて不確定であるが、①は大鍛冶段階の跡、②は小鍛冶段階の跡と推定される。

この面からは、建物址の柱穴が、検出されたが、明確でない。しかし北の掘削面の壁をみると、地業の堆積面をしめしている。



第15図 SK-3

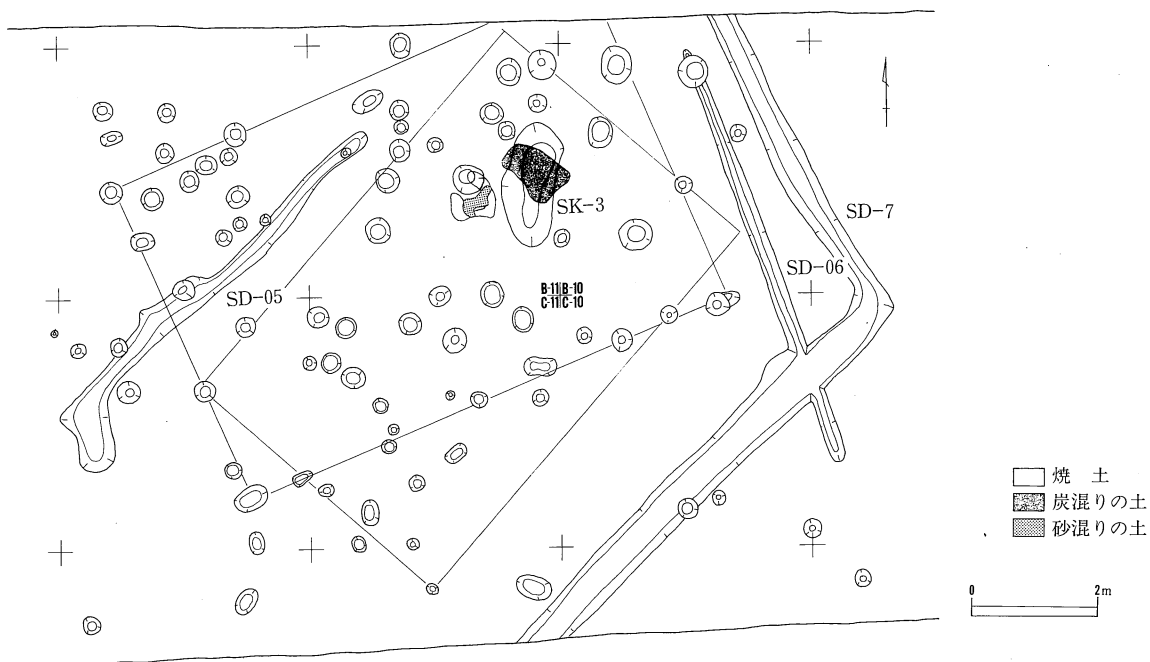
土坑（SX6）は、前述の遺構と平行に1.3m離れて南に位置し、南は大溝SD5に開口する。規模は幅1.1m、深さは、最深部で30cm余りである。

この遺構の内外から検出されたものは、河原石と平板の石14個が上部にあった。つぎに多数の鉄滓が上げられる。底面に張り付いた状態のものもあった。総数68点ほどあり、碗形滓もあった。須恵の坏は3枚以上あり、内2枚は重なっていた。また、甕の底部もあった。土師器の甕破片も多数あり、西の縁に石に挟まったりして、タタキ甕が検出された。

発掘当初は、鉄滓の存在からタタラ炉址と予想していたが、焼土面は確認されなかった。以上の諸遺物の年代は、平安時代V期の所産とみられ、遺構の年代も同様とみられる。

#### 第4節 中世の建物址と土坑

中世の住居址（SB1）は、BC-10～11から、地表下約50cmから検出された。下層は砂利層となる。2時期の住居址が複合しているとみられる。東側に2条の溝（SD06・7）があり、やや方向が異なっている。①は幅30cm長さ3.5mの溝で、これに対応する柱穴は、一部未確認であるが、4×2.7mの規模とみられる。②は一部完掘されていないが、幅15cm～40cm、横6×縦4mの溝（SD7）が巡っている。方向は北15度西にふれている。この溝に対応する北側に溝（SD05）がある。西側には溝（SD14）がある。これらの溝に囲まれた中から柱穴が多く検出された。しかし明確



第16図 中世の住居址(SB-1)

に組み合わされる状態でない。一例として3.7×2.5mの規模とみられる。大きく見ても溝の中に住居が収まっていたとみられる。そして①が古期の住居とみられる。

この二つの住居址の東に焼土・焼け石・炭が残り、カマドか炉の跡とみられる。ここには、鳥の焼骨・珠洲焼摺鉢破片などがあつた。二つの住居址内から検出された中世の遺物は、雁又の矢など鉄器3、砥石2、山茶碗・青磁片、中国銭の開元通宝・嘉祐元宝・太観通宝などであつた。以上を勘案して、中世前期・鎌倉時代末の住居の跡と推定される。

中世の建物址（BC-28・29）付近から掘立柱の柱穴が多数検出された。中に不整形の土坑をもつ、柱間3mの方形建物のほか、規模は不明確である。時期の違う方向のこととなる建物も存在する。

中世の建物址（ABC-30～36）井戸（SX9）付近をはじめ掘立柱の柱穴が検出されている。しかし明瞭に組み合わせられ、規模の判明する建物はなく、方向と複合から時期差の建物が存在する。

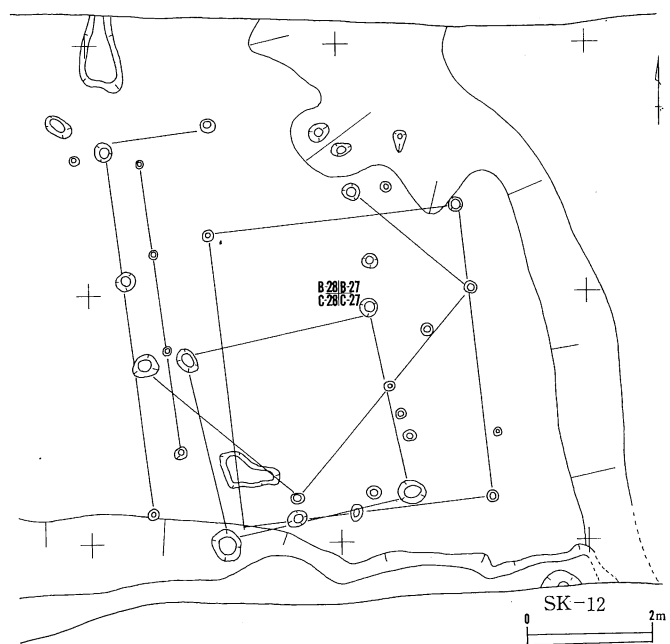
## 第5節 湧水址と大溝

1 湧水址 湧水址は、B26付近から検出された最終的な遺構である。地表下80cmから砂質の落ち込みが確認された。これを掘り下げると、大は40cmの河原石など大小の石が埋まっていた。中央部には面を揃えて、意図的並べたような箇所もみられた。

これらの石の間には、平安時代の土器破片、中世土師器のかわらけ・内耳土器・陶磁器、石造物の五輪塔部材・宝塔部材、

石製品の搗き臼・挽き臼・茶臼・硯・砥石・凹石、金属器の中国銭・鉄釘などが多数検出された。このうち、挽き臼・搗き臼・茶臼などは、意図的に割られたものがある。

この遺構の北の幅は左右に広がり、狭い所で幅5.5mを計る。そして深くなるほど粗い砂質となり、伏流水が噴出した、砂の盛り上がりがある。そして深い部分は、二か所に分かれていた。最深部は、地表下170cmほどで、この底部まで遺物が埋まっていた。



第17図 中世の建物址

2 南北方向の大溝・小溝 南北方向の大溝（SD2）は、先にも触れたがおそらく古代からの、夜間瀬川の分流の一つである。北の確認面で幅3.3m、深さは地表下160cmで、焼土（SX2）面から70cmの深さである。

この溝の中から栗林式土器片・石鏃、平安時代の土器片・鉄滓、中世の土師器のかわらけ・内耳土器・陶磁器などが検出された。また、上流から流れた遺物もみられた。

溝（SD10・11）は平安時代の住居址（SB2）の東から検出された平行する小溝である。住居址と同時期とみられる。溝（SD12）は前出の住居址の下層で検出された溝である。

大溝SD3（B-24・25・C-24）にあり、南は東西方向の大溝SD5に接続する。西方に3×7mの不整な楕円形の面がある。落ち込みの土を除去すると、北の掘削壁面より、大は40cm前後の石が高さ80cmに集石していた。この石に挟まれて、内耳土器・陶磁器（線描連弁文碗ほか）・かわらけ・搗き臼などの破片が検出された。

この付近には、底面に石が散在していたが、上下の回転石臼破片、焼土の部分も検出された。ここの石製品も意図的に割られたものがあった。

溝（SD22）建物址（BC-27・28）の西方から検出された（一部未確認）。幅60cm、深さ30cmほどの溝が、建物址と同方向に存在した。この溝は、直交する横の大溝より、古い切り合いを示していた。しかし、大溝が完掘されていないので、さらに南方に延びるか不明である。

溝（SD23）近世以降の落ち込み（SX10）の下層から検出された。古代以降の小乱流である。平安時代の須恵器・土師器破片が溝の中から検出された。

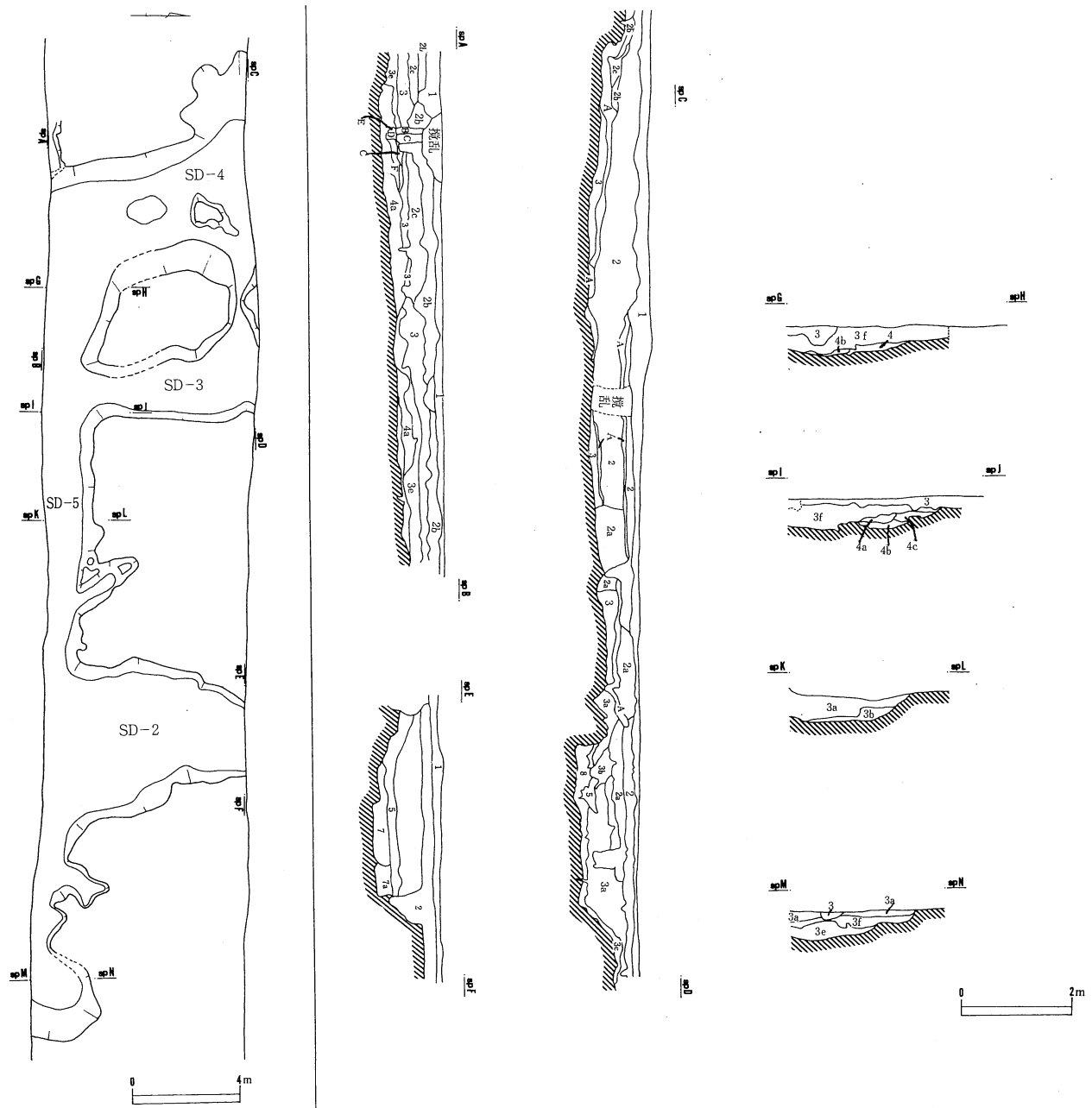
溝（SD03）は、耕作土が落ち込んだ石列で、暗渠の跡である。挽き臼の破片が検出されたが、近代以降の遺構である。

### 3 横（東西）方向の大溝 SD5・6

この東西方向の大溝は、調査区の南にあり、南北方向の溝（SD2・3・4）と直交する。東はD-17にはじまり、傾斜をもつ泥状の埋没土に、平安時代の須恵器・土師器破片・鉄滓、中世の土器・陶磁器片など検出され、底部に小石が累々する。また、北に湾入した部分から、鉄滓が多く検出されている。

この地点からD-22までは、用地幅などの関係で、推定溝幅の1/3以下を発掘した。D-20～26までの中央よりには、20～50cmの石が累々としていた。また、SD2の溝の南の底部は、地表下1.35mを計り、南方に伸びている可能性が考えられる。C-





- |                                      |                                     |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| ① 表土表土                               | ⑤ 黒褐色砂質土 ⑤ a ⑤より明るい。                |
| ② 耕耕作土 ② a 攪乱 ② b ②に灰色・黄色塊が混じる。      | ⑥ 明褐色土に茶色・黄色の粒が混じる。                 |
| ② c ②に灰色・黄色塊・茶紋が混じる。                 | ⑦ 茶褐色土。粘質が強い。⑦ a ⑦に赤茶色酸化物を含む。       |
| A 黄色土に茶赤色粒を含む。                       | ⑦ b ⑦に細砂を含む。⑦ c ⑦ bに黄色塊が混じる。        |
| ③ 暗黒褐色土 ③ a ③に灰色が混じる。③ b ③ aより灰色が多め。 | ⑧ 灰黒色シルト                            |
| ③ c ③ aより砂質が強い。③ e ③に赤褐色の斑が多め。       | B 灰色土に黄茶色粒が混じる。 C 灰色土 D Bに黄茶色粒が多め。  |
| ③ f ③に赤褐色の斑が混じる。                     | E Cより黄茶色粒が少なめ。 F Cに黄灰色塊(-3 cm)が混じる。 |
| ④ 暗灰色砂質土 ④ a ④に黄色・茶色土が混じる。           | G Cに炭が混じる。                          |
| ④ b ④に茶色塊が混じる。④ c ④ bより茶色塊が多め。       |                                     |

第18図 大溝SD 2・3・4・5

28では、地表下90cmが底面である。C-26の底面から+45cmを示す(SD5)。

この東西方向の溝で、全幅の判明するのは、C-31~C-40までの屈折点までである。C-31の確認面で、幅3m、深さ80cmである。東のSD2南の溝底からは+65cmを示す(SD6)。

形態は箱堀で、底に粘土・鉄分が付着していた。底部に平安時代の土器、上層に中世の遺物の土石器・陶磁器が埋没していた。

D-36の溝上層の確認面(SD18)には、炭化物の含んだ黒色土が細長く検出された。ここからかわらけ4個、青磁・内耳土器・白磁、椀・木材・カヤ・大麦の炭化物・鉄滓が検出された。

この遺物包含層は溝に巻き込むように、北よりに検出され、溝がある段階まで埋没した後、意図的に埋められた状態を示し、南側の埋没土は、黄色土と茶褐色土が混合していた。

この東西の溝で、完掘できた部分は、SD6の32mである。D-36の溝幅は、確認面で幅3.7m、深さ1.2mを測り、C-31の溝底面との差は、-65cmである。形態は箱堀形を示し、垂直に近い壁面に鉄分が厚く張り付いていた。底面の鉄分層の上は、粘土または砂の層であった。

底面の上層からは、灰釉四耳壺破片・蓮弁文の青磁片・瀬戸袴形香炉片が検出され、底からは須恵器・土師器の破片が検出された。

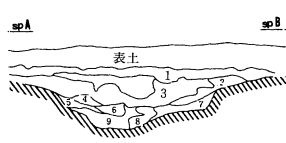
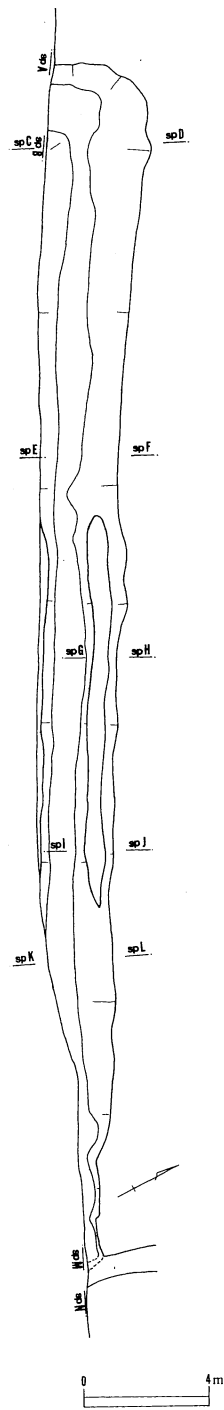
この東西方向の大溝SD5・6からは、全体的に土器類・石製品(石臼類・凹石・砥石)・陶磁器・金属器(古銭・鋳り金具・鉄製品・鉄滓)などが検出されている。これらの遺物は、溝の左右から落ち込んだものと見られる。

この東西(横)方向の溝は、D-39・40地点で直角に南に曲がっていた。この南方には、西条陣屋跡がある。そこの西に湧出する泉に、連絡するのではと、推測される。

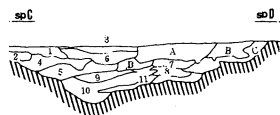
この溝の造られた年代は、①溝底の遺物から、平安時代の後期から鎌倉時代前期に、位置づけが可能である。当時の豊富な湧泉を横方向(人工的)の溝に引水して、主として生活用水と、水田の開拓に利用したとみられる。この場合、八ヶ郷用水の成立を中世後期に想定している。②溝の構築年代を鎌倉時代以後とみた場合、この大溝の周囲に、屋敷(館)地の想定が可能である。

小溝(SD21)東西方向の大溝に西方に、溝が幅50cm、深さ50cm、長さ20mが確認された。土地の区画を示す溝とみられる。

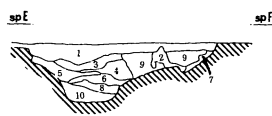
#### 4 井戸址と土坑



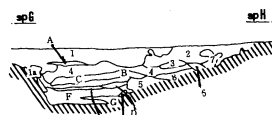
- 1 暗黒褐色土に茶色砂が多めに混る
- 2 灰黒色土に茶色粒が混る(砂質強)
- 3 暗灰色に茶色粒、褐色粒(〜0.3cm)が混る
- 4 明白灰色土に黄茶色砂質土が多めに含まれる
- 5 黒色土
- 6 3に黒色土が斑に混る
- 7 白灰色土に黄茶色砂質土が多めに含まれる。礫も含まれる
- 8 7の礫を含まないもの
- 9 8より黄茶色砂質土が少なめ



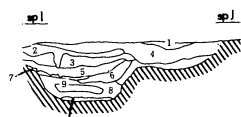
- 1 暗黒茶色土に茶色粒が混る
  - 2 灰黒色土に茶色粒が混る(砂質強)
  - 3 暗灰色土に茶色粒、褐色粒(〜0.3cm)が混る
  - 4 3に茶色粒、褐色粒が多めに混る
  - 5 暗灰色土に茶色塊(〜3cm)が混る
  - 6 黒灰色土に黄茶粒が少し混る
  - 7 黒灰色土に白黄色塊が少し混る
  - 8 7より白黄色塊が多めに混る
  - 9 黄茶色砂土に礫が多く混る
  - 10 灰色層に茶色砂土が層を成す
  - 11 黒灰色砂質土であるが粘質もある
- A 黒色土、壊れた石が多い  
B 暗褐色土に暗色塊(〜1cm)が混る  
C Bに白黄色塊(〜4cm)が多めに混る  
D Aより明るい、礫はない



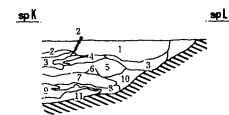
- 1 明黒灰色土
- 2 明黒灰色土、炭が混る
- 3 1に茶色粒が混る
- 4 明灰色土に黄色塊、茶色粒が混る
- 5 4より茶色粒が多め
- 6 4より茶色粒が少なめ
- 7 2に黄色塊(〜3cm)が少し混る
- 8 灰色土に白色・茶色塊が混る
- 9 1に茶色粒が混る
- 10 7に礫(〜3cm)が混る



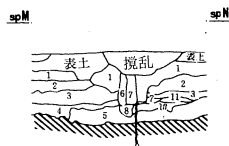
- 1 明黒灰色土 1aより暗く黄色土塊が混る
  - 2 暗黒灰色土、炭が混る
  - 3 2に茶褐色土塊(0.5cm)が混る
  - 4 3より茶褐色土塊が多め
  - 5 暗灰色に茶色塊、黄色塊が少なめに混る
  - 6 2に黄色塊(〜3cm)が混る
  - 7 6より黄色塊が少なめ
  - 8 黄灰色砂土に黒灰が混る
- A 明灰色土に黄色塊、茶色粒が混る  
B 灰色土に白色、茶色塊が混る  
C 茶色砂土に灰色砂土が混る  
D 黒灰色土に茶色塊が混る  
E 灰色粘土に砂が混る  
F 灰色粘土に白色粘土が混る  
G 茶色砂土  
H 白色粘土



- 1 明黒灰色土
- 2 暗黒灰色土、炭が混る
- 3 2に茶褐色土塊(0.5cm)が混る
- 4 灰白粘土に砂が混る
- 5 暗灰色土に茶色塊、黄色塊が少なめに混る
- 6 暗灰色土に白灰色、茶色塊が混る
- 7 白黄色砂土
- 8 黒灰色粘土に茶色、黄色粒が混る 炭も少し混る
- 9 砂と土が層状になった部分
- 10 白灰色粘土

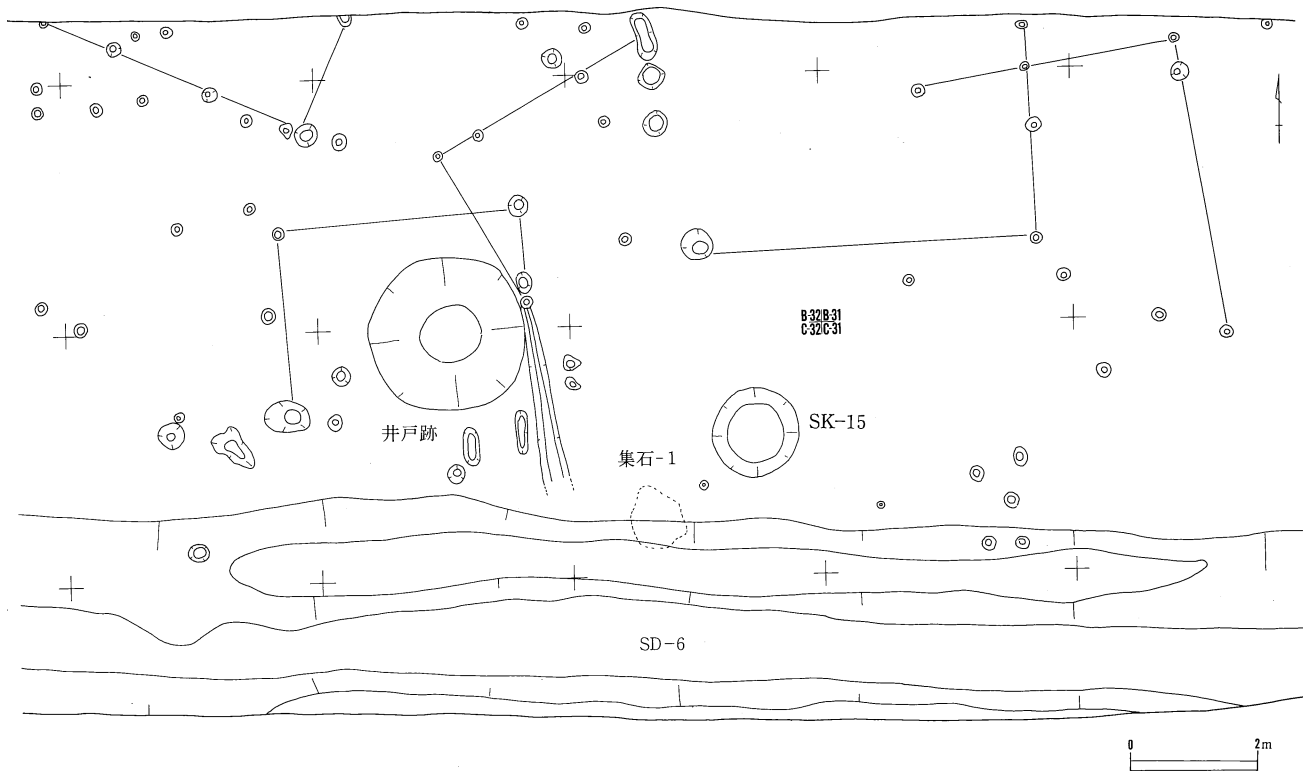


- 1 黒灰褐色土
- 2 1に黄色土塊、白色土塊(2cm)が混る
- 3 暗灰色土に茶色粒が混る
- 4 3に茶色土塊(〜3cm)が混る
- 5 4より茶色土塊が多めに混る
- 6 5より茶色土塊が多めに混る
- 7 白灰色土に白黄色塊、茶色塊が少し混る
- 8 黄茶色砂土
- 9 灰色粘土に茶色塊が混る
- 10 黄灰色砂土
- 11 暗灰色粘土に黒色土、茶色土が層を成す



- 1 明灰褐色土、赤味がある
- 2 1に灰色が斑に混る
- 3 黒灰褐色土
- 4 3に炭、茶色粒、黄色粒が混る
- 5 暗灰色に黄茶塊が混る
- 6 灰色土に黄茶粒が混る
- 7 灰色土に黄灰色粒が混る
- 8 6に黄茶色塊が多めに混る
- 9 7より黄灰色粒が少なめ
- 10 7より黄灰色塊(〜3cm)が混る
- 11 7に炭が混る

第19図 大溝SD6



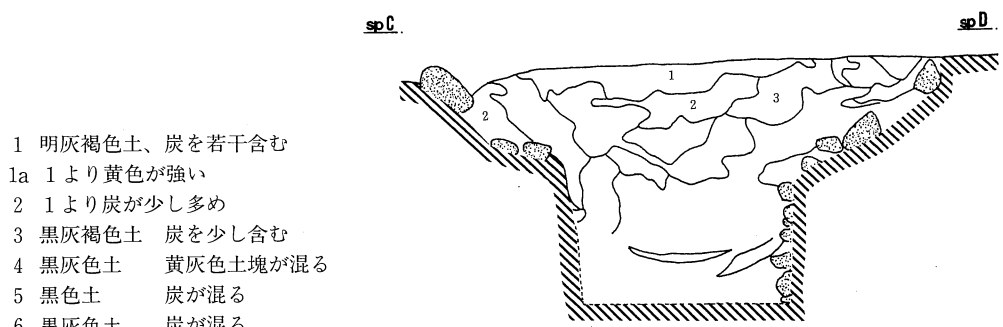
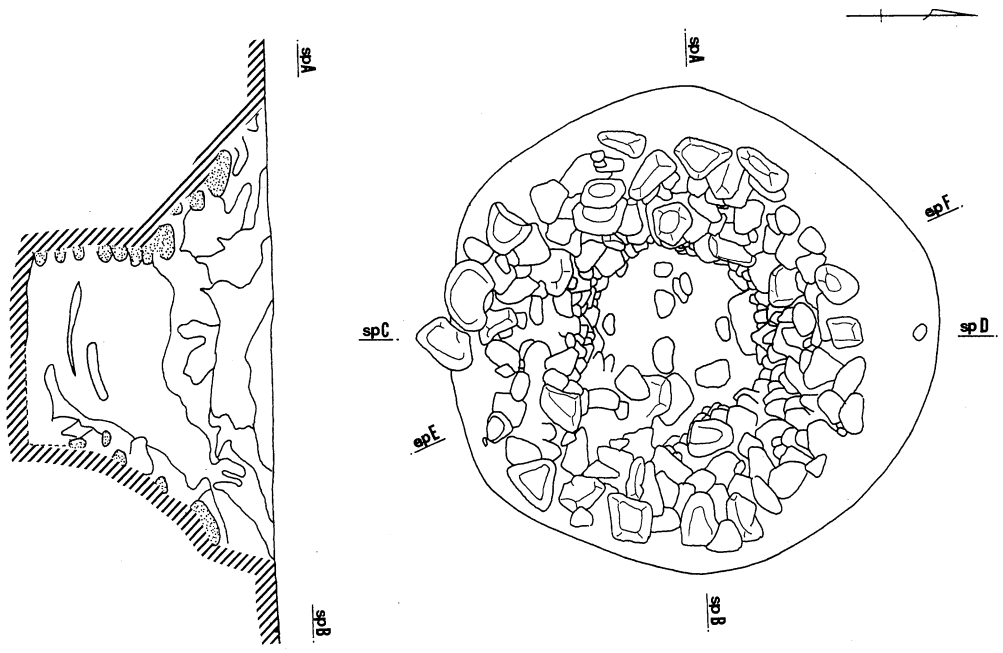
第20図 井戸址・土坑・柱穴・大溝の検出

井戸址 (SX 9) は、B・C-33から検出された。横大溝から1 m余り北に寄った所である。井筒は河原石の径10～30 cmを使用した乱石積みである。裏込め石は使用せず、周囲の粘土をつかって構築する。断面形態は、朝顔形で上部が大きく外反する。検出面の上部の直径1.6 m、深さは1.95 mで、底径は0.65 mである。発掘時は、水がみられなかったが、底より0.75 m上の石まで鉄分で染まっていた。過去の湛水面とみられる。



井戸の内部の上層は、腐植土からなる黒色土がみられ、青磁の破片などが検出された。下層は泥土と鉄分の混合であった。

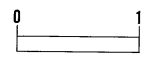
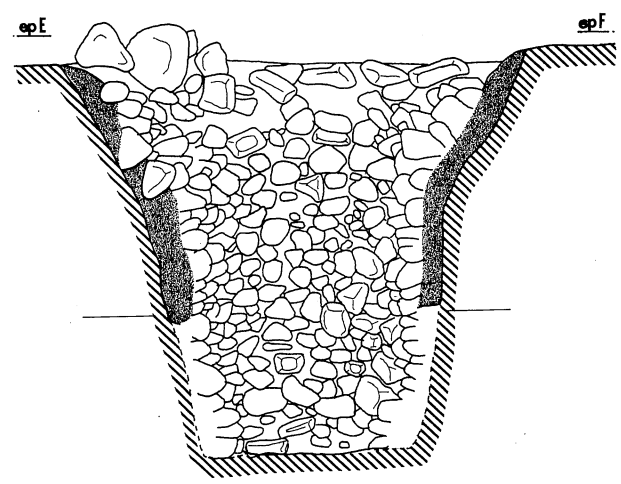
井戸の周囲の地層は、検出面の上から褐灰色 (5 Y R 5 / 1) 土40 cm、以下 / 明褐色 (7, 5 Y R 5 / 8) 粘土と、灰白色 (7, 5 Y R 8 / 2) 粘土の互層が1.2 mあり、以下腐植を含む粘土層で、暗赤褐色 (2, 5 Y R 3 / 3) を示し、透水層である。この面の下から古墳時代中期の土師器の破片が検出された。

この井戸の構築された年代は、山本博「中世井戸の成立と構造」によれば、乱石積み井筒は、飛鳥時代以後に出現し、本例の肩張り型は、奈良時代後期からみられる形式である。また、奈良時代以前の石井は、口径1 m以下のものが一般的であるという。井戸の周囲の地層の観察では、特に崩れやすい点も認められず、技法と形態などから平安後期から中世中期までに、構築された井戸とみられる。



- 1 明灰褐色土、炭を若干含む
- 1a 1より黄色が強い
- 2 1より炭が少し多め
- 3 黒灰褐色土 炭を少し含む
- 4 黒灰色土 黄灰色土塊が混る
- 5 黒色土 炭が混る
- 6 黒灰色土 炭が混る
- 7 5より炭が多めに混じる
- 8 2より黒色が多め
- 9 8より黒色が多め

 粘土  
 石

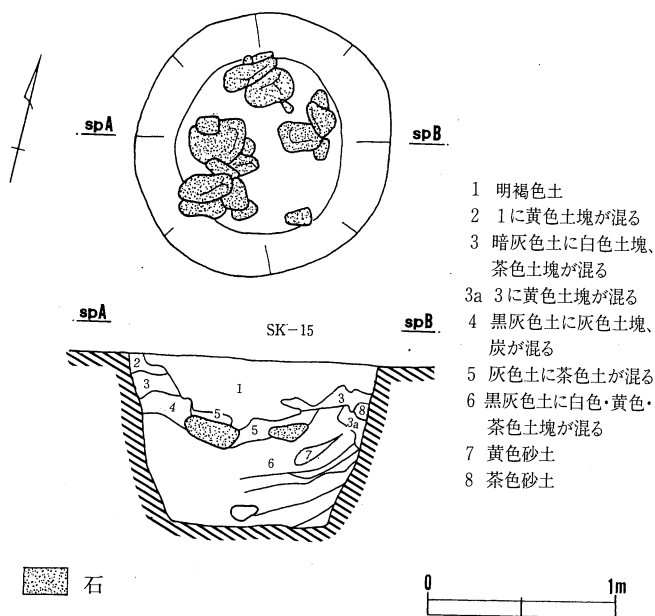


第21図 井戸跡

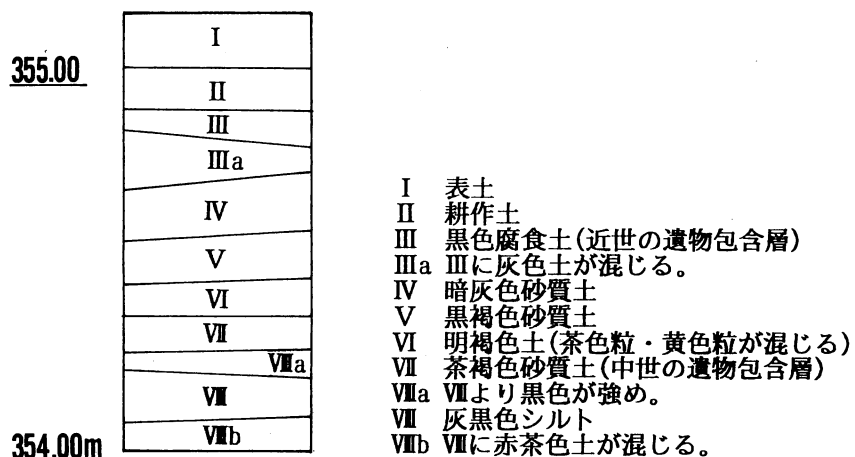
なお、この井戸の東から、小溝が大溝に向かってあり、排水施設と見られる。また、東南2.5mの大溝の縁に、河原石の集積がみられた。井戸の積み石と、関連するとみられる。

土坑 (SK15) 井戸の東3m余り、大溝の北60cmのC-32に、土坑が存在した。ほぼ円形で、確認した面の径1.4m、底径0.9m、深さ0.95mである。

土坑の埋没土中からは、特に遺物は検出されていないが、井戸と同時期と推定される。



第22図 土坑SK-15



第23図 基本土層

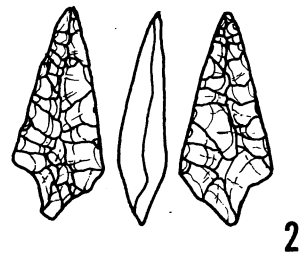
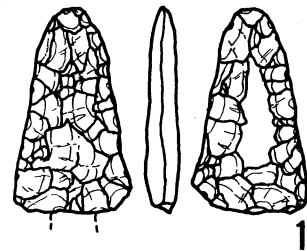
# 第三章 遺物

## 第1節 弥生時代の遺物

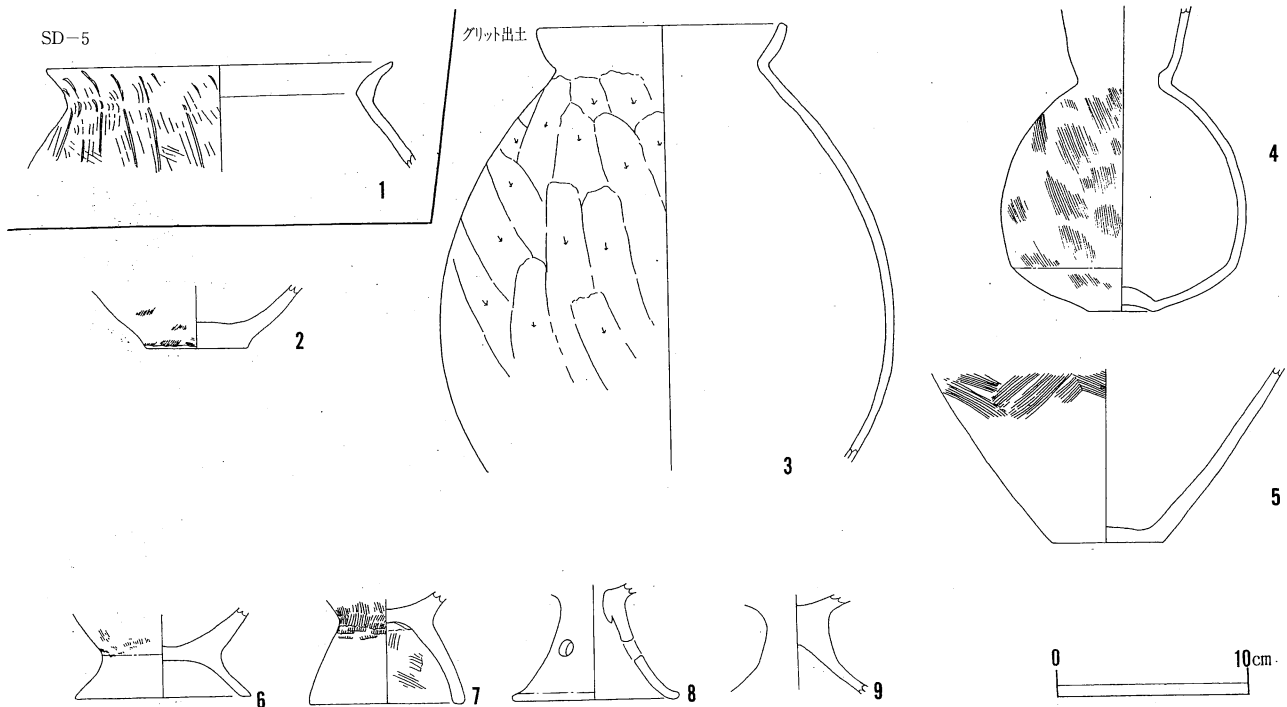
(A) 土器 弥生時代の遺物は、Ⅶ層の粘質性の強い土層面から検出された。明確な遺構は確認されず、中期と後期の土器の層序は、大きな上下関係は少ない。大溝SD 2の中からも該当期の遺物が見られたから、上方にも遺跡の存在が予想される。

確認された遺物は、栗林1式の壺破片(26図)甕破片などである。栗林2式期の土器も少量含まれる。箱清水式期の土器は、壺・甕・高坏などの破片が確認されている。かなり摩耗した物が含まれている。

(B) 石器 (24図) 有柄鏃2点が検出されている。1点は浅い窪みの土坑(SK 13)から検出されている。粘板岩製で柄が欠損している。1点は完形で頁岩製である。大溝SD 2から検出された。また、黒曜石破片もC-17から検出されている。



第24図 有柄鏃

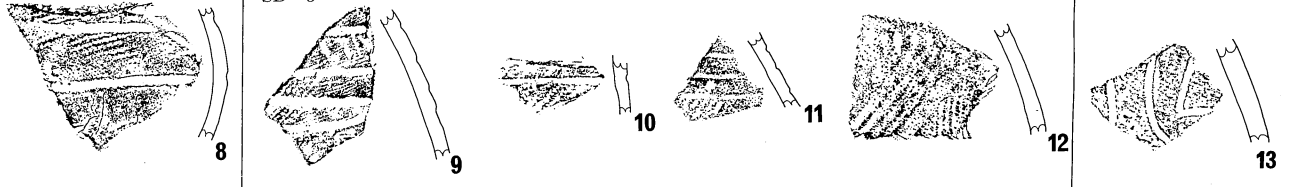


第25図 弥生～古墳時代の土器

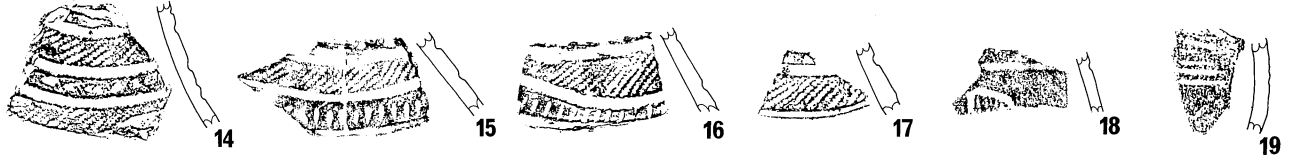
栗林式土器  
SD-2



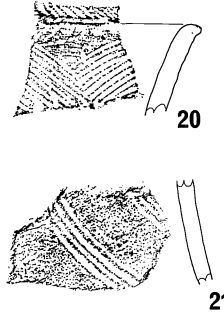
SD-3



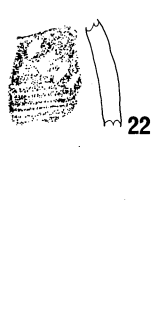
グリット出土



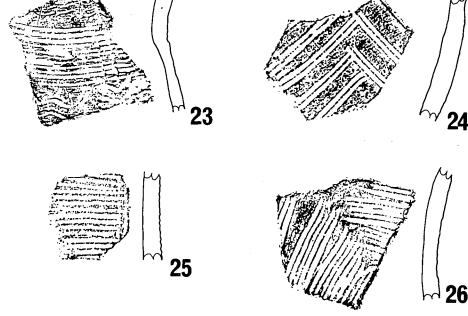
SD-2



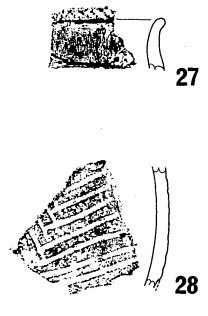
SD-3



SD-5



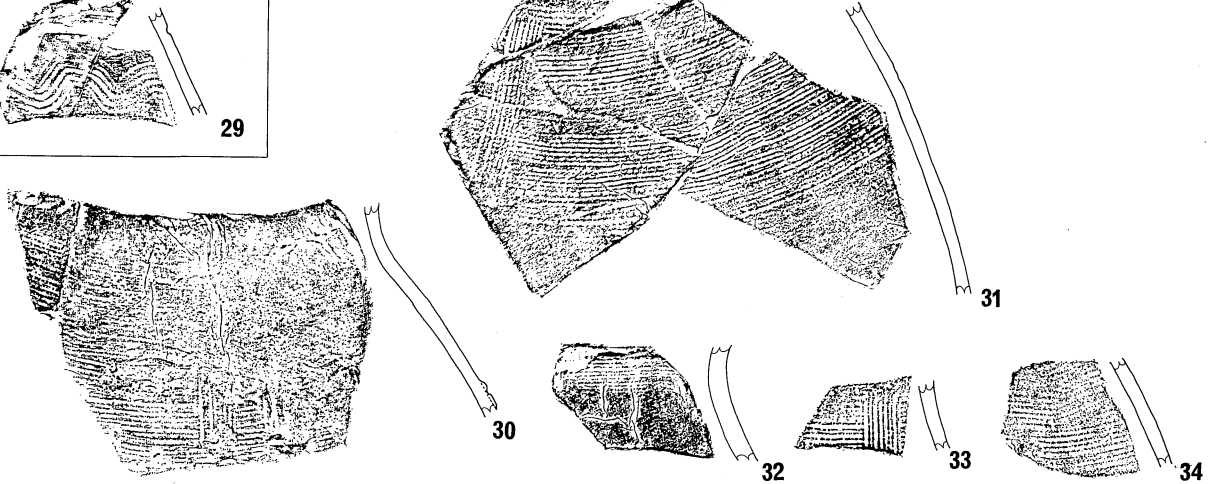
グリット出土



箱清水式土器  
SD-5



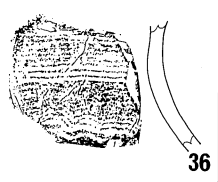
グリット出土



SD-2



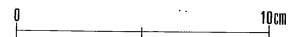
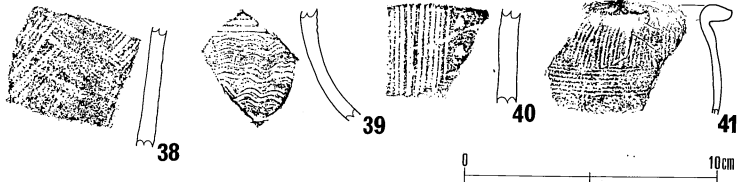
SD-5



SD-6



グリット出土



第26図 弥生時代の土器の拓影



## 第2節 古墳時代の遺物

(A) 土器 弥生時代箱清水式期の末期になると外来系の土器が用いられている。この時期の台付甕の破片が検出されている(25図)。同図の3・4は古墳時代初期の土器とみられる。埴型土器は、底部が円形に窪む器形である。

井戸遺構(SX9)を半割して掘り下げた結果、遺構検出面から-2, 5mで古墳時代中期の土器片が検出されている。

## 第3節 奈良・平安時代の遺物

1 土師器 (A) 甕型土器(27図) 2号住居址から検出した甕には口縁部の形態に各種がみられる。口端部が円いもの、片よって円いもの、平のものなどである。その他の遺構から検出した甕の口縁部の形態も多様である。器壁は熱効率のためか、薄いものが多い。器形は全体的に、球形または長胴形を呈する。これらは平安時代IV・V期の10世紀の所産と思われる。

(B) 坏・椀型土器 坏には、素焼きのものと黒色の2種の土器がある。金属器の模倣と思われる椀型の黒色土器が、2号住居址から検出されている。

2 須恵器(32図) 本遺跡の須恵器は、7世紀前葉から中葉に開窯し、9世紀前葉まで存続した、高丘古窯址群から供給されたものと思われる。それ以後の10世紀代の須恵器も少量発見されている。また、焼成不完全のもの、須恵質の堅さで、赤褐色を呈するもの、焼成台の付着したものなど、品質の良好とは言えないものが検出されている。

(A) 短頸壺 大溝SD2から検出されたもので、流出品である。7世紀奈良時代の所産である。

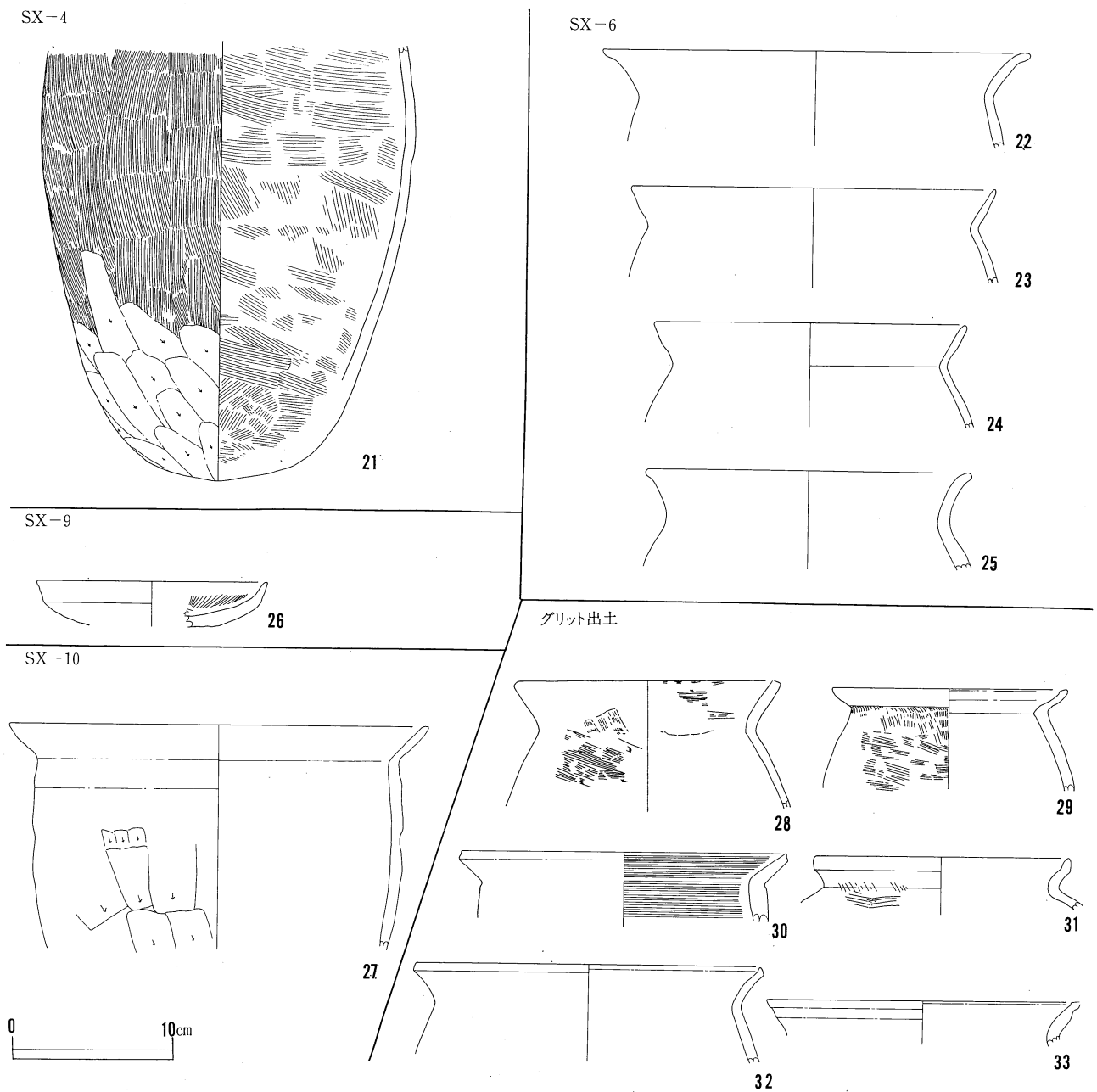
(B) 壺 中型から大型の壺をさす。内面に円形の当て具痕跡がわずかに残る壺は、7世紀代のものである。大部分のものは、内面の凹凸をハケで擦り消している。

表面は粗い織布状の圧痕を残すもの、自然釉の流れたものなどがみられる。

(C) 長頸壺 口縁部がの形態から第4期第2段階(県埋文センター、調査報告書13、「高丘丘陵古窯址群の須恵器生産について」)のものである。

外底の高台部が平で幅広い、長頸壺の破片は、後出的である。

(D) 甕 破片資料だが大型品が多い。しかし器形が知られるのは皆無である。他の須恵器片と同じく全般的に検出されている。中世の遺構・遺物のみられない、B・C-39か



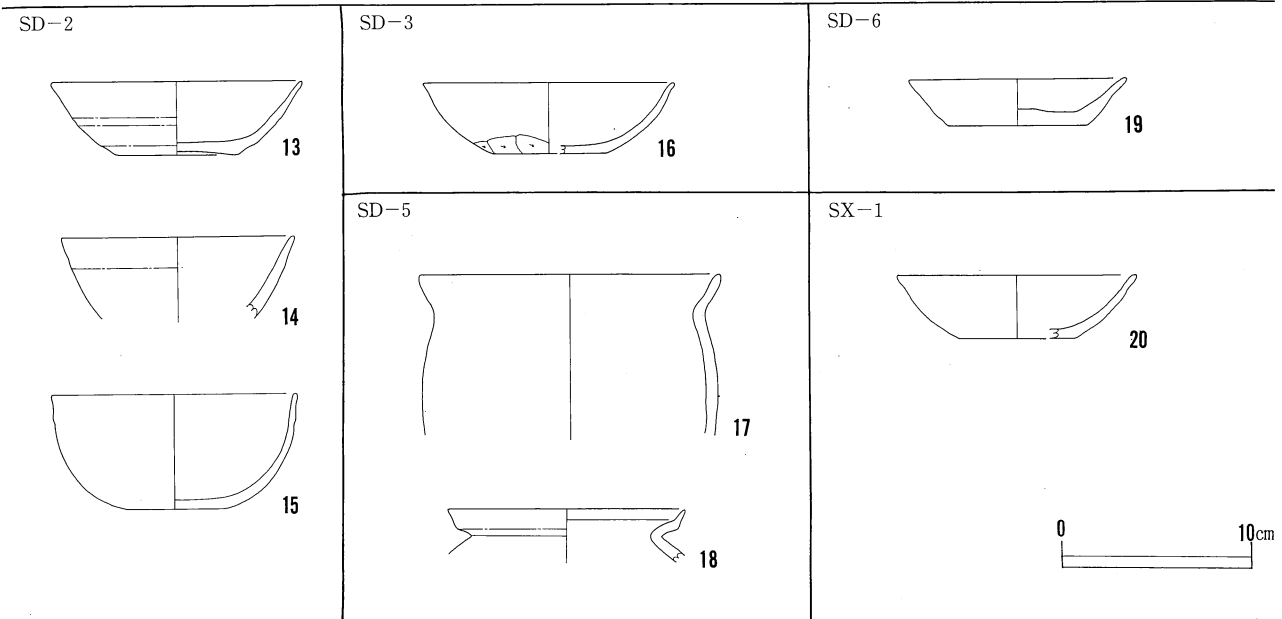
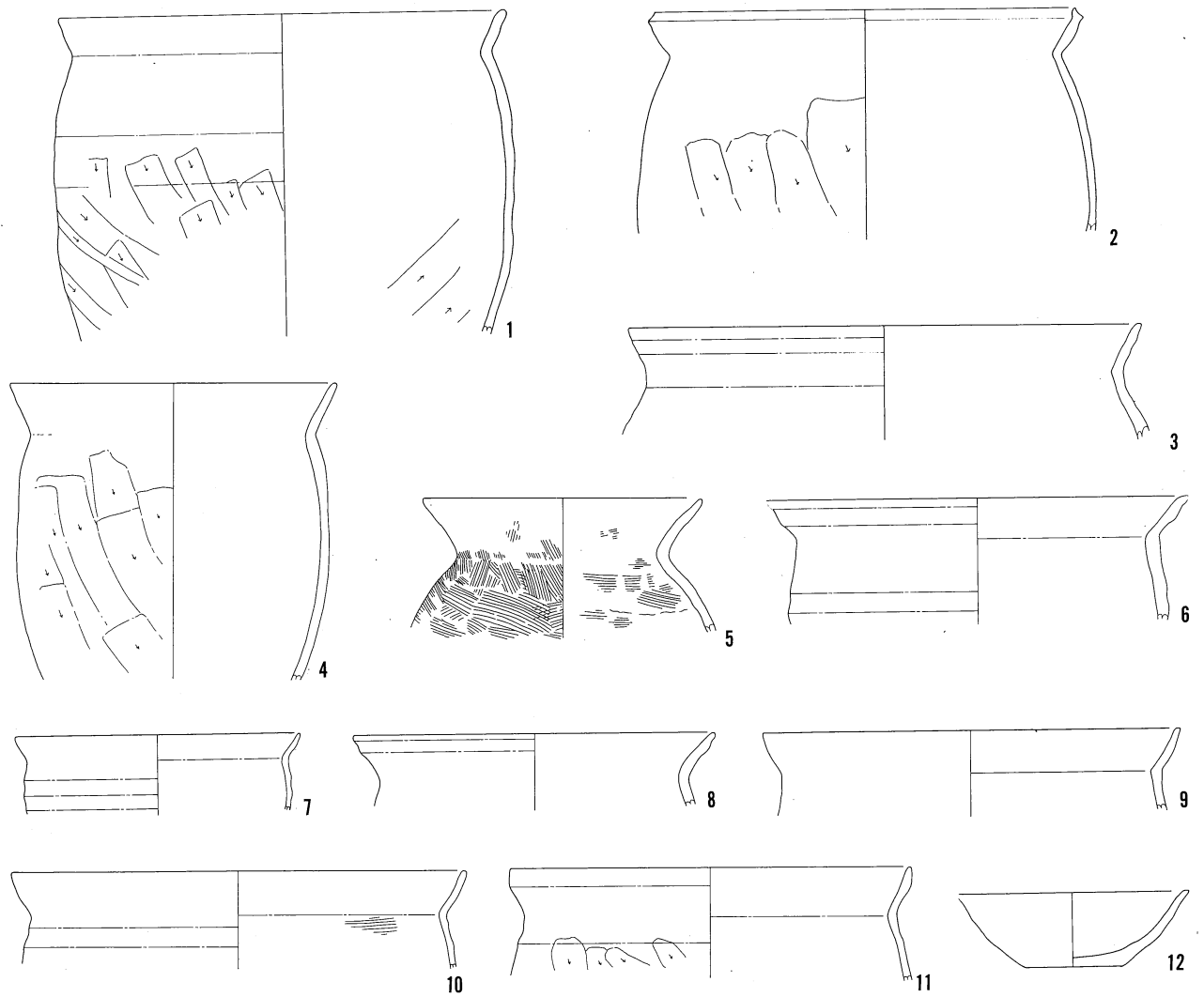
第27図 平安時代の土器（1）

ら以西でも散発的に検出されている。

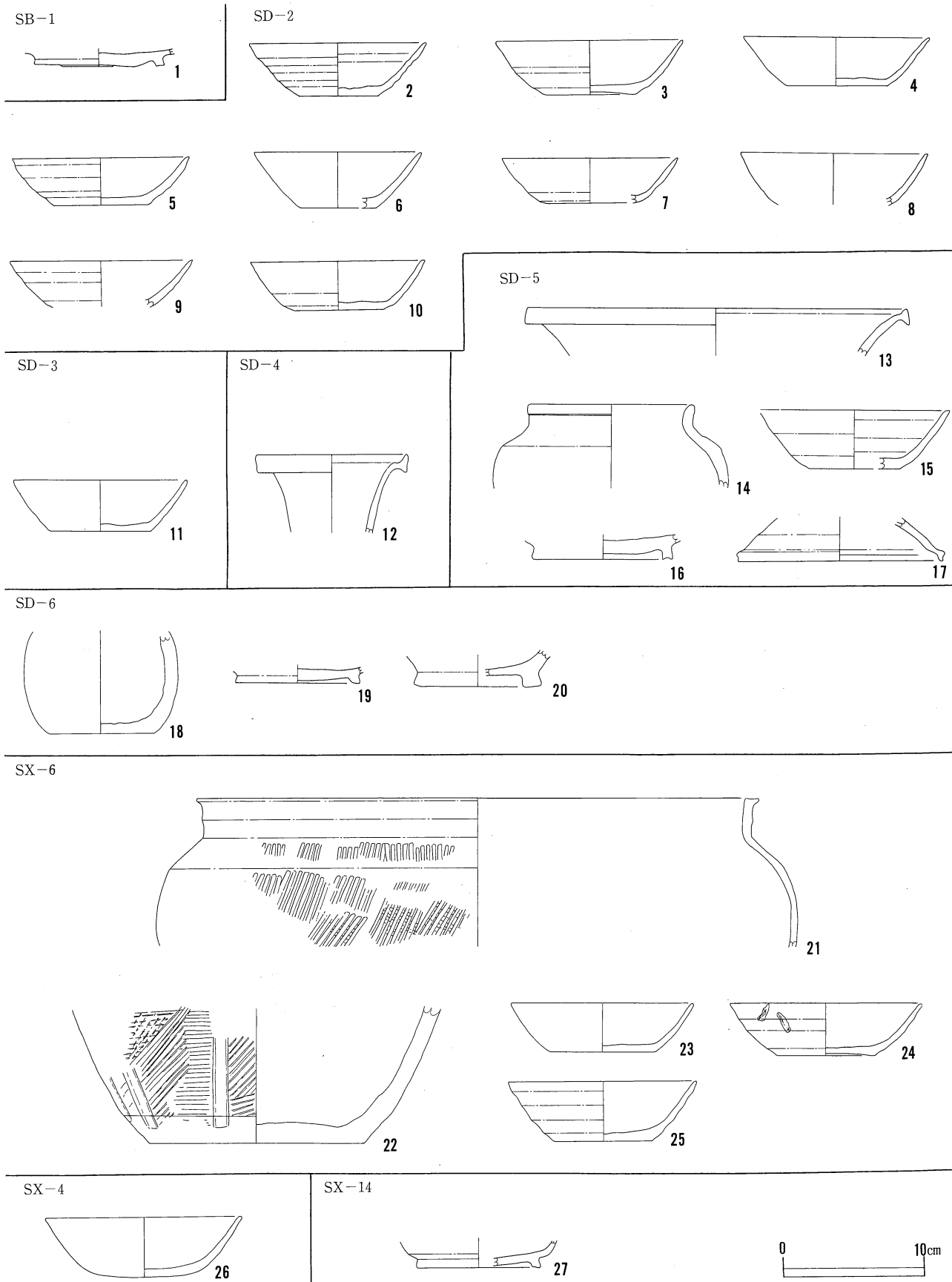
（E） 坏はロクロ成型、糸切り底のものである。高台付坏には高台端部が斜状を呈するもの、外底部に付くもの、平らなものなどがある。

（F） 坏蓋 坏蓋破片、ツマミが検出されている。これらの形態から第4期第2段階のものである。

（G） 灰釉陶器には壺・椀・摺鉢がある。壺は高丘丘陵の古窯址群からの供給の絶えた9世紀後半以降のものである。鑲状の耳付壺もある。



第28図 平安時代の土器（2）



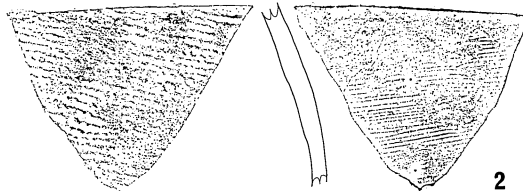
第29図 奈良・平安時代の須恵器

SB-1



1

SD-2



2



3

SD-4



6

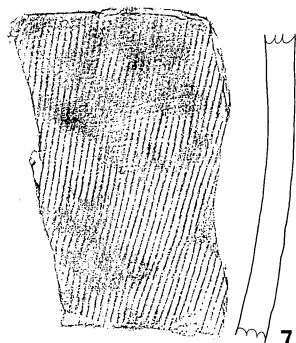


4



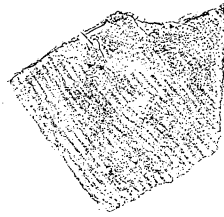
5

SD-5



7

SD-6



8



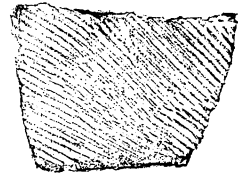
9



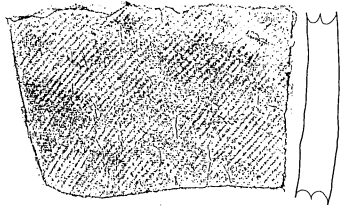
12



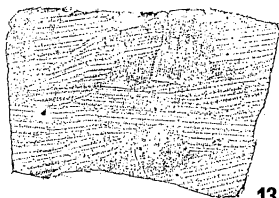
10



11



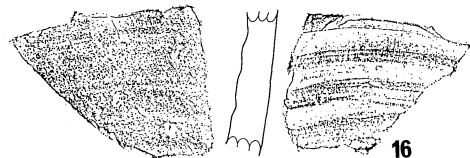
13



14



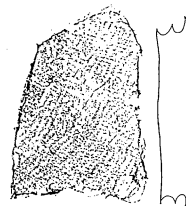
15



16



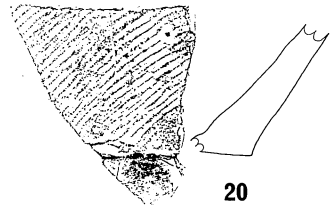
17



18



19

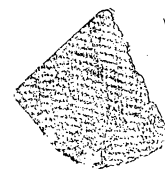


20

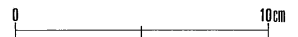
SX-10



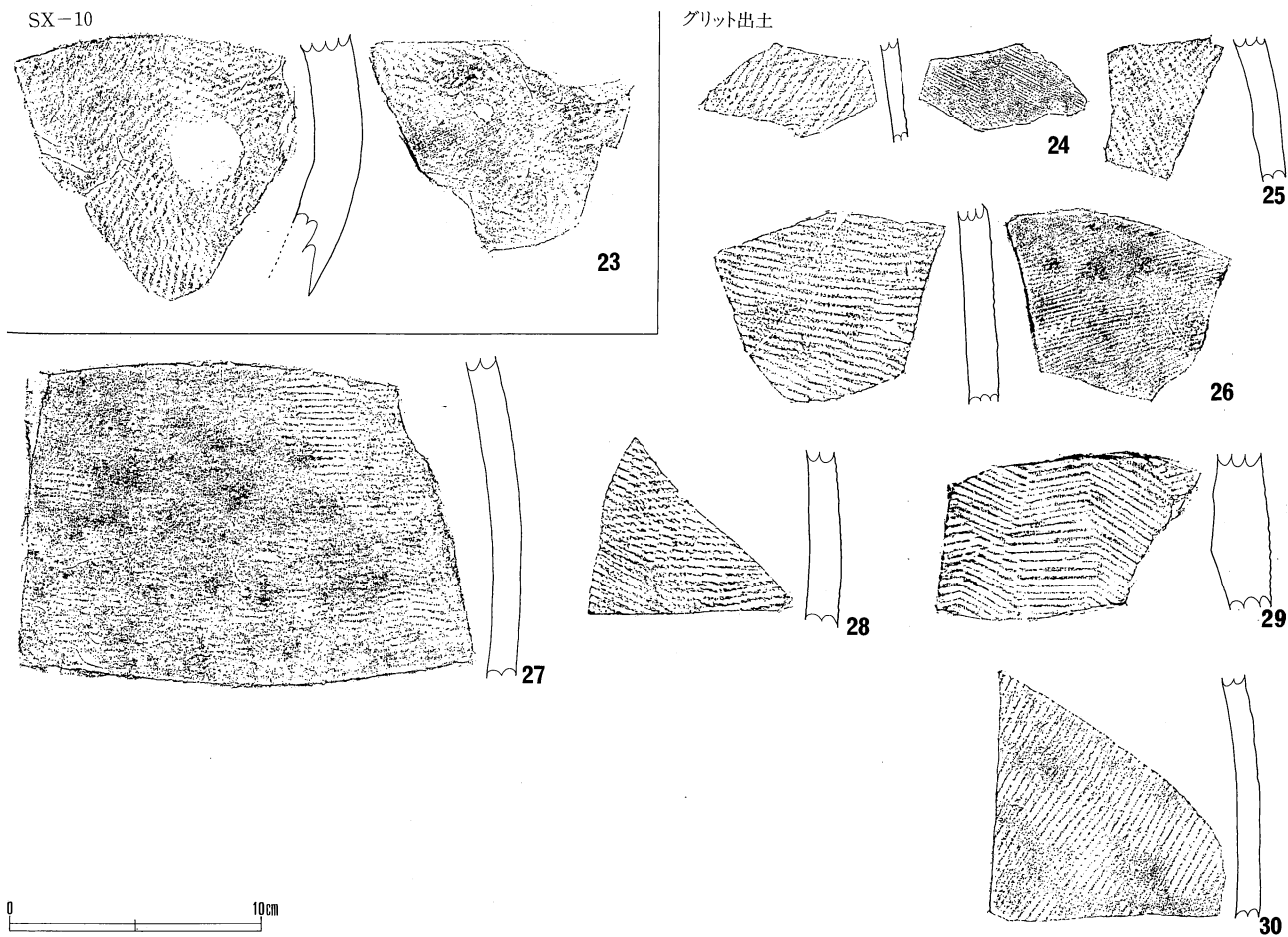
21



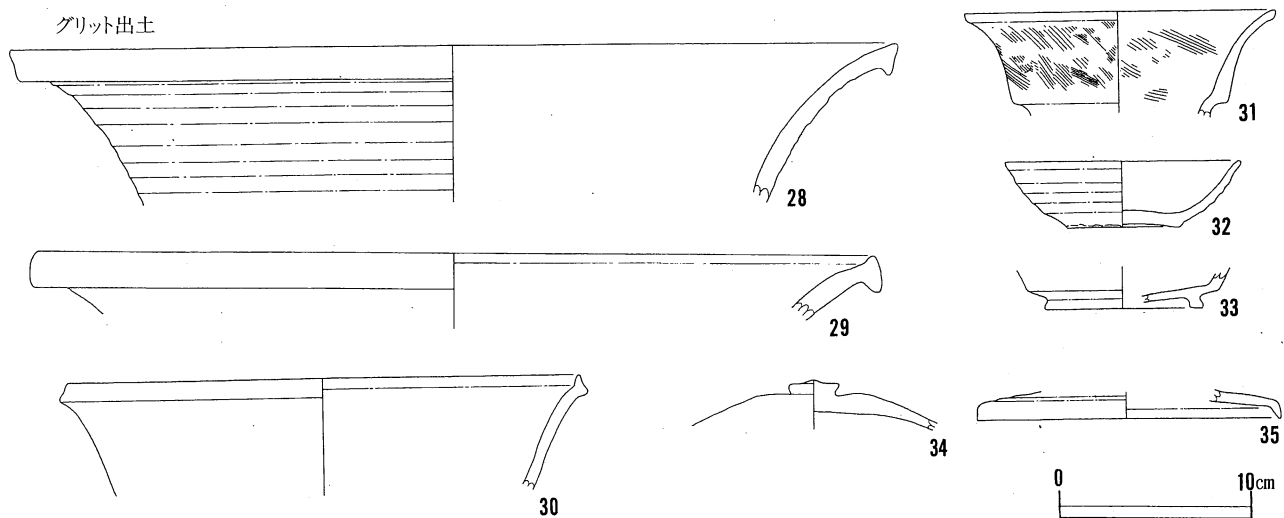
22



第30図 奈良・平安時代の須恵器拓影

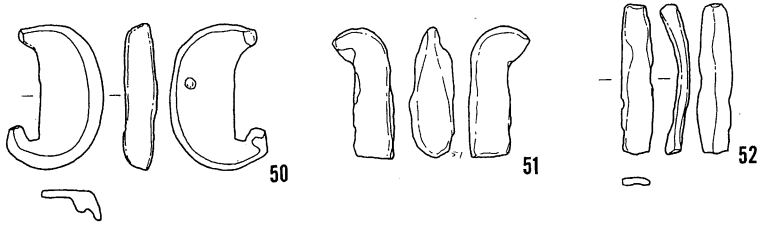


第31図 平安時代の須恵器拓影

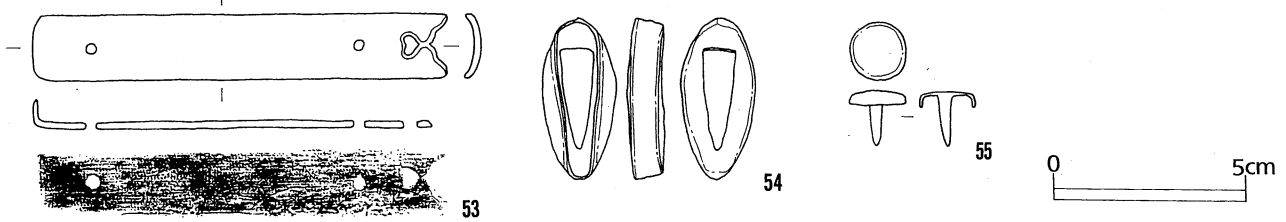


第32図 平安時代の須恵器

銅製品 平安時代



銅製品  
SD-6



第33図 古代、中世の金属器

灰釉椀には、釉薬が下部までみられる光ヶ丘1号窯式（11世紀）、上部までの大原2号窯式（12世紀）などがある。

灰釉摺鉢の破片が大溝SD6から検出されている。また、釉薬のみられない山茶碗（13世紀）が1号住居址などから4点検出されている。

### 3 金属器類（33図）

(A) 帯金具 銅鈔（一部破損）は帯先金具である。鍛冶址SX6付近から検出された。中野市では初見のものである。丸柄（半円形）のものである。これは奈良時代以後発達した形式である。本例は伴出遺物から10世紀代のものとみられる。類例は県内では、伊那市伊那福島、更埴市稲付、松本市安塚8号古墳などから検出されている。帯金具は官衛遺跡から多く発見されている。その他器種不明の銅金具がB-21から検出されている。

(B) 鉄鋳滓（写真7・8）伴出の土器から10世紀代の遺物と見られる鉄鋳滓は、SX6（C-22）を最多として、大溝SD2・同3・同4・同5から検出された。その他の地点は少量である。

鉄鋳滓は、総数約450点検出された。300gから499gまで4点、200～299gまで8点、100～199gまで51点である。

鉄滓には製錬滓と鍛冶滓がある。精錬滓には流出滓と炉内残留滓がある。鍛冶滓には精錬鍛冶滓と鍛練鍛冶滓がある。工具・農具を作るための鍛練鍛冶の加熱時に、火窟内にたまった、排出生成物が鍛練鍛冶鉄滓である。直径50cm前後の炉底にたまった、半球状・半楕円球状の鉄滓を椀形滓と呼ばれている（大沢政巳1983）。

この鉄滓は専門家の成分分析や、鑑定を得ていないので、断定的なことは言えないが、100g以上の鉄滓の形状は、半球状、半楕円球状を呈するものが多く、鍛練鍛冶椀形滓と思われる。

鉄滓は俗称金屎（かなくそ）・ノロ・スラグなどと呼ばれる。製錬と加工の場合発生し、いろいろな外観を呈する。思いがけない場所で発見されることがある。それは国造郡司の時代から大名領国の時代まで、長い年月にわたって群雄割拠な社会構成で、鉄製品の自己調達という観点からは、どこから出土しても不思議ではない（窪田蔵郎1983）。

中野市で、これだけ多量に鉄滓が発見されたのは、初めてである。今後は専門家の成分分析を期待し、産業遺跡としての、本遺跡の平安時代おける位置づけに注目したい。

(C) 関連遺物 羽口 羽口は破損品ばかりである。鉄滓の発見された地点と、出土量は重複する。即ち大溝SD2付近を最多として、大溝SD4にわたって検出されている。小破片を含めると総数53点が検出されている。

羽口破片を復原してみると、直径6～7cm、通風孔径2.7～3cmである。長さは不明である。先端には鉄滓が付着し、端部が平のもの、尖ったものなどがある。

## 第4節 中世の遺物

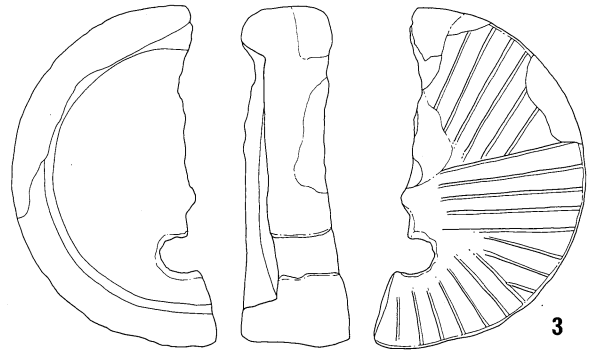
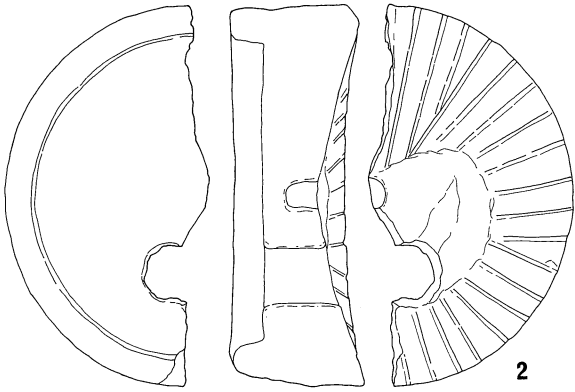
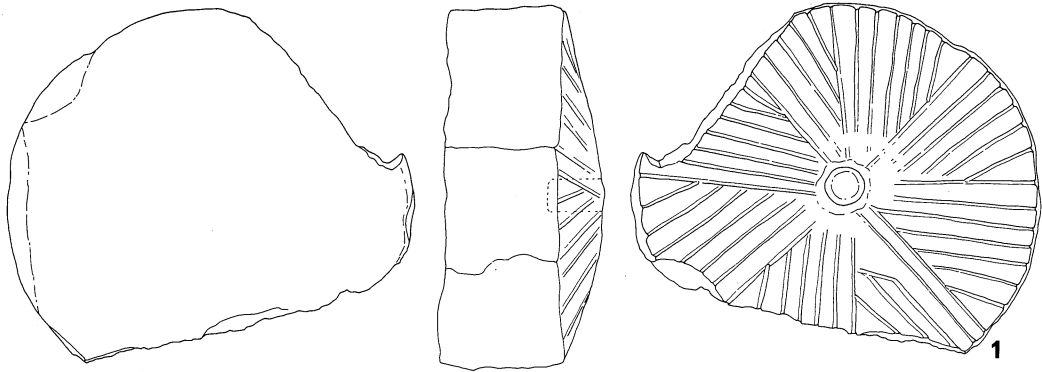
1 石製品 石搗き臼と凹石は、格好の安山岩の河原石を彫り窪めている。この2者は容量の差で区別した。石摺鉢は安山岩の加工品である。

(A) 凹石（39～41図） これは大溝SD2から大溝SD4につながる溝の中から大部分検出された。大きさは幅6～10cm内外のものである。片面の凹みのものと、両面に凹みがみられるものがある。この凹石は、従来すべて石器時代（主として縄文～弥生時代中期）のものと考えられていた。しかし市内竹原の専福寺で庫裡を改修した時、2回にわたって、20数点の凹石が出土したという。表裏2面に凹みのあるものもあり、2回とも土器は伴出しなかったという（金井汲次1977）。

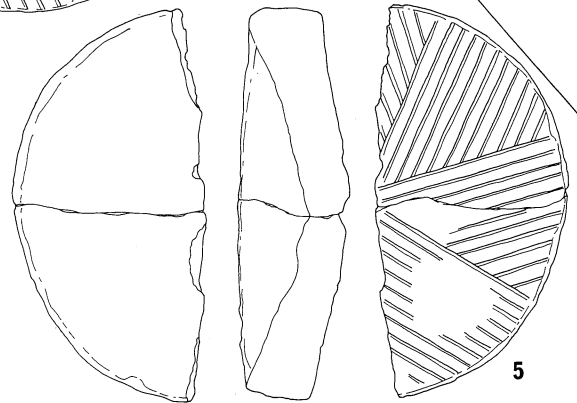
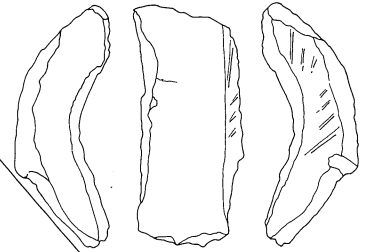
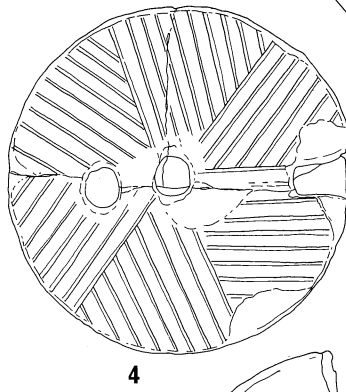
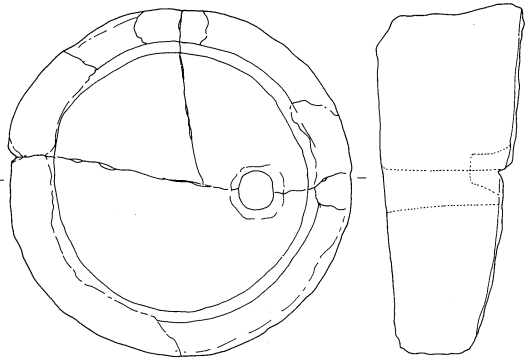
本遺跡では、弥生中期後半に位置づけられる、栗林式1式土器が少量検出されているが、出土位置が異なっており、伴出遺物は中世のものが大部分である。使用目的については今



SD-3



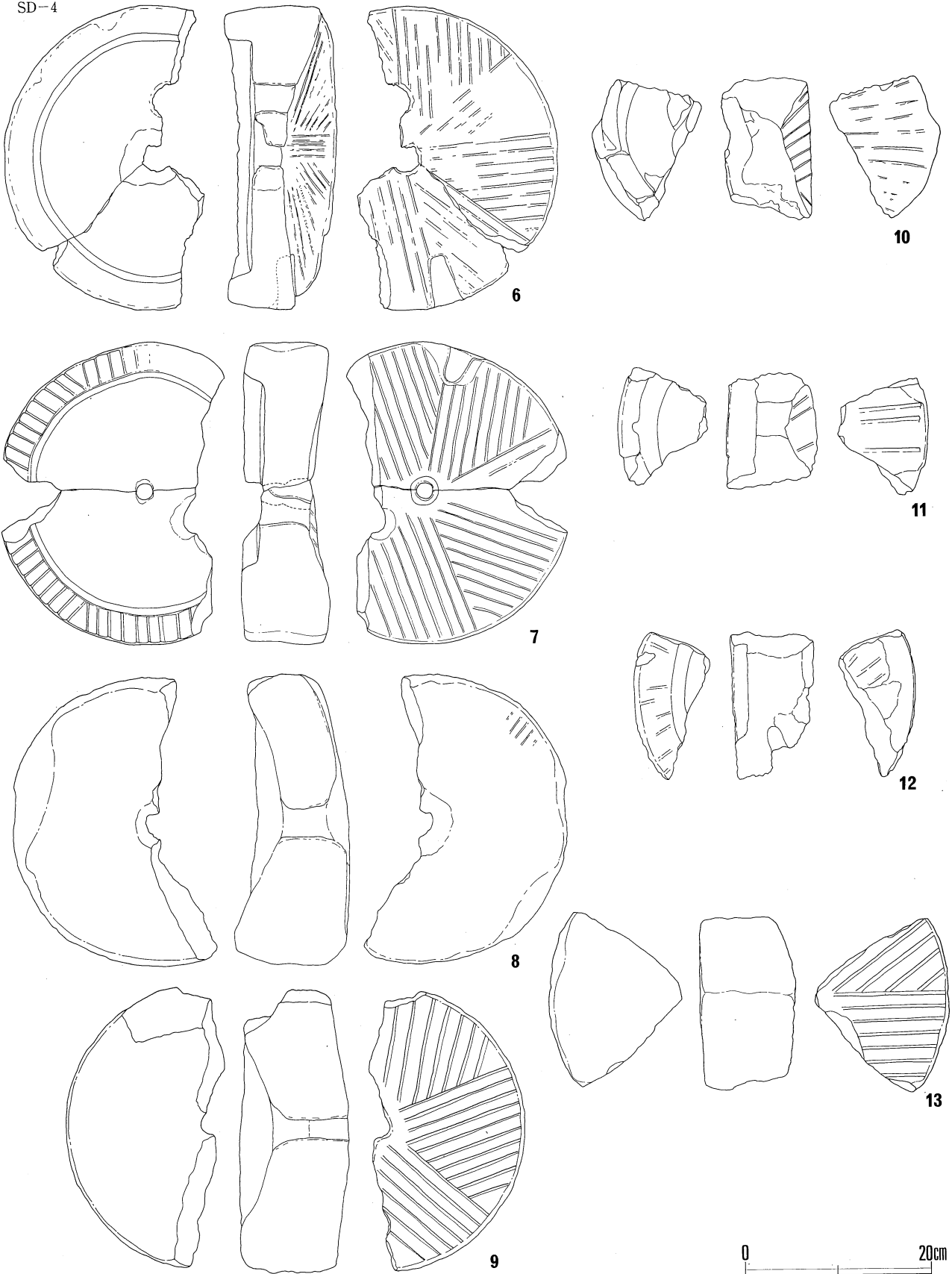
SD-4



0 20cm

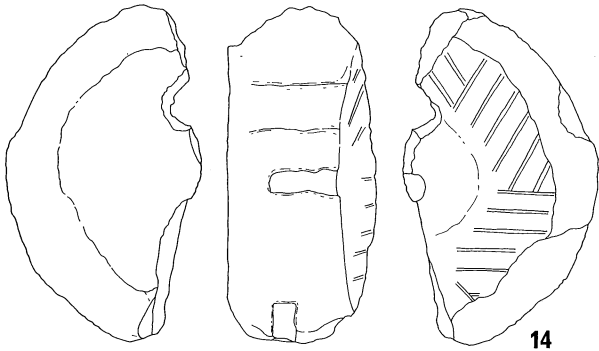
第34図 回轉石臼(1)

SD-4

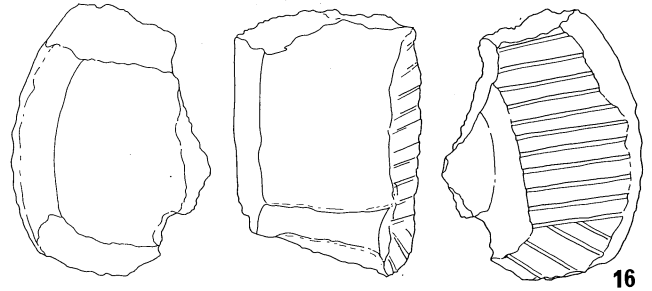


第35図 回轉石臼(2)

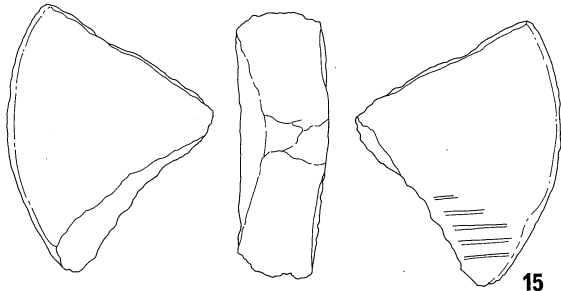
SD-4



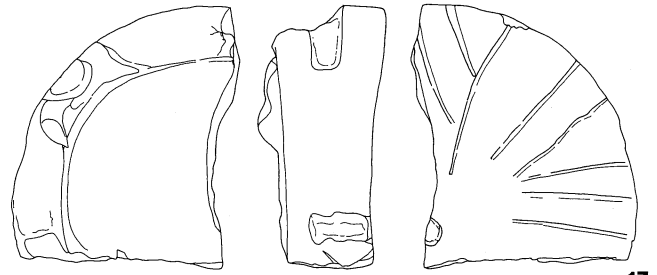
14



16

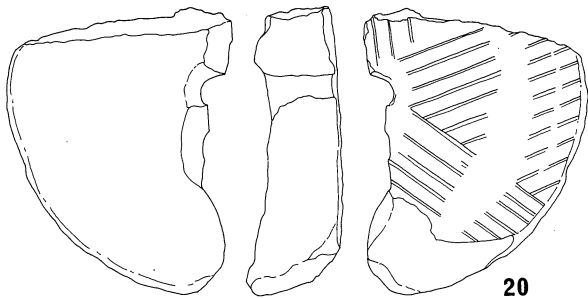


15



17

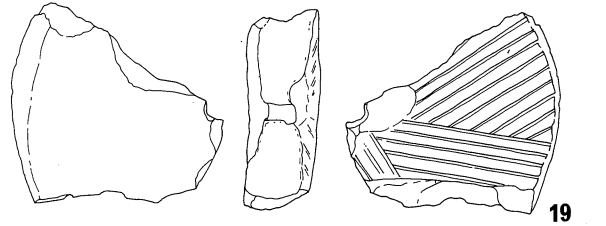
SD-5



20

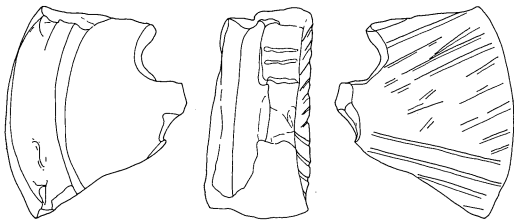


18



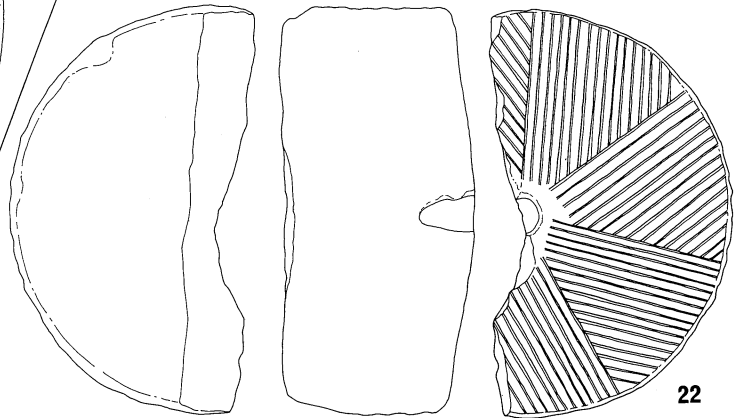
19

SD-6



21

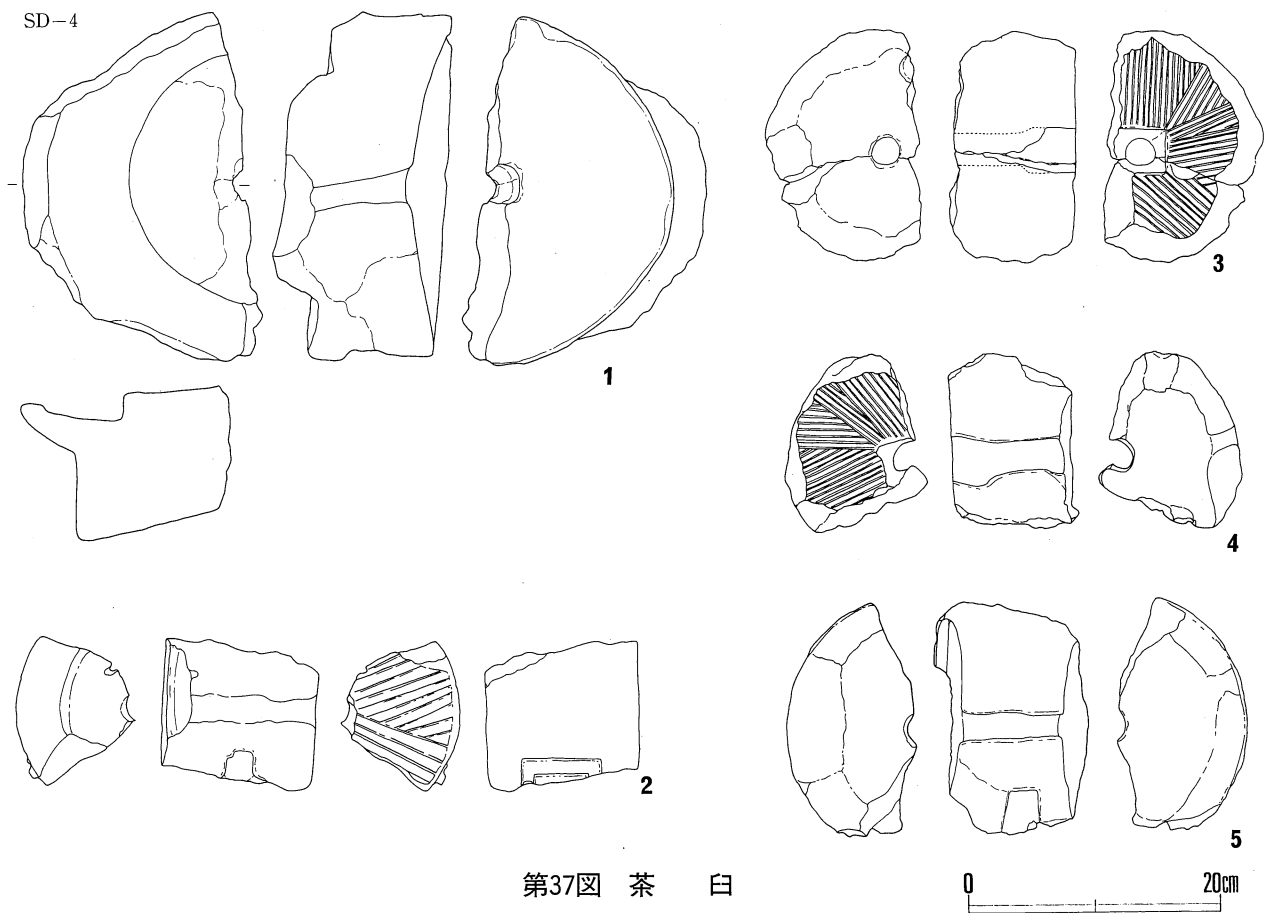
グリット出土



22



第36図 回転石臼(3)



後特定したい。

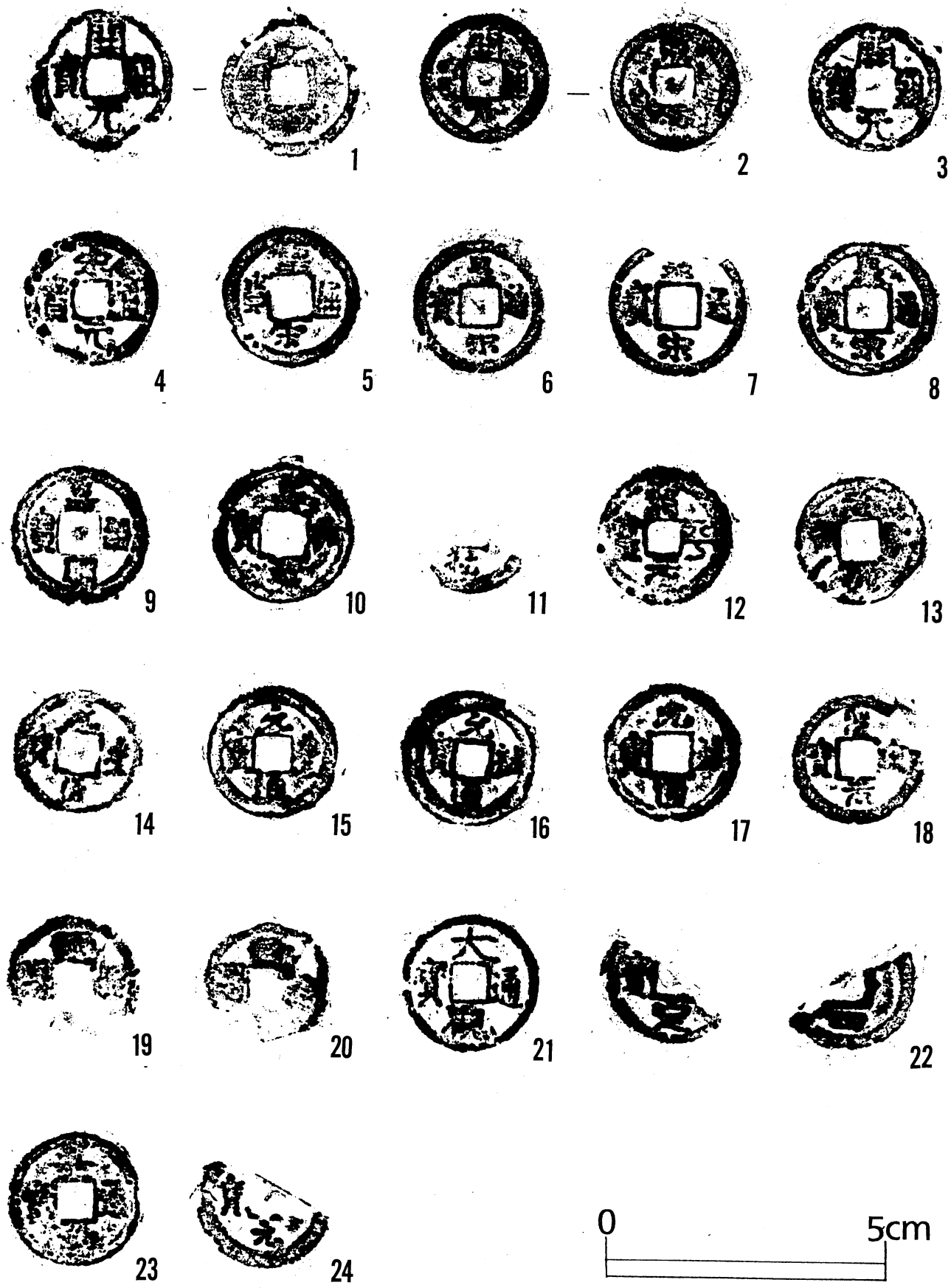
(B) 石摺鉢・石搗き臼 (39～41図) 石摺鉢は安山岩の加工品である。摺鉢の使用のほか、搗き臼としても使用可能である。注口のつくもの(3)、円盤状の台付のものもある(23)。

石搗き臼は、軟質の安山岩を彫り凹めて作られている。径は30cmの小型で、深く凹めている(2)。少量の穀物の脱穀・精製に、堅杵を使用して行ったとみられる。

(C) 回転石臼 (34～36図) 回転石臼 (以下石臼とのみ記す) も、破損品ばかりである。小破片も入れて24点検出された。石臼は大溝SD3から大溝SD4の間で、大部分検出された。安山岩製で、石色は青灰色・赤褐色・黒褐色などがあり、多方面から供給されたと思われる。

擦り減って廃棄されたものと思われるものが多く、片減りしているものがある。溝も擦り減っているものが多い。さらに下石を上石に再生しているものがある。主溝は8分画と6分画がある。この傾向は、佐久の大井城跡・金井城跡の出土品と一致する。

(D) 茶臼 (37図) 小破片まで入れて6点検出された。安山岩製である。完形品はない。



第38圖 錢貨拓影

発掘面積の割に茶臼の数量の多いのが注目される。

茶臼は日本には、中国から鎌倉時代末から南北朝時代に伝来した。当初は禅僧・貴族に用いられ、次第に武士階級に用いられた。穀物の精製に使用する回転石臼と違い、茶臼は、村の名主（みょうしゅ）層、武士階級の持ち物であったとみられる。

(E) 砥石（42図）砥石は破片まで入れて20点検出された。うち完形品は1点のみである。中世前期の住居址SB1（B-11・C-12）から検出されたものは4点である。

種別は荒砥が2点、中砥が15点、仕上げ砥3点である。擦り減っているもの、欠けているものが多い。

(F) 硯（39図1）（写真11）硯は粘板岩製で、破片まで入れて3点検出されている。図示したものは、大溝SD2から検出された長方形の半欠品である。海（硯池）の部分である。額に界線があり、中に雷光状の文様が刻まれている。

他の1点はさらに小型で、粘板岩製の長方形を呈する海の部分の小破片である。また、同質の小破片が1点ある。硯の存在は、文筆をたしなむ人がいた事を表している。本遺跡の性格を考える上で参考となる。

## 2 金属製品（44図）

(A) 鉄製品は、腐食しており年代判定が困難のため、この項で一括報告する。

釘は12点検出されている。長さは5cm以内のものである。棒状のものには、紡錘車の軸とみられるものがある。工具としては鉄板に四角な挿入部をつけたものがある。

中世前期の住居址（SB1）から出土した雁股の鍬がある。

(B) 銅製品には、前記のSB1から出土した鋌のほか、大溝SD6から出土した刀装具のハバキがある。大きさからみて打刀以下の刀装具とみられる。

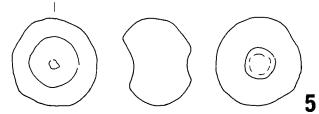
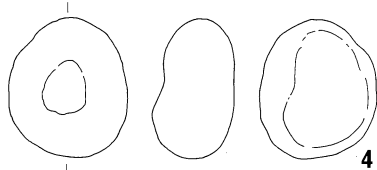
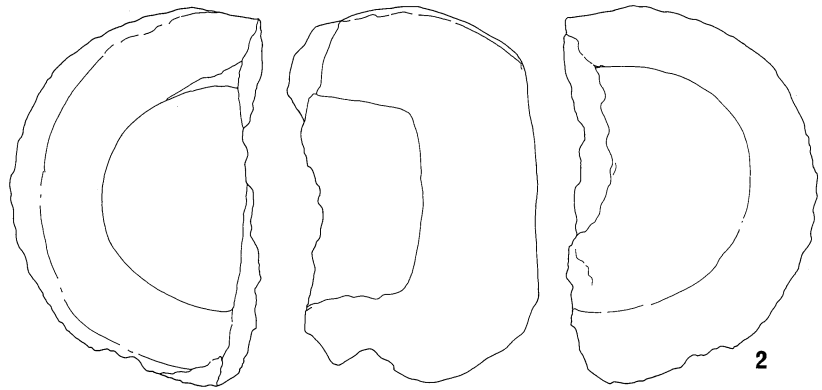
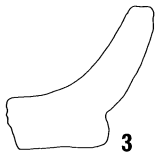
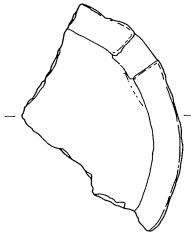
鍔金具も前記の大溝SD6から出土したものである。仏壇・仏像などの台座の框の隅飾りに用いられていたものと思われる。地紋は細かな円紋で、先端の挿入部に続いて火灯形の透かしがあり、目釘穴が2孔ある。そして、表面には金張りが施され、いまま部分により輝いている。

銭貨（38図）は、33枚検出され、うち銭文の判明するのは22枚である。不明のものも、遺構の性格を知るため表示した。開元通宝（唐621始鑄）と、南宋銭とみられる紹定元宝のほかは、北宋銭で、ほぼ11世紀から12世紀に鑄造されたものである。

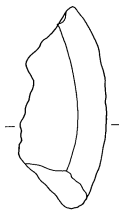
## 3 石造物（43図）

(A) 五輪塔部材 石造物はすべて安山岩製で、大溝SD4から検出されたものである。

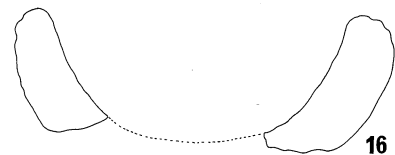
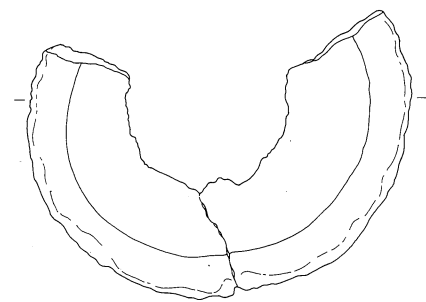
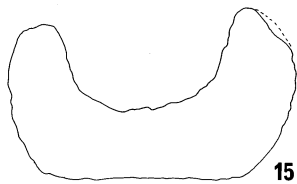
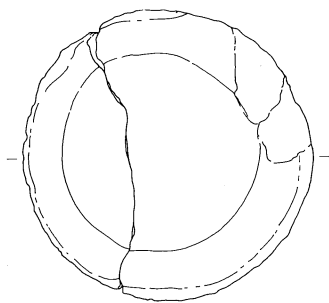
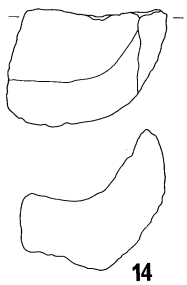
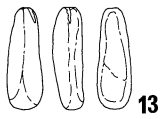
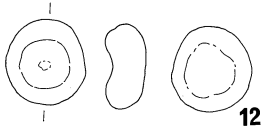
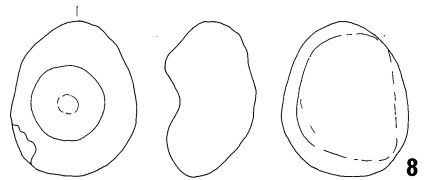
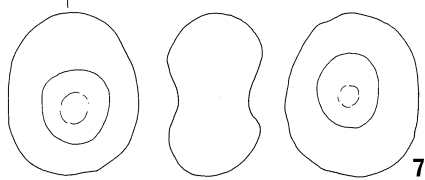
SD-2



SD-3

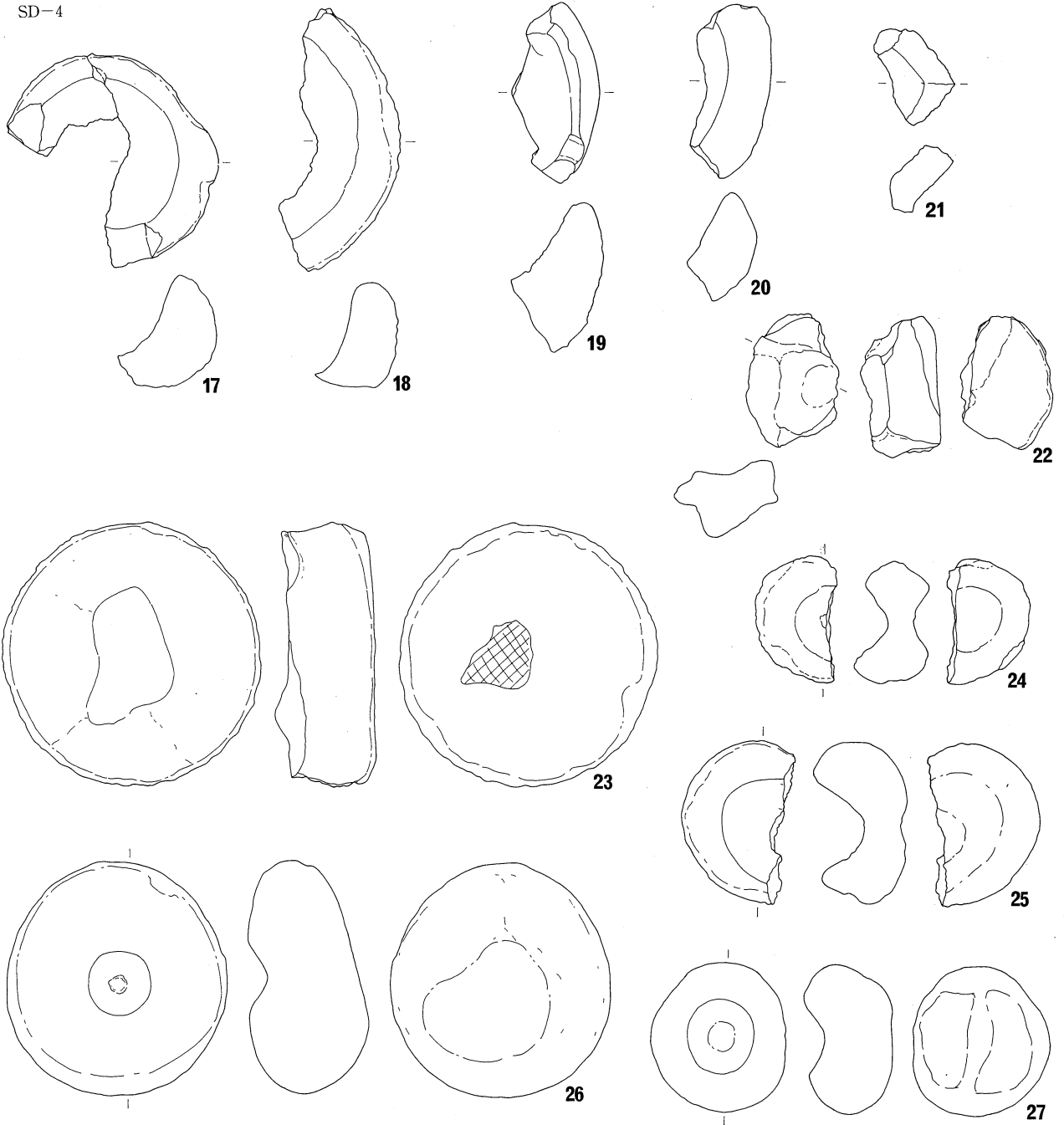


SD-4

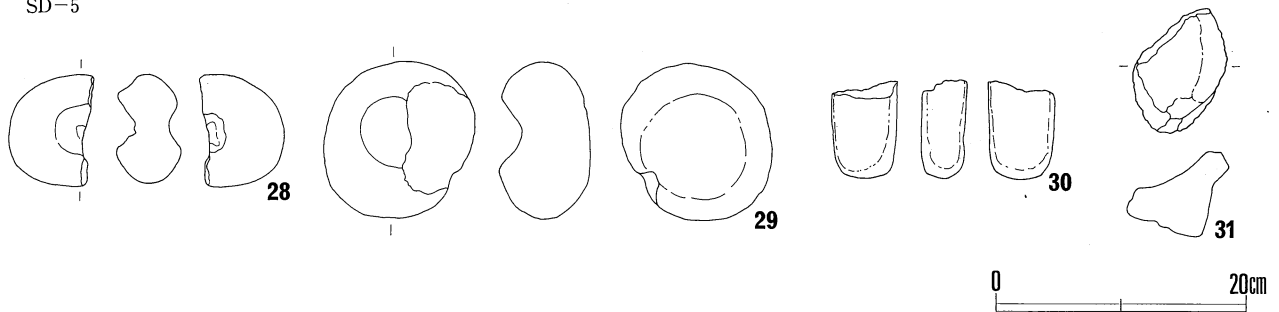


第39図 硯・石摺鉢など

SD-4



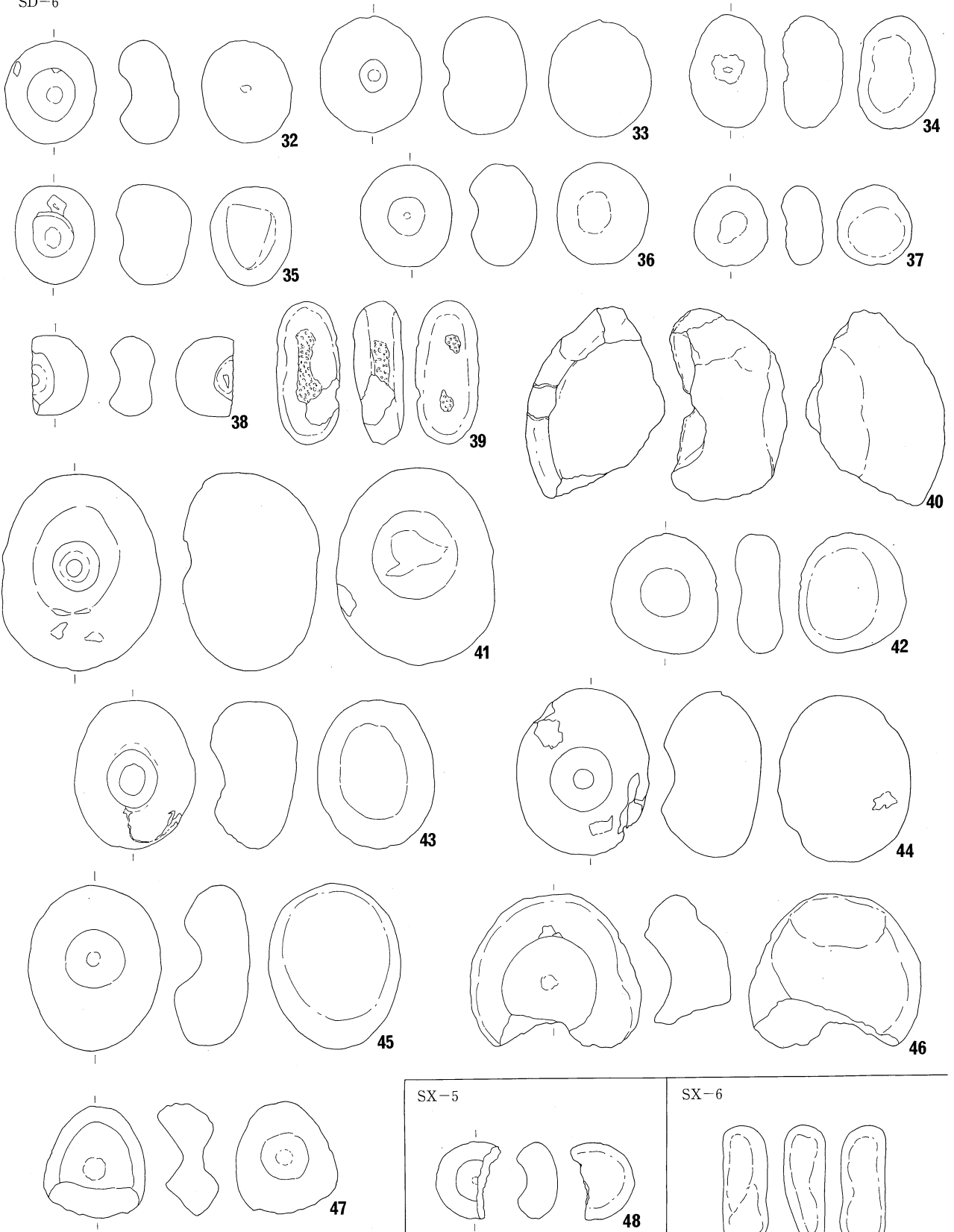
SD-5



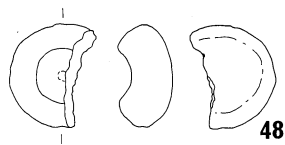
第40図 石摺鉢・凹石など



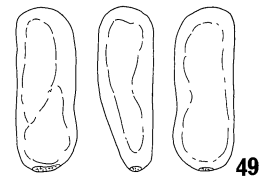
SD-6



SX-5



SX-6



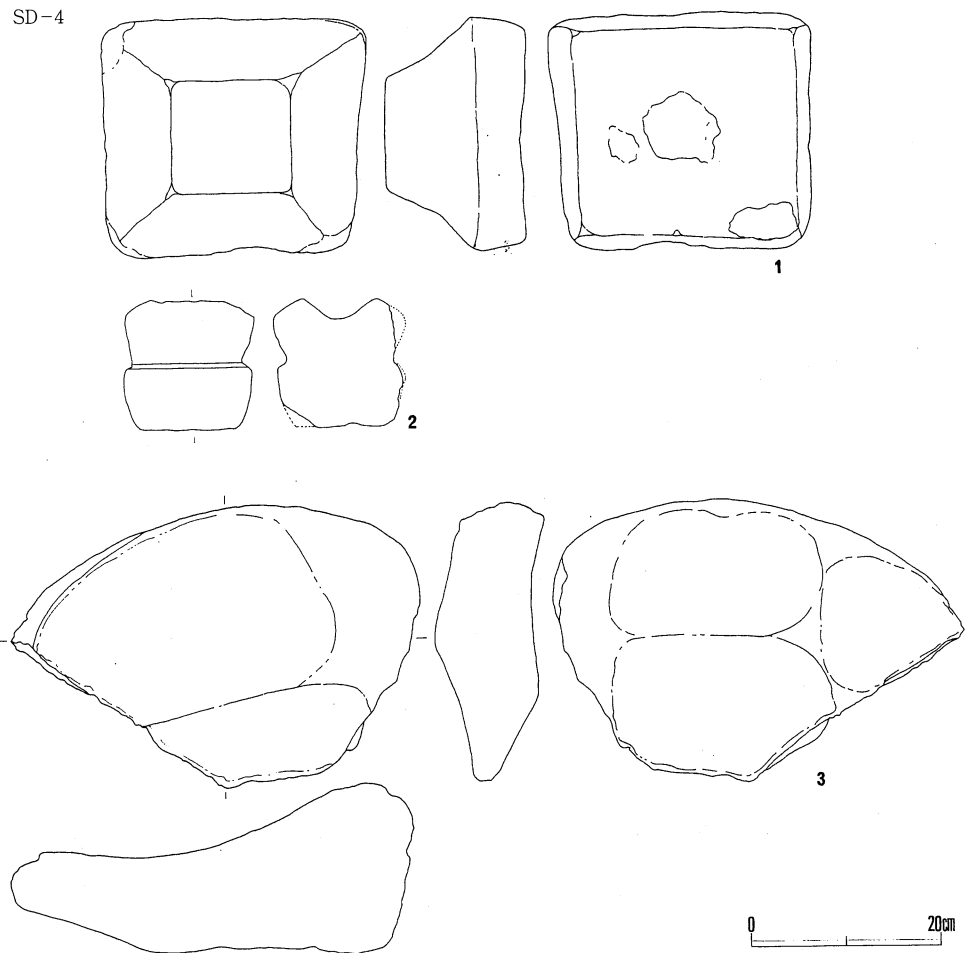
第41図 凹石・石摺鉢など



第42图 砥石

空輪はのちに頭部を凹めて凹石として再利用している。水輪の軒先の形式をみると、室町時代のこの地方に多くみられるものである。火輪状のものは、上下が欠損しており、図示は除いてある。

(B) 研磨台石は、粗質の安山岩を利用して、研磨に用いられたものとみられる。擦り面が上に3面、下に2面残されている。



第43図 石 造 物

#### 4 陶磁器

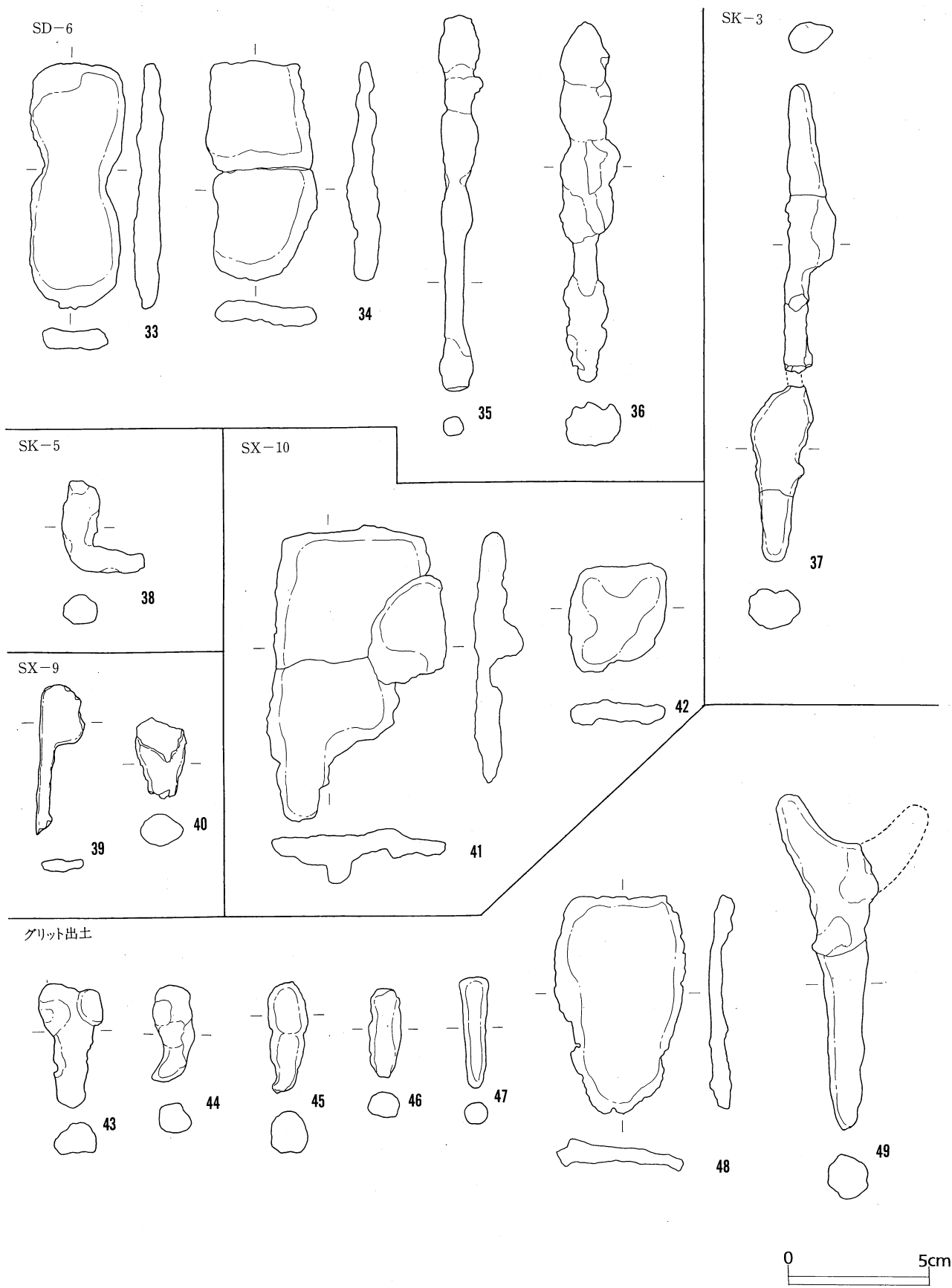
##### (1) 国産陶磁器 (49・50図)

(A) 珠洲焼 珠洲焼系製品は、中世前期の住居址SB1をはじめ、大溝から多く検出されている。

SB1からは、中壺・壺・大甕・甕・鉢・片口鉢(摺鉢)などが検出されている。これらは吉岡康暢氏の編年から13世紀半ばから14世紀にわたるものと思われる。したがって1号住居址(SB1)の存続年代は、鎌倉時代末から南北朝時代始めのころのものと思われる。

そのほか大溝から検出されたものに多くの片口鉢(摺鉢)がある。最も古いものは、櫛目が7単位で、曲線状に施されているもので、13世紀前半のものと思われる。これは使用痕跡が顕著である(42)。

(B) 常滑焼(写真12) 常滑の甕破片が3点が1号住居址から検出されている。これらは12～13世紀代のものである。12世紀代の三筋壺破片が、大溝SD2から検出さ



第44図 鉄 製 品

れている。

先端に嵌入部のある甕の蓋が大溝SD3・SD6から検出されている。そのほか壺破片が大溝SD6などから検出されている。

(C) 古瀬戸 (写真13・14) 検出された古瀬戸の年代は、常滑製品より約1世紀遅れて14世紀代から出現する。壺には四耳壺とみられるものがあり、畳付は平らである。水注壺の把手の破片や、瓶子とみられるものがある。

その他、花瓶・小坏・皿・平椀などがあり、茶碗では瀬戸天目の破片が9片検出され、接合できたものもある。これらは14世紀～16世紀代にわたる製品である。これらは外面下部が露胎であり、精粗の製品がある。

香炉破片が2点検出されている。大溝SD6から検出されたものは、袴形香炉で、口縁外反りし、胴部が張り、内外の底部が露胎で、3足である。14世紀代の製品とみられる。

天目茶碗・香炉などの出土により、14～16世紀の始めにかけて、調査地周辺に支配者層の存在が裏付けられると思われる。

(2) 輸入 (貿易) 陶磁器 貿易によって中国から輸入された陶磁器の内、青磁の破片は今回の調査で、66片検出された。白磁の破片は、18片である。しかし小破片のため、確定的ではない。染付の破片は、19片である。これは、貿易陶磁が中世では、一般的に白磁→青磁→染付の順に輸入され、使用されたたとしたら、遺跡の廃絶年代を反映しているとみることができる。

(A) 青磁 (写真18・19) 椀の破片が多数を占める。最古の青磁椀は、越州窯の12世紀の青磁で、畳付が平縁のもので、大溝SD5の出土である。大溝SD6出土で、細かい線描きで剣先文を連続させたものは、13世紀のものともみられる。大溝SD5出土で、白濁の釉部分があり、口縁が波状を呈する椀は、14世紀のものである。大溝SD6出土で、盛り上がった蓮弁文の椀は、14世紀後半から15世紀のものである。大溝SD3の集石部分から検出された青磁椀は、内面に切り彫りで、線描きの花文をもち、外面は、線描文の底部破片である。口縁部には、線描きの蓮弁文がみられるものであろう。そうすると15世紀末葉の輸入品とみられる。したがって、この集石遺構と、伴出した内耳土器・かわらけの年代も同時期に使用され、埋没年代は、16世紀初頭とみられる

(B) 白磁 (写真17) 白磁は小破片のため、文様がみられない部分が混在する可能性がある。18片が検出されている。年代は12世紀代から16世紀代の白磁が検出されているが、確定できないものが多い。器種は皿・椀・瓶・小坏などが検出されている。

口縁が端折れした器形で、外面の釉に小斑点のみられる椀 (1号住) と皿 (大溝SD6)

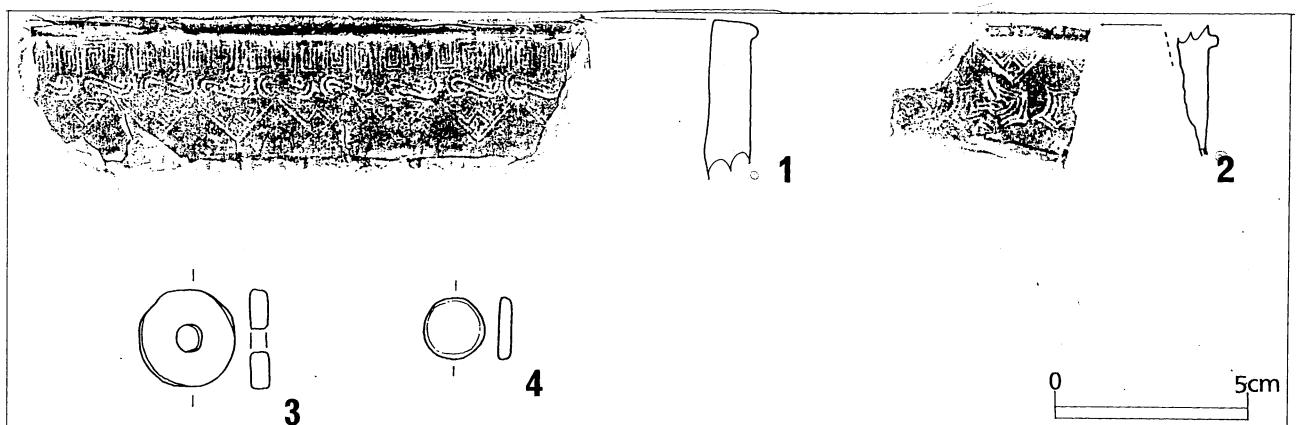
は、12世紀代のものである。椀（1号住）で、口はげのみられるものは、13世紀中葉前後にみられるものである。

（C）染付（青花）（写真17）染付も小破片で、19片検出されている。器種は、椀・皿・小坏・瓶などである。年代は15～16世紀代のものである。小野正敏氏（1982）の分類にしたがってしてみる（写真17の数字と対応）。

6、直口縁で内面に界線があり、外面は界線下に花文の見られるものは、染付椀B1群で16世紀後半の長享・明応（1487～1500）年代の遺構から出土する。7、内面に界線と草花文のみられるものは、染付椀DIV群に属し、15世紀後半から16世紀前半の遺構から出土する。8、口縁端折れし、内面に太い界線があり、外面の文様は、線描きの渦巻きに限取りしているものは、染付椀B群XIで、6と同年代で、山梨県荒巻本村遺跡から出土している。10、底面に界線がみられ、見込みに界線と文様のみられるものは、染付皿B2群で、16世紀後半の・永禄・元亀・天正（1558～1591）の遺構から出土する。12、見込みに2界線があり、内に文様があり、畳付無釉で界線があり、上に文様のみられるものは、染付皿B1群に属し、16世紀初めの遺構から出土する。13、見込みに玉取り獅子の文様か、と思われるものがあり、外面にも文様があると見られる皿分類は、B1群XIIに属し、16世紀の中葉の遺構から出土する。14、口縁ゆるく外反りし、内面に太い界線があり、外面は文様（不明）がみられる染付皿は、B2群IXに属し、16世紀後半の遺構から出土する。

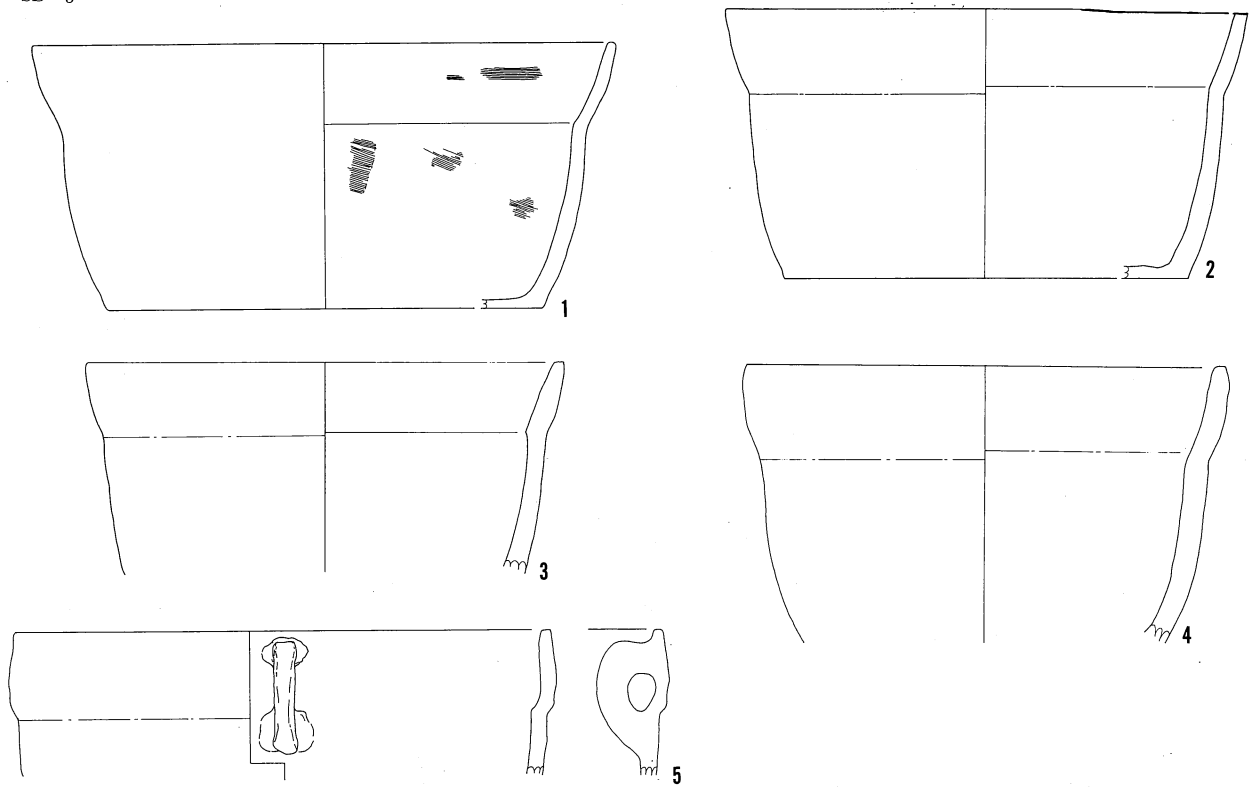
以後近世初頭の伊万里（有田）焼など、いわゆる六古窯製品は出土せず、近世末からの陶磁器が、僅かにみられるが省略した。

## 5 土器（46・47図）

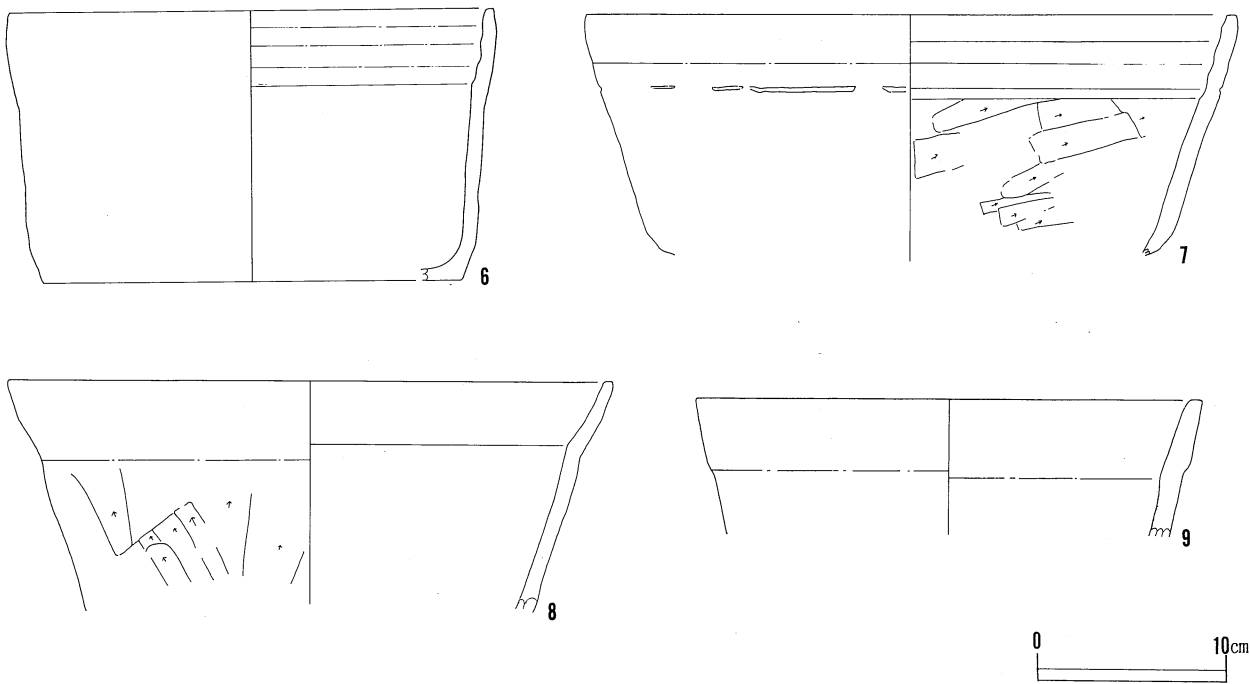


第45図 瓦質土器など

SD-3

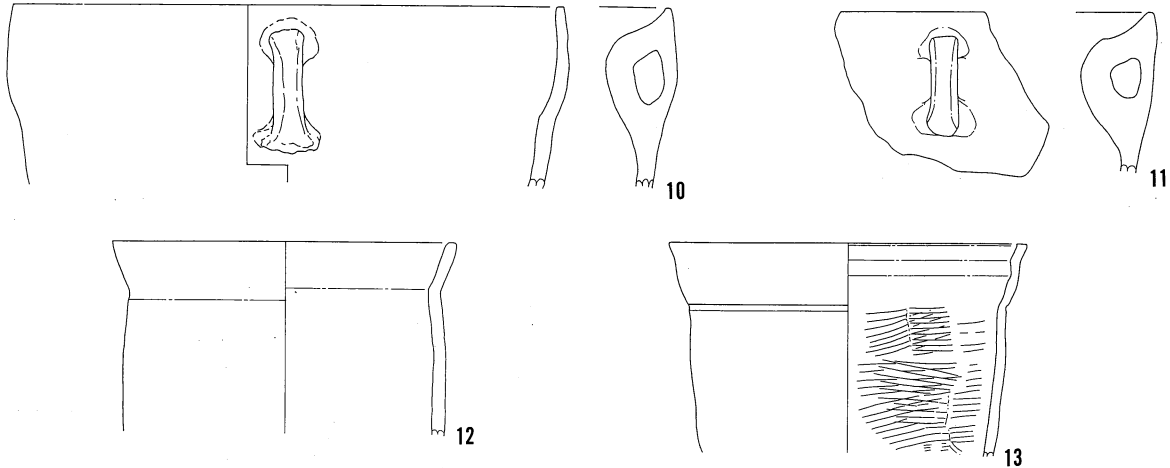


SD-4

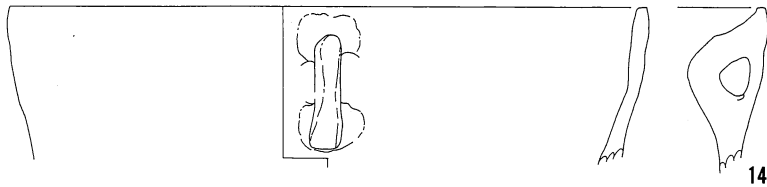


第46図 内耳土器(1)

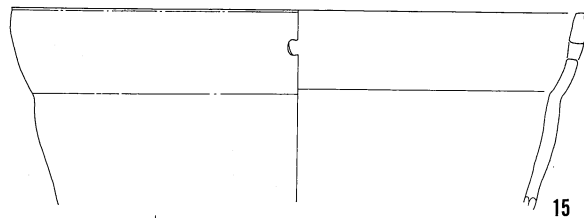
SD-4



SD-5



SD-6



第47図 内耳土器(2)

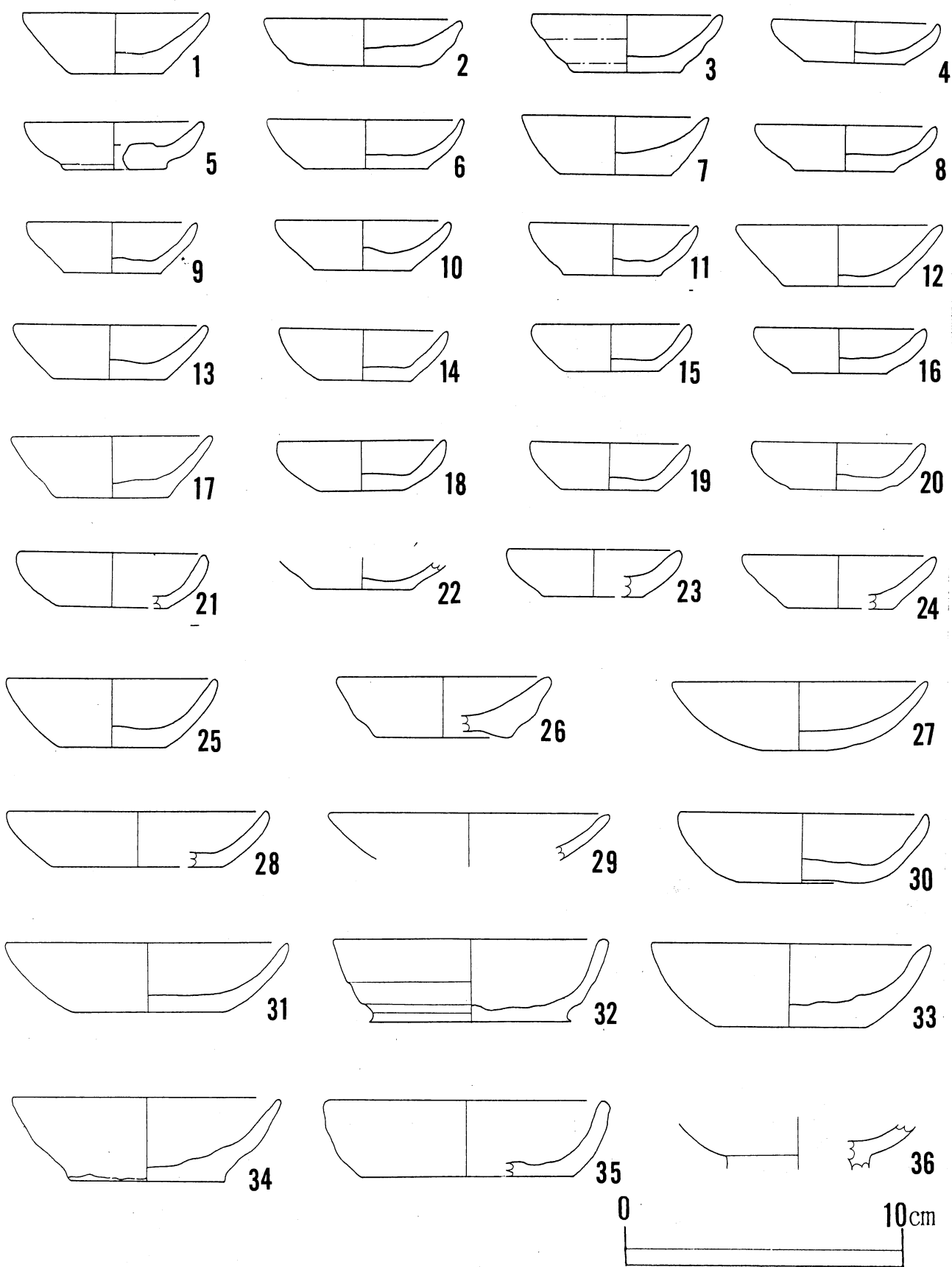
(A) 内耳土器 内耳土器の破片は、主に大溝の中から多く検出された。図示したものは、一部である。かわらけと同じく耐用年数の短いものである。底部の検出は少ないが、すべて平底であり、丸底を呈する古相のものはない。

大きさは推定直径18～19cmの小型のもの、25cm前後の中型のもの、30cm前後の大型のものがある。高さは15cm前後である。器厚は0.5～1.2cmの範囲にある。口縁形態は直立に近いものから、強くく字形に外反りするものがある。端部は平のものと、円いものに大別される。

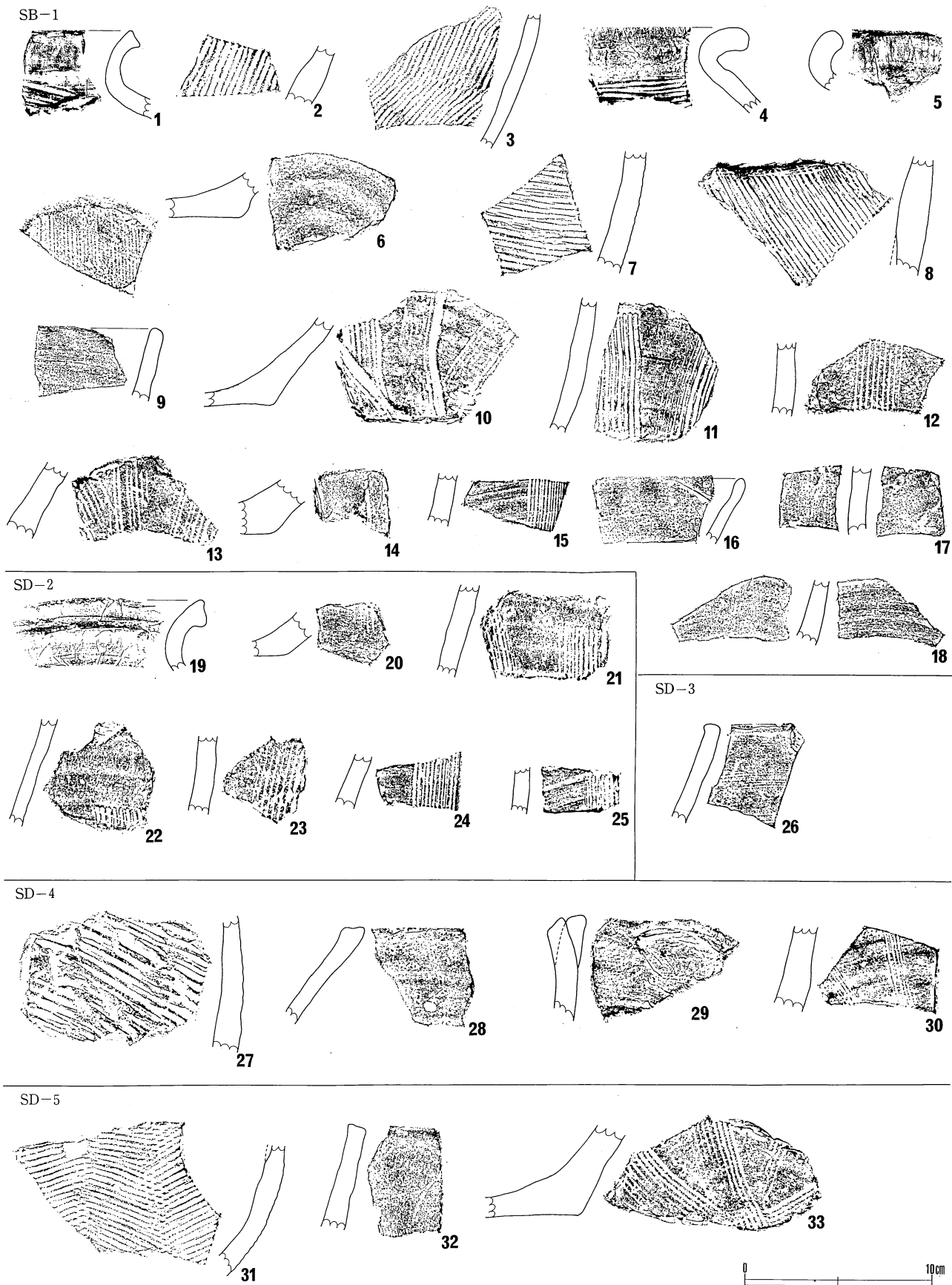
内耳の位置は、口縁上端にあるものではなく、やや下がった位置にある。以上の事柄を勘案して、出土内耳土器の編年は、15世紀後半から16世紀前半のものとみられる。

(B) 中世土師器(かわらけ)(48図)かわらけは小片を入れて、30片ほど検出して

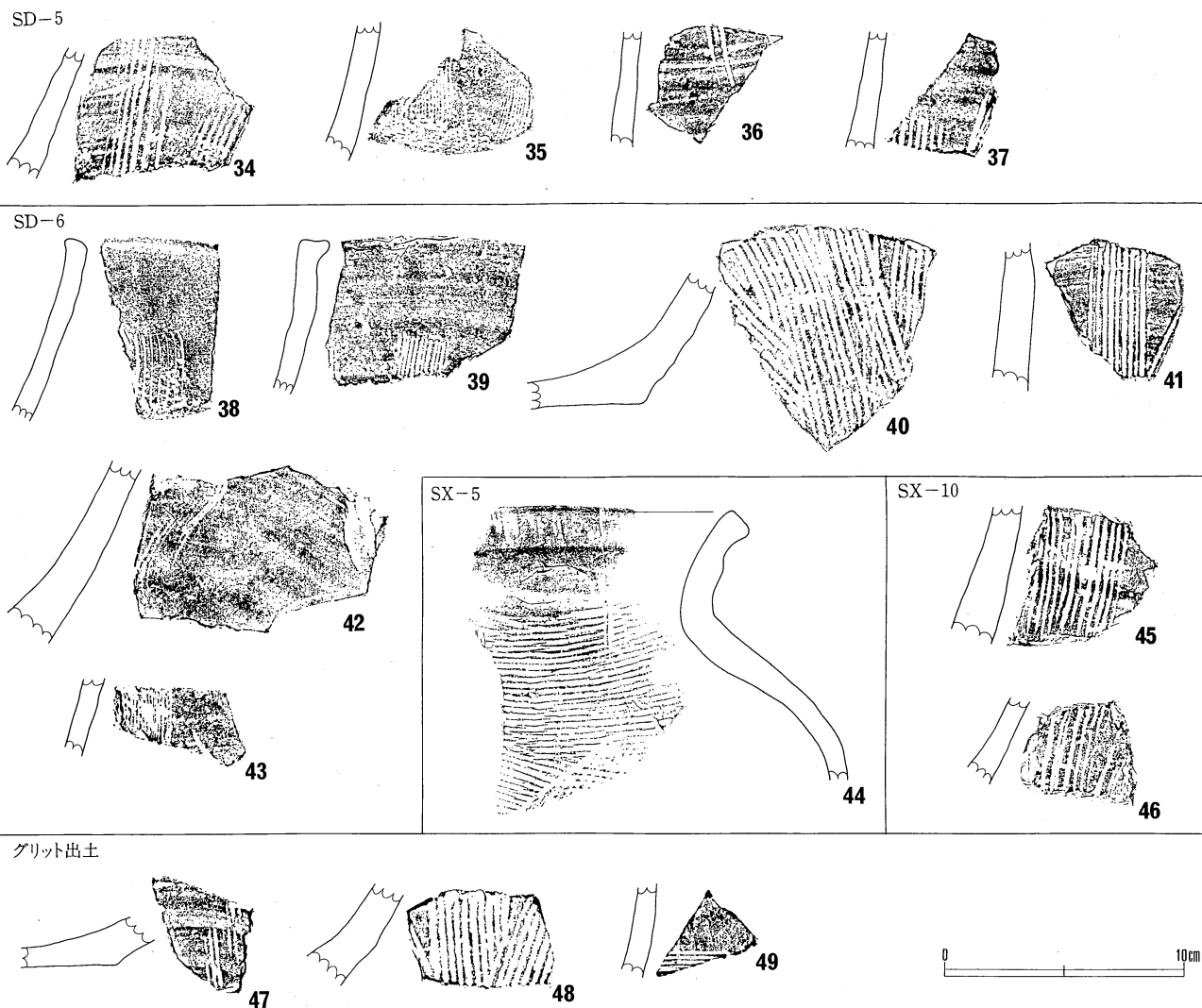




第48図 中世土師器 (かわらけ) など



第49图 珠州系陶器拓影 (1)



第50図 珠州系陶器拓影（2）

いる。大溝SD 3の集石からは、細描蓮弁文の青磁碗（34）が出土しており、3，6，18，19，24，25，30のかわらけが出土している。青磁碗の使用された年代が、15世紀末葉ごろと推定されるので、かわらけの年代の指標となる。

その他ほとんどのかわらけは大溝出土である。多量に出土している、高梨館跡のかわらけとの編年の検討が必要である。

碗の破片は大溝SD 6の埋没土から出土したもので、木材、カヤなどの炭化物と一緒に検出された。

## 第四章 まとめ

中野市西条は、平安時代末から始まる『市河文書』に登場する土地である。しかし西条岩船（東屋敷添）遺跡は、中野扇状地の扇央下に位置するため、遺構がやや深く埋没しており、詳細が知られなかった。

調査した結果からは、弥生時代中期後半からの遺物が検出され、埋没しているが、中野扇状地の第1の画期の開拓が、この時期より開始されたとみられる。

その後、古墳時代から平安時代前期までは、遺物が希薄であるが、平安時代後期になると、第二の画期をむかえる。住居址の存在や、土師器・須恵器が多く出土し、帯金具の検出は中野市では初見である。推定製鉄鍛冶址付近からは、羽口の破片と、鉄鋳滓が450個以上検出されている。諸産業に必需品の鉄製品を支配することは、支配者の権力の貫徹に必要なことである。

西条が平安時代末期にさかのぼる藤原氏（後の中野氏）の開発地との推定に誤りがなければ、今まで知られなかった鉄の支配と、藤原氏との構図が推定される。

鎌倉末から南北朝時代はじめとみられる、住居址の検出も中野市では初見である。多量の遺物が検出された湧泉址や、大溝の検出は、中世の屋敷地（または館）の存在を予測される。

都市計画道路と平行に検出された大溝は、横方向の溝であり、人為的に掘削されたものである。屋敷回りの防御用や、勸農用の水路の可能性がある。

中世では陶磁器の出土が多彩となる。常滑窯系の甕などがこの地でも使用され、平行して瀬戸窯系製品・珠洲焼系陶器がみられる。

中国産輸入陶磁器（貿易陶磁）は、青磁が多く検出され、ついで白磁・染付が検出されている。貿易陶磁のあり方は、遺跡の年代を反映しているものとみられる。

中世土師器（かわらけ）・内耳土器もかなり検出されている。これらも中世の生活を復原する材料である。

石器類では、凹石・石摺鉢・回転石臼・茶臼・硯などがあり、回転石臼は摩滅したものが多く、雑穀類の多用を裏付けている。茶臼・硯・貿易陶磁の検出は、文化程度の高い人々の存在を予測させる。

そのほか、銭貨・鍔金具などの出土もこの地の、中世の16世紀前半までの、復原に役立つ資料を提供したものと見える。

報告書抄録

ふりがな	にしじょういわふね（ひがしやしきぞえ）いせき
書名	西条岩船（東屋敷添）遺跡
編著者	檀原長則 ほか
編集機関	中野市教育委員会
所在地	〒383-0025 長野県中野市三好町1-3-19
遺跡所在地	中野市西条777 ほか
遺跡番号	中野市67
遺跡位置	北緯36°44′ 東経138°32′ 標高355m付近
調査期間	平成10年（1998）8月～12月
調査面積	3700㎡
調査原因	都市計画道路 岩船～西条線建設
種別	住居址 遺物散布地
主な時代	弥生時代中期・後期、古墳時代～平安時代、鎌倉～室町時代
主な遺構	平安時代 住居址・製鉄鍛冶址 中世 住居址・建物址・溝跡・井戸跡・湧泉跡
主な遺物	弥生時代土器・石器、古代土器・陶器・鉄滓・金属器 中世 土器・石器・陶磁器・銭貨・金属器
調査協力	中野広域人材シルバーセンター

西条岩船(東屋敷添)遺跡発掘調査報告書

印刷 平成11年3月20日

発行日 平成11年3月20日

編集・発行 中野市教育委員会

中野市三好町1-3-19

印刷所

高錦堂印刷所

写真1  
南から見た  
1号住居址



写真2  
東から見た  
大溝SD2・  
3・4

写真3  
西から見た  
中世の建物址  
大溝SD4・  
3・2・5



写真4  
東から見た大溝  
SD 6



写真5  
南から見た  
SX 6

写真6  
南から見た  
井戸址



写真7 鉄滓(1)

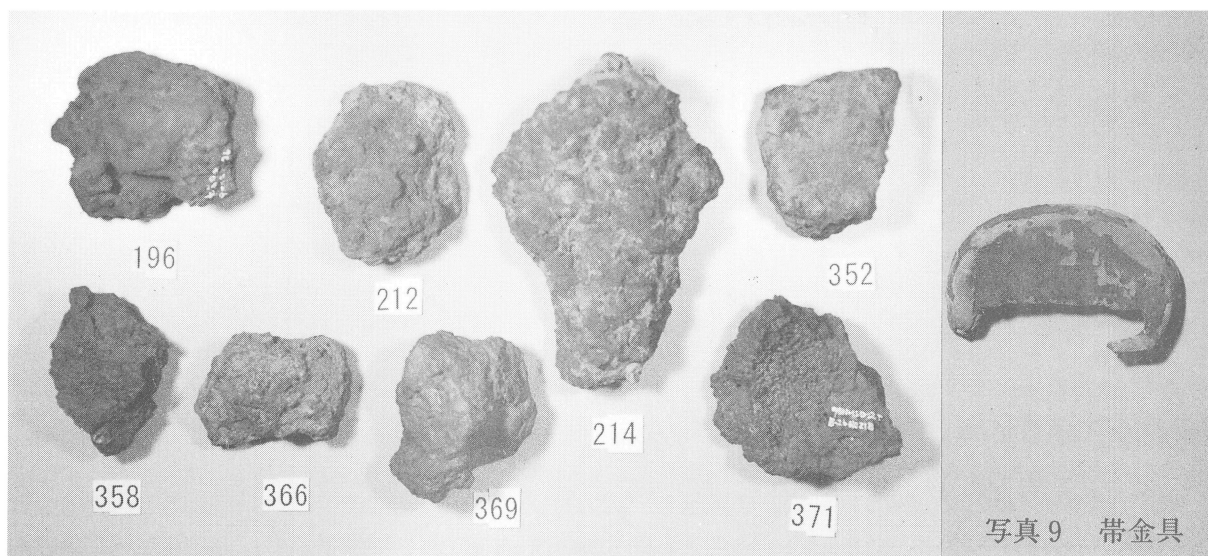
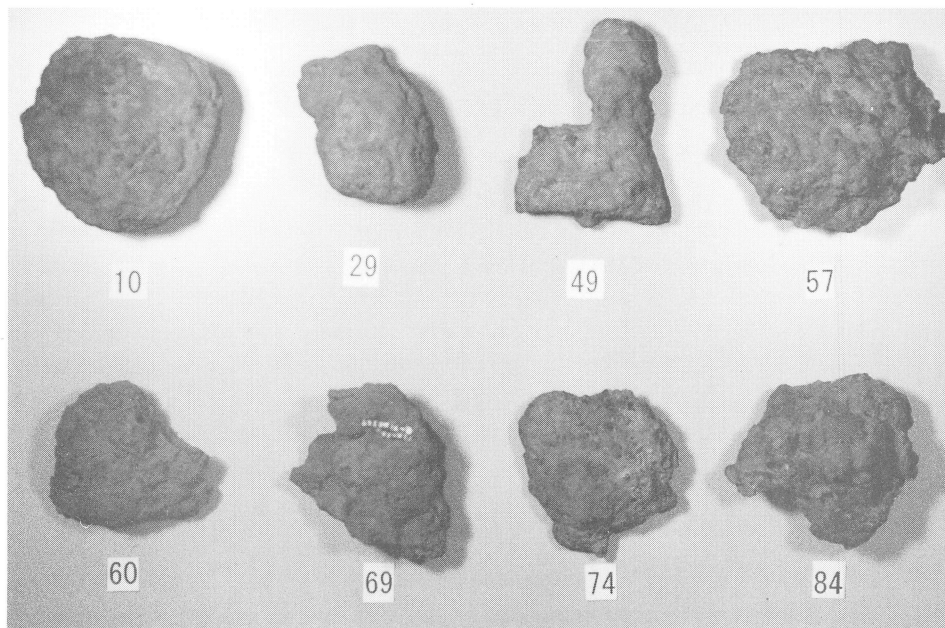


写真8 鉄滓(2)

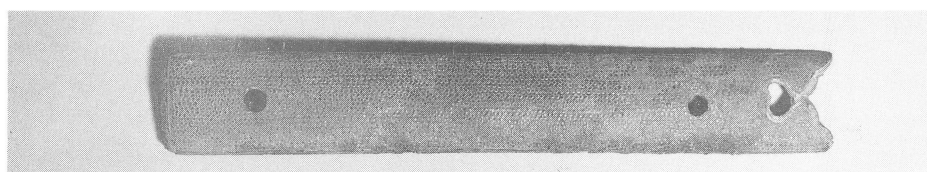


写真10 銚金具

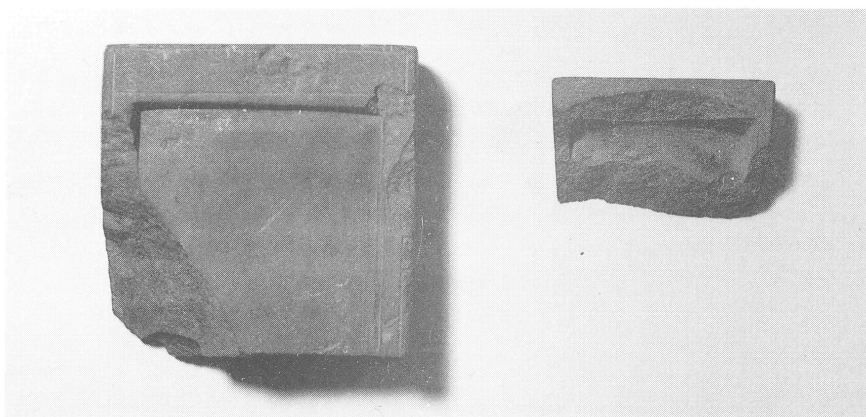


写真11 硯



写真12 常滑系陶器

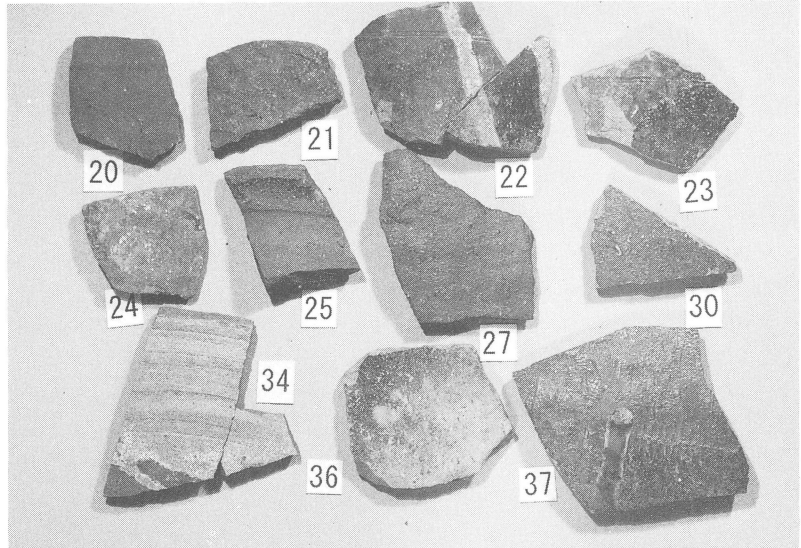


写真13 瀬戸系陶器

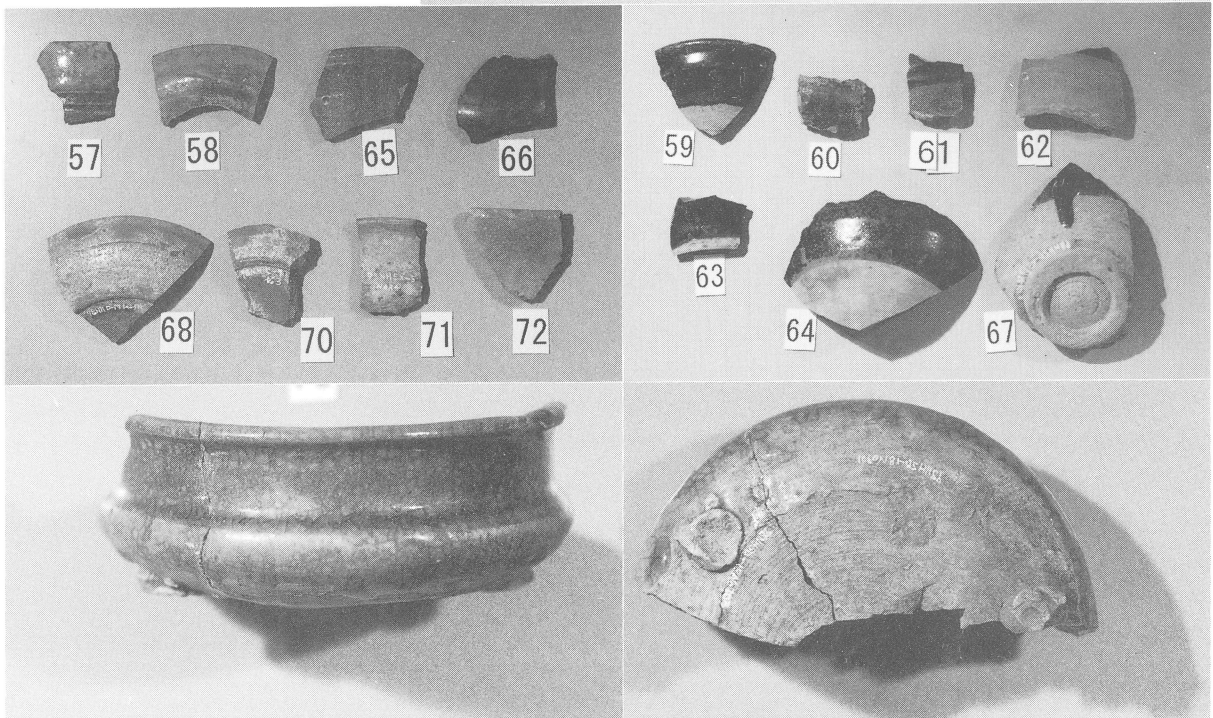


写真14 瀬戸天目

写真15・16  
瀬戸袴形香炉

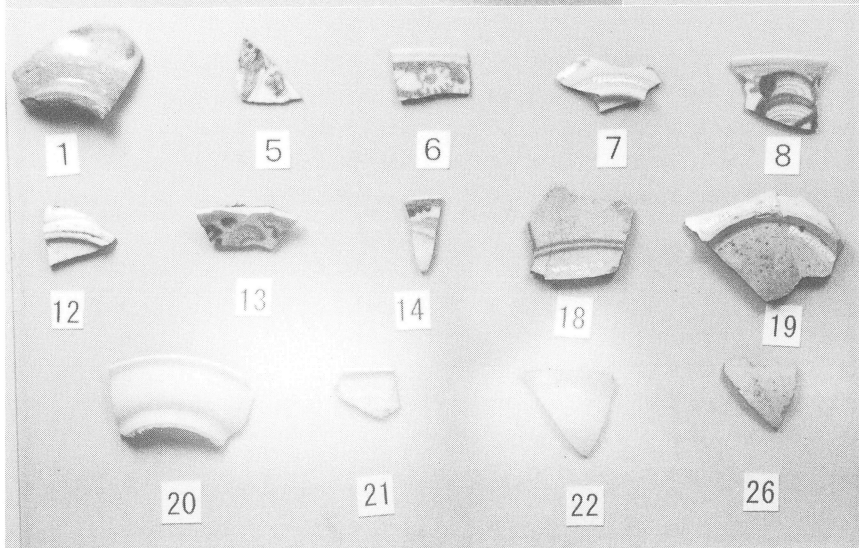


写真17 染付・白磁

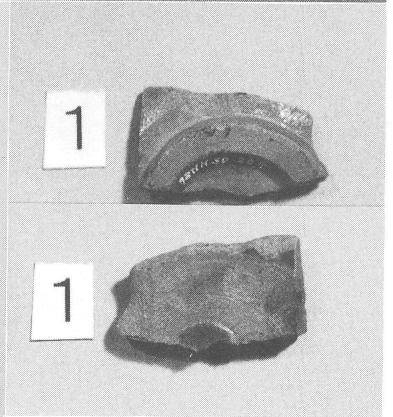
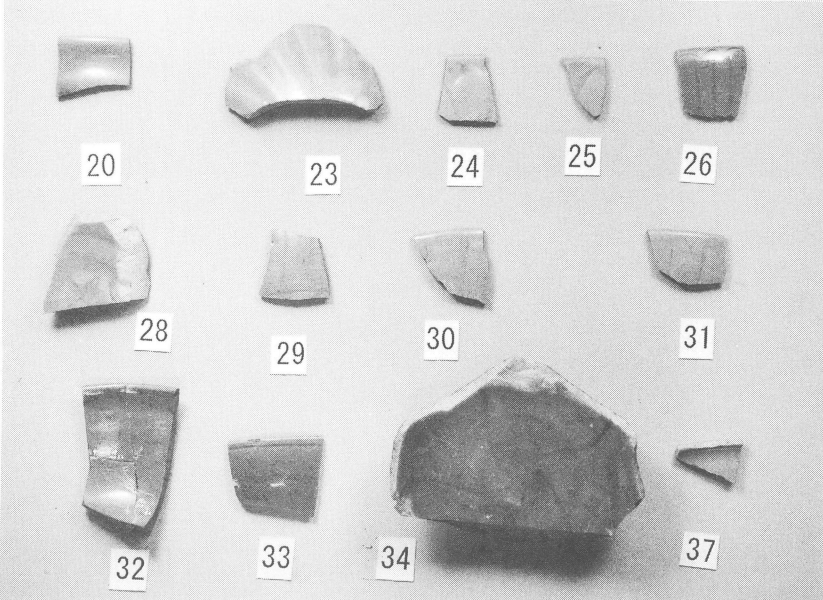
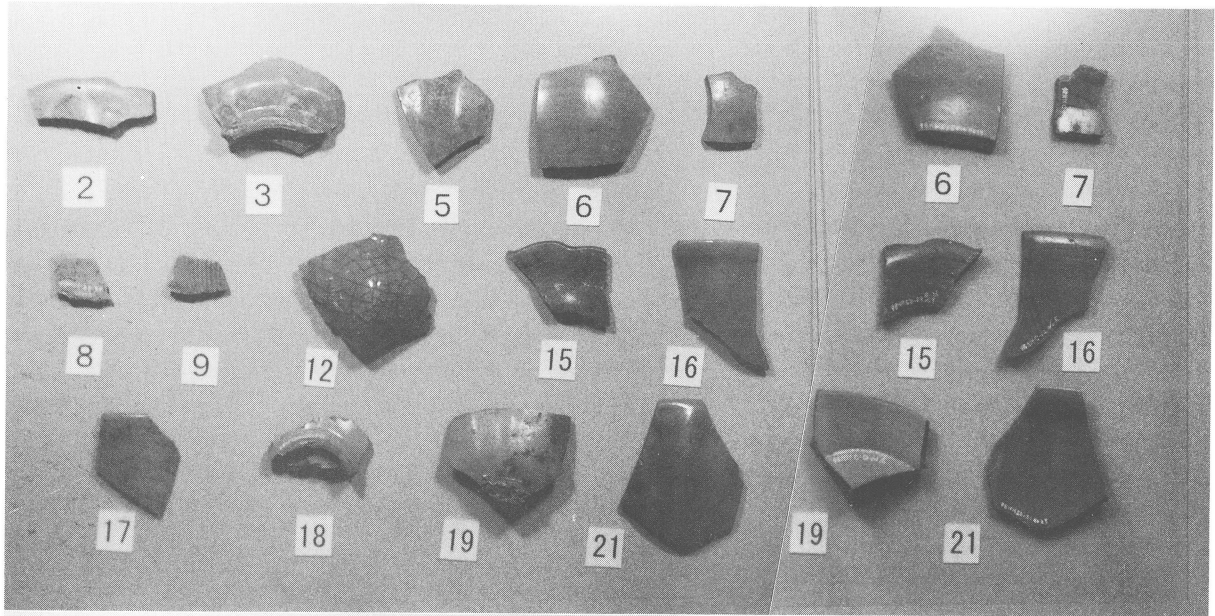


写真18 青磁 6～21内面

写真19 青磁 1内外面



写真20・21  
青磁の内外面